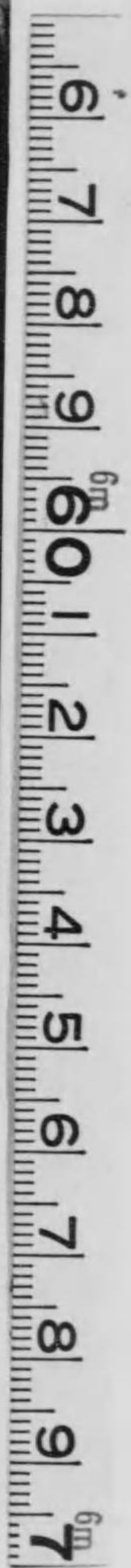
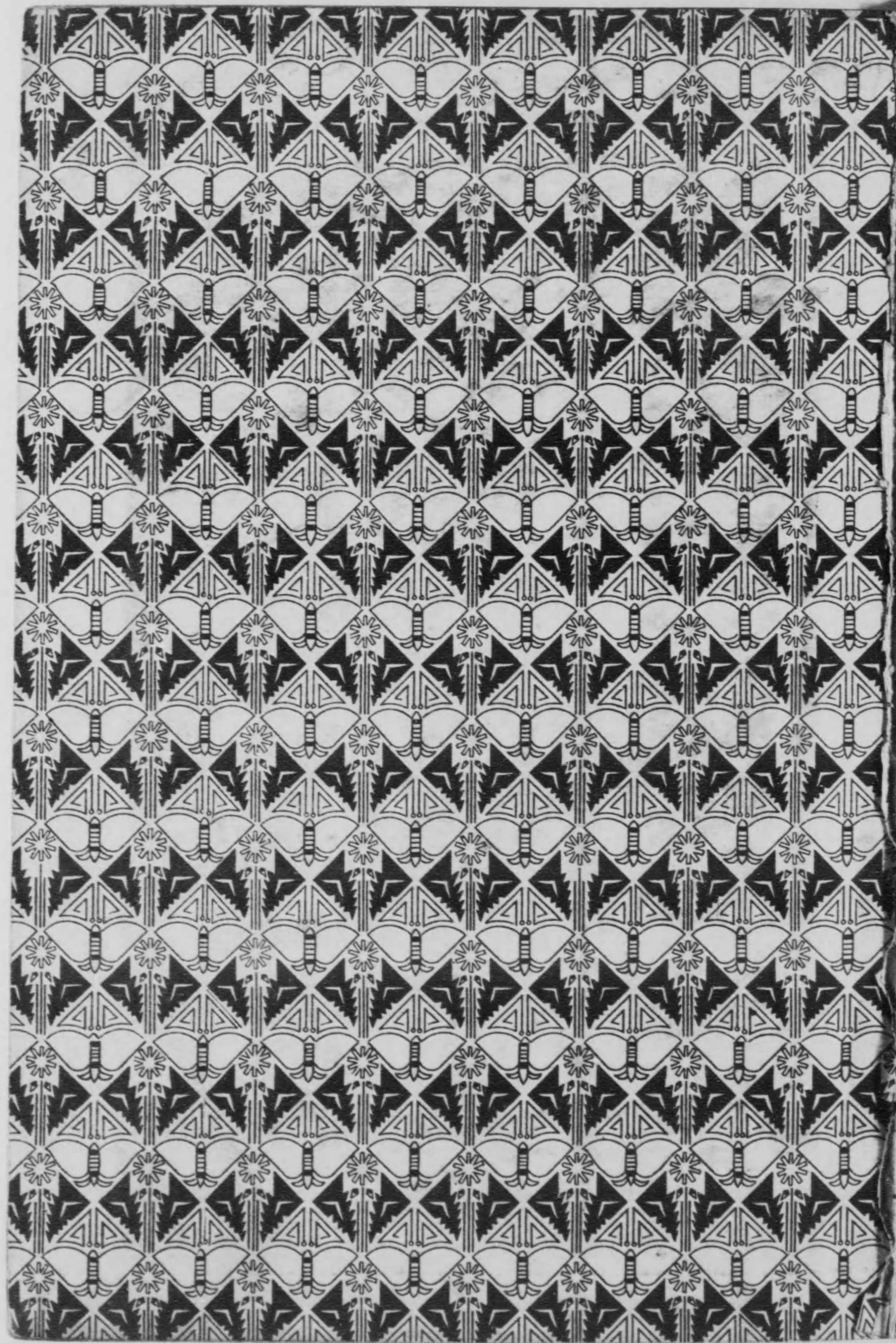


2636
59



始





263.6-59

島田牛稚
菊地勝之助 共著

世界地理變動教材の解説

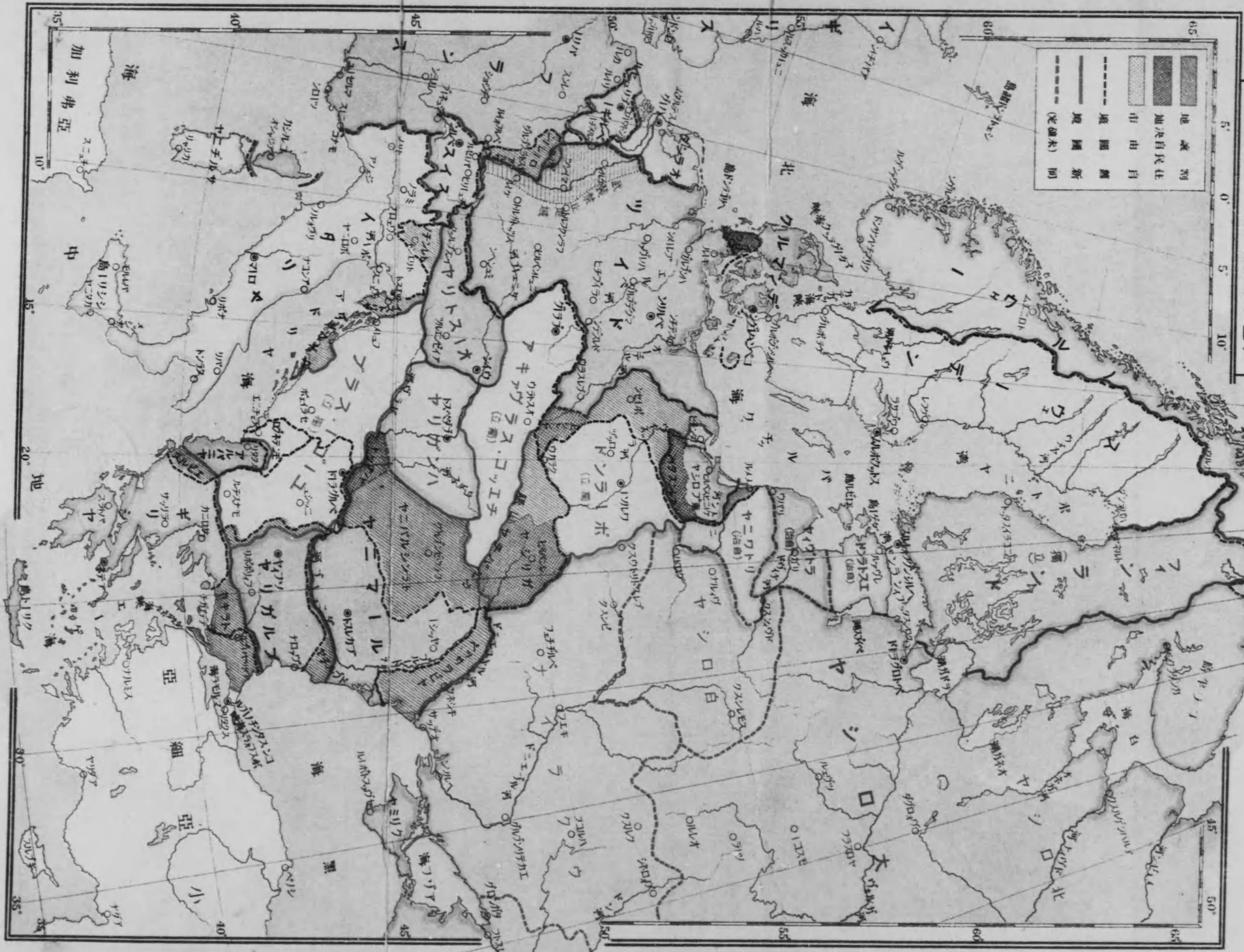
大正
9.9.14
内交

東京目黒書店發兌

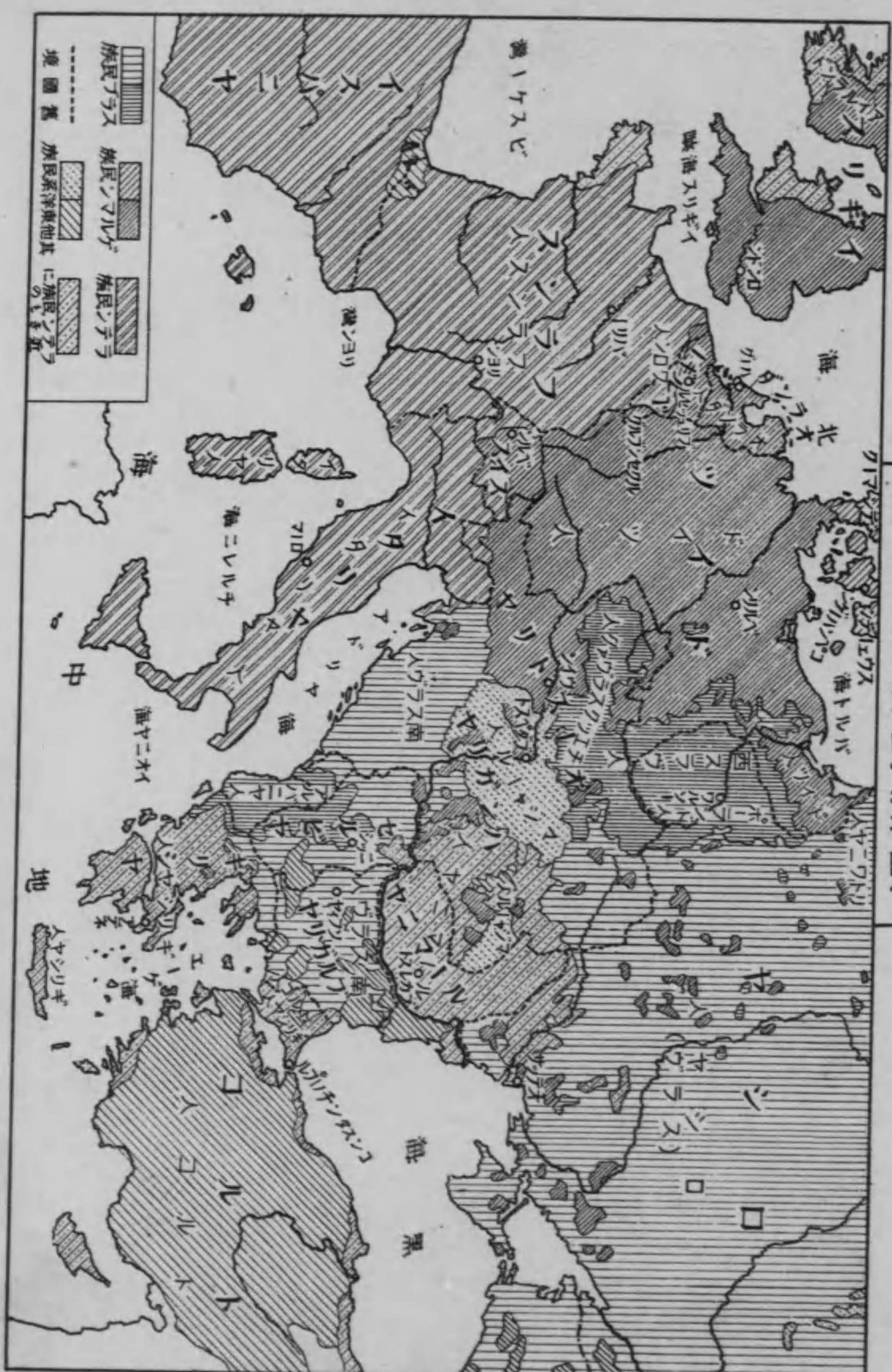
歐洲國境變動圖



動 變 の 境 國 洲 歐



圖布分族民洲歐



緒言

日新月歩の時勢を洞察して最新の智識を傳達する事を要務とせる地理教授に於ては、特に清新の教材を研究する事が何よりもつて大切の事である。然るに現時の如く、曠古の大戦は終熄したとは雖も、今尙ほ世界の秩序が回復されない所謂改造期に際しては、世界各處におこる變動を究め、國際關係の推移を熟知する事が頗る困難である。それかあらぬか、日々の參觀者の質問に於ても、地方からの問合せに於ても、近時著しくこの種の問題が殖えて來た。正しく戦後の地理教授界は、世界の變動を如何なる程度に教授すべきか、又之れに關する教材の研究を如何にすべきか、その中心問題をなして居る様に思はれる。

茲に於てか余等は淺學薄識をも顧みず、此方面の解説を試み

て些少なりとも外國地理教授上の参考に資し、又一般的には世界現時の大勢、國際關係の消息を傳へようと目論んでこの稿を起したのである。而て著者等は雜誌、新聞に散見せる材料を蒐集し、或は先輩識者の言に聽き、又は著書に依て啓發せられる所が尠くなかつたのではあるが、何様、事外交上の機微に屬して容易に吾人の推測を許さぬ部面もあれば、又改造の過程にあるので今日その歸結を豫想する事の困難なる事項にも逢着した。かくして著者等は幾度か事の眞否に迷ひ、岐路に彷徨し、逡巡遲疑、筆を投じて嗟嘆せる事も一再ではなかつた。

加ふるに公私繁忙の中に執筆したのであるから、十分に資料を究め、思索を練るの餘裕がなかつた。故に稿成つて見れば、事實の内容に於て、叙述の形式に於て幾多の不滿を生じ、徒に汪洋の企圖に馳せて、實績之れに伴はぬ憾がある。殊に紛糾錯綜せ

る外交問題を通俗平易に叙説する事を以て本書の使命を豫期したのであるが、それすら抽象的の理論に駛せて、佶倔難解の譏を免れる事が出来なくなつた。省みて愧汗の至である。

併し乍ら之れ等の不備は敬愛せる讀者各位の忌憚なき忠言是正によつて、漸次改竄を加へて行きたいと思つて居る。故に誤謬杜撰の點は徒に批難攻撃する事なく、直接著者等に助言せられる様に望む。尙ほ又、本書の編纂に際しては、幾多の著述又は論文を參案したのであるが、一々其の箇所にて参考書を明示するの儀例を執らなかつた。この點に關しては特に各著者に對し謹んで深謝の意を表する次第である。

大正九年五月下旬

著者識

世界地理變動教材の解説

目次

序説	一
第一 獨逸領土の分割と其の解説	九
獨逸の蒙つた負擔	九
開戦の原因は何	三
獨逸の將來	二九
一 アルサス・ローレン州	三
概説	三
兩州の沿革と回收の喜び	三
何故人種自決の方策を執らざりしか	三七
曾ては佛國もこの地を強奪せり	三九
割讓に依る獨逸の損失	四一

目次

二 ザール地方

概説

沿革

ザール炭田の價值

問題の落着

三 ラインランド

ライン問題

獨立宣言問題

條約上の決定

四 モレネー、オイベン、マルメヂー

概説

白耳義獲得の理由

ルクセンブルグ公國

五 シュレスウイヒ

概説

地域決定までの事情

この地の歴史

六 上部シレシヤ

概説

沿革

人口

七 ポーゼン

概説

普魯西の同化政策

住民

八 西部普魯西

概説

自由市ダンチヒ

目次

五九
五八
五五
五四
五三
五三
五一
五一
四八
四六
四五
四四
四四
四七
六六
六五
六五
六四
六三
六二
六二
六三
六三
六四
六五
六六
六七
六七

九 東部普魯西

概説..... 六

第二 露西亞の崩壊と其の解説

..... 七

露西亞の大革命..... 七

過激派政府..... 七

赤衛軍の武力宣傳..... 七

一 波蘭共和國

..... 八

波蘭の領域..... 八

沿革..... 八

獨領地の隔絶..... 八

係争地ガリチヤ..... 八

波蘭の獨立と獨逸の損失..... 九

波蘭の將來..... 九

二 芬蘭共和國

..... 九

概説..... 九

沿革..... 九

芬蘭の土地と人..... 九

芬蘭の内争と將來..... 九

三 其の他の諸邦

..... 十

西伯利政府..... 十

高加索政府..... 十

南露政府..... 十

小露政府..... 十

白露政府..... 十

リトワニヤ..... 十

ラトヴィヤ..... 十

エストニヤ..... 十

北露政府..... 十

第三 奥匈國の分裂と其の解説

目次..... 十

埃匈國瓦解の運命	107
埃匈國の雜多なる民族	110
埃匈國崩壞の顛末	114
一 埃地利共和國	116
概 説	116
沿 革	117
埃國の渾沌たる國情	119
埃國の將來	122
ダニユブ聯邦の計畫	125
二 匈牙利共和國	129
概 説	129
沿 革	130
亞細亞人の歐化した匈牙利人	131
過激化されつつある匈國の國情	133
三 チエツコ、スラヴァキヤ共和國	135

概 説

チエツコ、スラヴァキヤ共和國獨立の顛末	133
チエツコ、スラヴァキヤの國情及將來	138

四 ユーゴー、スラブ王國

概 説

ユーゴー、スラブ王國成立の経緯	140
南スラブ國の内訌と國情	142

五 伊太利の參戰と要求地

伊太利の參戰	147
伊太利の要求地	150
フユローメ問題	151
ダヌンチオ氏のフユローメ侵入事件	157

第四 巴爾幹諸國の興亡と其の解説

バルカン半島の混血人種と宗教	162
----------------	-----

大戰に於けるバルカンの意義……………一六五

一 ルーマニヤ……………一六六

概説……………一六六

沿革……………一七〇

羅馬尼の要求地……………一七二

バナット問題……………一七四

二 ブルガリヤ……………一七五

概説……………一七五

ブルガリヤの國情と參戰の經緯……………一七六

モンゴル人の血を受けたブルガリヤ民族……………一七八

三 ギリシヤ……………一八〇

概説……………一八〇

ギリシヤの參戰と國情……………一八三

四 コンスタンチノーブル……………一八六

第五

歐羅巴から勢力を放逐された土耳其……………一八六

土耳其の參戰と其の運命……………一八八

コンスタンチノーブルの位置と其の處分問題……………一九〇

亞弗利加植民地の變動と其の解説……………一九五

一 埃及

概説……………一九九

埃及に於ける英國の優越權……………一九九

埃及土民の騷擾……………二〇〇

二 舊獨逸領東亞弗利加

概説……………二〇一

三 舊獨逸領南西亞弗利加

概説……………二〇四

四 舊獨逸領カメルン

目次……………二〇七

概説

五 獨逸領トーゴ・ランド……………二〇七

舊獨逸領亞弗利加の將來……………二一〇

第六 亞細亞土耳其領の變更と其の解説……………二二三

亞細亞土耳其の分裂……………二二三

青年土耳其黨と土耳其の國情……………二二七

悲運な土耳其人の真相……………二三一

亞細亞土耳其方面に於ける聯合軍の作戰……………二三四

一 メソポタミヤ……………二二六

二 バレスタイン……………二二八

三 ハチヤス……………二三一

四 アルメニヤ……………二三三

五 シリヤ……………二三六

六 其他……………二三七

第七 膠州灣の割讓と其の解説……………二四二

講和會議に於ける山東問題……………二四二

山東問題の係争點……………二五〇

青島の歴史……………二五六

青島の現在……………二六〇

第八 南洋獨領地の分割と其の解説……………二六五

住民……………二六九

南洋諸島の占領狀況……………二七〇

南洋諸島の生産的價值……………二七三

南洋諸島の軍事的價值……………二七六

南洋に於ける獨領の沿革……………二八一

附 録

の 國際聯盟規約

加入脱退……………二八七

執行機關……………二八八

軍備縮小……………二九一

領土保全……………二九二

仲裁裁判……………二九三

爭議處理……………二九五

破約制裁……………二九七

爭議と勸告……………二九八

條約登録……………二九九

委任統治……………三〇〇

國際勞働保護……………三〇一

既設機關……………三〇四

修正と賛否……………三〇五

追加規定……………三〇五

ウイルソン氏の十四個條……………三〇六

世界大戰の經過……………三〇九

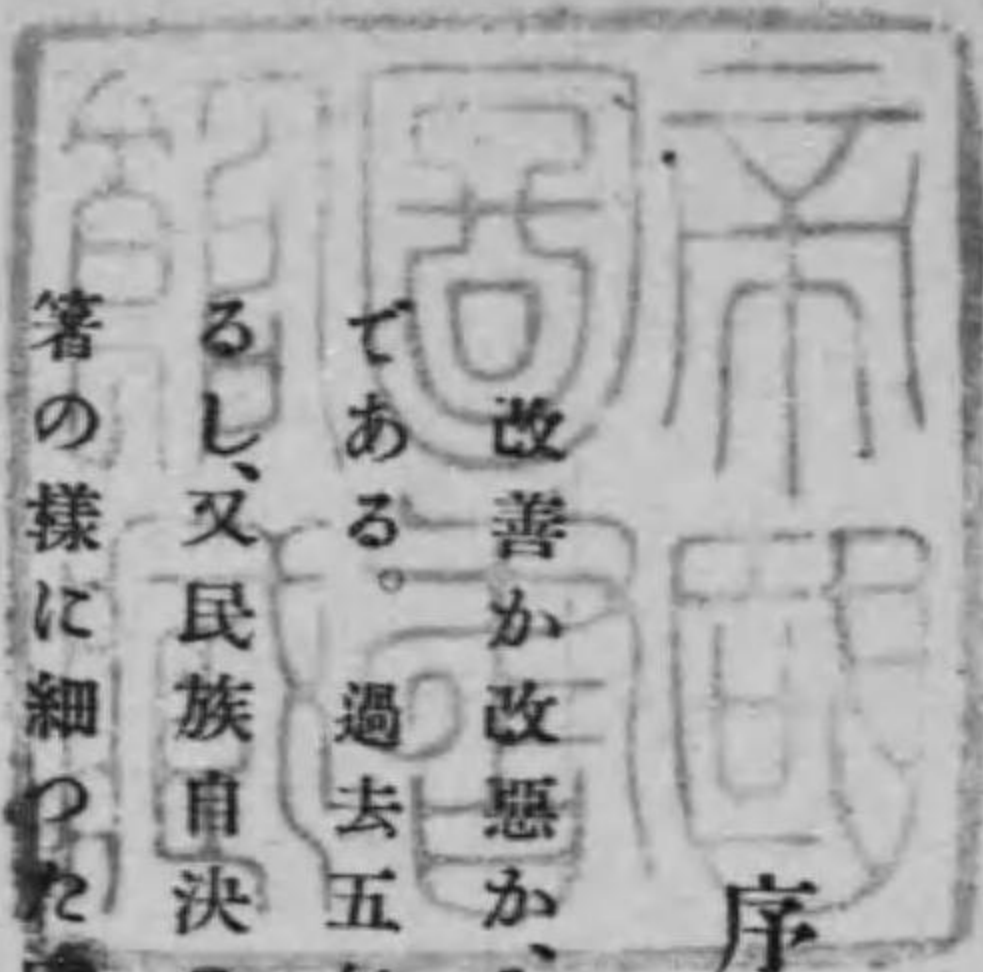
交戦諸國ノ國力比較一覽……………三六五

交戦諸國ノ動員數及喪失兵力數一覽……………三六六

目次終

世界地理變動教材の解説

島田牛稚
菊地勝之助 共著



序 説

改善か改悪か、その何れかは知らぬが、兎に角世界の舞臺が改造された事は事實である。過去五年間に互る大戦争の後仕末としては、戦敗國の領土分割も行はれるし、又民族自決の方策から雨後の筍の様に新らしい國家も興つた。其の結果火箸の様に細つた國もあれば、又太鼓の様に膨脹した國もある。有體に云へば、所屬問題が喧しうて結末のつきかねる處は、國際管理などいふ都合のよい名稱の下に一括して、其の實何處かの國がよい味をせしめるといつた如き、世間體を繕つての處分法もある。敵國側の境界だけ馬鹿丁寧に定めて置けば、後は與國側の妥協で適當に行くものであらうとの豫想ががらりと外れて、今尙ほ境界問題で小競合の

絶えぬ地方もある。

新らしい理想の世界を生み出す所の生みの悩みかも知れぬが、兎に角戦後の世界は落つく所へまだ落付かぬで、頗る混亂状態にある。果してこの混亂錯雜の状態が秩序平靜の世の中に歸するのは何時の日であらうか。

幾多の改造があつた。今日に於て、世界地圖を披けば誰人も氣の附くやうに、歐洲の舞臺は無茶苦茶にされた様な觀がある。從來の單純な色別が、今では目まぐるしい程の着色に變つた。新興小國の簇立、所屬曖昧の係争地、之れ等は現在に於て既に紛争の種であるが、更に將來に向つては一層幾多の禍痕を遺した事になるのである。或人が今度の戦争で歐羅巴は全く巴爾幹化せられたと言つて居るが、確かに、しか首肯すべき理由がある。

今度の世界改造の根本方策となつて居る民族自決などいふ事も、理想としてはよいかも知れぬが、果してこの實現が可能であり最善のものかといふと、必ずしもさうではないと思ふ節がある。國家經營上から云へば、必ずしも同一民族の集合といふ事が最善の條件ではない。寧ろ地理上の原因や、歴史的原因、乃至は思想經濟上の關係が主要な條件となるべきものである。よし異民族であつても、同一

宗教を有し、共通の經濟關係に支配されて居るならば、鞏固な團結をなし能ふのである。夫れが同一民族であつても、相互の間に思想上の融和が無く、利害相反の關係が存するならば、到底完全な國家組織を維持する事は出来ぬ。杓子定規にあて、同一民族を單位としての自決承認は、確かに其處に將來紛争の原因が潜んで居りはせぬかと思ふ。この意味に於て、今次の改造に伴つて興つた所の、チエツコスロヴァキア、ユーゴスラヴ國、又は芬蘭、波蘭の獨立の如きは、自然的關係を破つて人為的に築上げたといふ所に、將來の禍痕がある様に思ふ。元來國家の統整上から云へば、異民族との寄合世帯、必ずしも悪くはない。かくてこそ異民族相互の間に節制もあり遠慮もあつて、却て内輪もめがせぬ。それが若し所謂水入らずの仲間同士である、といふ互の吾儘が出る、といつた様なものである。

民族自決を徹底すれば、まだしも、場合によつては却て民族自決を妨げた例證がある。かのアルサス・ローレン洲の如きは、佛國に取りては臥薪嘗膽、その回收を一日千秋の思で待ち焦れて居たにもせよ、一應は他と同様人種自決に附すが至當であるとも云へる。然るに若し之れを人種自決の方策に出ると、或は佛國の手に復らぬかも知れんと云ふ心配から、何事もさて措き佛國の功勞に酬いるためとして、

この地に對する先取特權をまづ以て佛國に與へたのであらう。この事は佛國多年の復仇に對して尤もとも云へるが、併し内實ローレン洲では佛語を語るもの三割、アルサスでは僅々五分に過ぎぬといふ實情から推考すると、民族自決の方策も場所によつての適用であつて、平和條約の根本方針が全く此處にあるとは受取る事が出来ぬ。

尙ほこの他に於ても、シユレスウイ、ヒ人が此際全然獨立しようとする意志のあることを看破した丁抹に於ては、殊更獨領の南シユレスウイ、ヒ及びホルスタイン洲を人民投票自決地の範圍から拔出して、北及び中のシユレスウイ、ヒのみを自己の封土に復歸せしめようとなせる如きは、人種自決を忌避せる一例證として顯著のものである。

大國露西亞の分裂の如きは確かに大なる改惡の例である。何時の日に露西亞に統一を望む事が出来るか、殆んど豫期し難い事であるが、よし又過激派政府が最後の勝利を収めて、一種の合衆國を形成し得たとしても、國民間には何かと反目嫉視が起つて、紛亂から脱出する事は出来ぬであらう。平和來とは極めて表面的の事であつて、世界の國々に於ては今尙ほ争亂が所在に勃發し、露西亞の如きは一國

を擧げて收拾すべからざる戰亂の禍中にあるの状態である。

萬國の平和を期する目的もて出来上つた國際聯盟の効力も疑へば疑ふ餘地がある。之れ又理想としては至極結構のものであつても、實地に迂なるものでなくば幸である。かの山東問題が之れを世界的に眺むれば、些々たる一事件であるに關らず、米國に於ては之れが大問題となつて論議されて居る實情に鑑みるも、將來世界的の大問題が、國家の安危存亡に關する大問題が、國際聯盟の力で處決されようとは多くを信ずる事が出来ぬ。

他國侵略は道義上から見れば、世界の平和を攪亂するものであるから惡いには違ひないが、併し人口増加率の大なる國に於ては、生存上の原則として他へ發展雄飛する事は餘義ない事である。生存競争上の必要からは兵力に訴へても生活の場所を争ふ様な事が起るのは當然であつて、之れは單なる道德上の見地からのみ見るべきではない。生物生存上の原則として見るべきであらう。英米兩國の如く、歴大の國土を有する國家に於ては、或は他を侵略する必要皆無であるかも知れぬが、併し年々七十餘萬の人口を増加して居る我が國の如きは、將來却て國際聯盟の支配によつて、國家的發展を阻害される事なきか。之れ等は世界改造に伴ふ

當面の事柄として、確かに考慮すべき問題であると思ふ。

幾多の犠牲を拂ひ、五年の日子を要した大戦の歸結として、獨逸の軍國主義を倒す事は出来た。併し一のミリタリズムを倒した後では、之れより更に恐るべき十のボルセビズムに悩まされて居るの状態ではないか。澎湃として世界に漲つた過激思想は、今や二億の民衆に洗禮を施したと云はれて居る。これ等二億の民衆の過激思想や、又戦争によつて苛酷の境遇に沈淪せる七千萬の獨逸民族の憤懣心、乃至は新興諸國五千萬の人民の軋轢衝突、之れ等が世界を攪亂して紛争の禍因をなす事が無いとも云へぬ。新らしき理想の時代が現出する過渡期として餘儀なき事であるかも知れぬが、禍痕を遺せる世界の舞臺は、益々多事であつて等閑視するを許さぬの狀勢である。

世界の狀勢は上述せる如くである。茲に於てか日進月歩の時勢を洞察し、最新の智識を傳達し、以て世界的眼識を養成すべき地理教授に於ては、特に教授者平素の用意に俟つものが尠くない。殊に現時の如く國際關係の變動多く、世界的の事變が所在に勃發する世界改造期に臨んでは、教授者は一層細心世界的の推移に留意し、以て所謂手垢のつかぬ教材の蒐集に力めねばならぬ。

然るに一方吾人の據所とすべき地理教科書は、無遠慮に云へば最近を傳ふる事に於て極めて不忠實である。極端に云へば教科書ある事によつて却て現實を知らす事に阻害があると思ふ事さへある。異動せる教材はもとこれ教授者が不斷の注意によつて改竄しながら教授すべきものとは思ふが、併しこの筆法を全國一般の小學校教師に望む事は出来ぬ。矢張り教科書そのものがよくなくてはならぬ。十年前の教科書を今尚ほ使用せねばならぬ有様で、どうして現實の世相を知らす事が出来よう。尚ほ又新定の地理書について見るも、あまりに編纂者が大事をとり過ぎるためか、其の内容は依然として十年前の記事と大差ないのである。僅かに教科書は、現狀を培つた過去の國情を知らす意味に於て利用され、教科書の記事全部がその國の沿革の資料として活きて居るの現狀である。

不満はさて置き批評は別として、吾等は與へられたる國定地理書の忠實なる愛用者でなくてはならぬ。然らば現時の世局に應ずる外國地理の取扱を如何にすべきかについて、吾人は現行の教科書を基礎として、その見解を明らかにして置かねばならぬ。幸に小學校の外國地理教授は極めてその大項を述べるに過ぎぬから、露西亞・獨逸・埃匈國の如く戦争のために大變動のあつた國以外、即ち戦後も戦前

も大した變りのない國、又は戰禍と沒交渉であつた國々の取扱は、教科書に終始しても大なる間違はないのである。

尋常六年では、歐羅巴の總論に於て這般の世界戦争の概況及び影響を略述し、主要諸國に於ては、まづロシアでは現時の紛亂狀況を語り、國土の分裂、芬蘭、波蘭の獨立の主要を附説するがよい。佛國では多年の宿望であつたアルサス・ローレン二洲の回復を知らせ、埃匈國では四國分裂の現勢を語り、新興國の概要を述べべきである。又獨逸の教授にては、本國并びに屬領地喪失の模様、戦後に負ひたる負擔、及び將來興復の如何等につき教授すべきである。其の他の諸邦に於ても特に戦後の狀況を附説し、現狀を知らず事につとめねばならぬ。併し尋常科に於て外國地理を授ける本旨に顧み、微細の變動までも擧げて教授するの要はなからう。高等科に於ける外國地理では、幾分尋常科よりも附説の分量を多くせねばならぬが、これとて一般的に述べる事は出来ぬ。たゞ兒童理解の程度と時間的の制限に基いて其處に妥當の程度が生れると思ふ。本書は固より學年に應じ、各課を基礎として教材を解説し、又は取扱の要領を示すものでないから、此邊の手加減を明示する事が出来ぬのを遺憾とする。

獨逸領土の分割と其の解説



第一 獨逸領土の分割と其の解説

世界を敵として戦つた當然の酬いであると云つて了へばそれ迄であるが、實際戦後の獨逸は見る影もない亡國同様の悲境に立至つて居る。嘗ては世界の一大強國として、天下に睥睨せる獨逸が、かくも無慘の状態になつたかと思ふと、權花一朝の諺も實にと肯かれる。

敗軍の獨逸が、如何に重い荷物を負はせられて居るかは、平和條約の第二編以下第十二編迄に、事詳細に規定せられて居る。即ち、歴史上未だ先例のない莫大の賠償金を課せられ、剩へ、獨逸軍國主義の爪牙である陸海の軍備には、一大制限が加へられ、再び舊の獨逸に復活する事は、到底出來得ぬ様にされて居る。加之、獨逸の領地及び屬地は、四分五裂の状態となり、茲にも聯合與國が獨逸の復起を根本より阻止しようとする意志がほの見えて居る。いで戦後の獨逸が、如何なる分割を其屬領地の上に加へられたるか、尙ほ現下獨逸は如何なる窮狀にあるかを述べて行かうと思ふ。

獨逸の蒙つた負擔

今次の平和會議に於て、獨逸が蒙つて居る負擔の過重に想

到するときは、聯合與國の獨逸膺懲の曠恚が、如何に大であるか、想像される。まづ平和條約の順序とは違ふが、獨逸の蒙つた負擔について、以下一瞥して見よう。

第一、敗軍の獨逸に對して、五百億圓の償金を申し附けた事である。一口に五百億といふけれども、其總額は世界始まつて以來の巨額の賠償金であつて、しかもそれが戦後の疲弊に沈淪して居る獨逸一國に對して課せられた負擔であるから、實に骨に徹する程の慘酷な條件といはねばならぬ。償金の問題については、聯合與國の間に色々の説があつて、單に戰禍に基く損害を賠償せしむべしといふ説と、右損害に聯合國の戦費をも加へたる全額を賠償せしむべしといふ二説が、其の根基をなして居る。併し、出來上つた條約書には、各國と獨逸國との交戦期間内、其の陸上海上及び空中の攻撃に因り、同盟及び聯合國の普通人民、及び其の財産に對し加へられたる一切の損害に付、補償するのであるといふ風に記されてある。

この償金については講和會議に際し、獨逸委員のランツァッ伯などは極力抗議を申出て、之が輕減を主張したのであるが、何様英佛國などの眞意は、今度の機會に於て、十分獨逸を叩きつけ、二度と再び頭の上らぬ様にしてやらうといふ下腹があるのであるから、頑として其抗議を撤退し、佛のクレマンソー氏の如きは、今度の戦

争に於ては、獨逸のために聯合列國は三千億圓以上の國債を餘儀なくされて居る。然るに其賠償としては五百億であるから、僅かに六分の一の賦課に過ぎぬ。これなら安いものではないかと空嘯いて居る有様で、とうとう獨逸をしてこの條約に屈服せしめたのである。

この五百億圓の金は、一時に耳を揃へて出さねばならぬといふのではない。若しさうなると、到底獨逸の堪え得るところでないが、大體年賦支拂制になつて居るので、さし當り向ふ二ヶ年間に一百億圓を賠償し、以下三十年の期間内に、償金全部を辨済すべき取きめになつて居る。尙又償金は全部現なまてなくてもよく、貨物船舶有價證券其他獨逸をして、其の賠償義務を履行せしむるため必要なりと認めたる場合には、糧食及び原料品でもよいと云ふ事になつて居る。兎にも角にも、五百億圓の償金は莫大なものであつて、これが負擔によつて、獨逸は經濟的に永久頭が上らぬ事になる。少くも、當分は餘程苦しい立場になつて居る。

他人の疝氣を頭痛に病む顰かも知らんが、獨逸が果して聯合國の要求通り賠償に應ずる資力があるか無いかについて、心配して居る人がある。併し、獨逸をして列國の要求通り賠償せしむる根本則は、全く之れに對する聯合國の態度如何にあ

る事と思ふ。苛酷の條件を無理強ひに迫る事になると、恰も猛獸の負傷にも類すべき獨逸は、自暴自棄の窮境に陥り、結局は屈服するにしても、直に賠償を應諾せざるがために、戦争が再燃せぬとも限らぬ。今や、獨逸は無秩序、無警察の混亂状態となり、白晝伯林街頭には切取り強盜が行はれ、一般に盜るのが悪いのではない、盜られるのが悪いといふ事になつて居るさうである。露國の過激思想は滔々として獨逸を襲ひ、喰ふに困るものどもは、どうかすると危険な思想を懷き、大多數の國民は過激派の手先に豹變するか、乃至は社會の危険分子となつて、國內、否、世界に害毒を流す事となる。茲に於てか、聯合國最後の目的は、將來の獨逸を民主政治、非軍國主義の共和國たらしむるにあるか、それとも國民を飢餓に苦ましめ、其結果、過激派主義の蔓延する第二の露國にして、了ふかの二途、何れかの態度によつて、將來の獨逸が如何様にもならうと思ふ。

經濟的疲弊の極度に達し、國內は糧食燃料の缺乏に惱まされ、多くの生産工場は、勞働者の暴動と、物資不足のために、殆んど閉止の状態に陥り、昨年度に於ては、日々五千人づゝの失業者を出し、其の數積りて二十萬の多數に上つたと云ふ事である。而て、これ等の失業者は、單なる社會の弱者になるばかりで無く、上述せる如き社會

の危険分子と豹變しつゝあるのである。由來、獨逸人種の表徴であると稱せられて居た、赤ら顔のデツブツ肥太つた者は、これを今日の獨逸に多く見る事は出來ず、事實に於て、菜色せる國民と化し、唯因循姑息に日を送つて居ると傳ふる者がある。かくの如きは、一にこれ獨逸が經濟的に疲弊困憊せる證據であつて、自業自得の語を冠して評するには、あまりに氣の毒の感がある。

第二、獨逸の回復と復仇戦を恐れて居る英國、佛國及び伊國は、相共に強く結束して、講和條約中に獨逸の陸海軍に一大制限を加へて居る。制限といふよりも、寧ろ敗滅を圖つたといふ方が至當かも知れぬ。軍備の縮制を圖る事は、軍國主義の獨逸膺懲策としては、第一に來る問題であるが、仔細に條約正文を見る時は、再度獨逸を起たしめぬといふ聯合側、殊に英佛の眞意が見え透いて居る。

まづ、戦時一千萬以上の陸軍を出し得た獨逸に對し、一千九百二十年の三月三十一日迄に、之を歩兵七師團及騎兵三師團以下となすことに制限されて居る。而て、其兵員は、前記の期限以後將校及補充部隊要員を合せ、十萬人を超える事は出來ぬといふにある。然も、その十萬人中の統率者たるべき將校の總員は、其の編成の如何を問はず、司令部の要員を合せ、四千人を超える事は出來ぬ定めである。歐洲戰

亂勃發後、總計九十軍團以上の大兵力を以て、歐洲中原に鎬を削つた獨逸陸軍の末路が、この有様と聞くに至つては、誰人も喫驚の外はあるまい。理不盡にも、軍國主義を振翳して、世界を脅威せる靦面の天罰は、かくの如く峻烈であつたのである。

正整せる獨逸の軍事教育は、世界の誇りであつたのである。義務兵役最初の實施者である獨逸は、戦前、尙ほ世界何れの國よりも、義務兵役制の成果を表はして居たのである。兵役に服する事を男子最上の誇とせる獨逸人は、戦亂勃發の聲を聞いて、逃亡若しくは怯懦に類する舉動に出たものは、唯の一人もなかつたといふ事である。否、却て志願兵の群集は、簇出し、數日ならで常備兵數の約二倍、即ち百三十餘萬人に達したと傳へられて居る。大兵團の召集は、極めて靜肅確實に實施され、何等の不平もなく、家族との別離は嚴肅悲壯に行はれ、志願者は雀躍して軍役に服し、獨逸の各都市は、動員の間多數の群集が充滿したけれども、違法のため警察を煩はすものは、皆無といつてもよい程であつたといふ事である。

かくの如く、軍事教育を以て國の誇りとせる獨逸は、俄然今次の條約によつて、爾後一般義務兵役制度を廢し、獨逸國陸軍は志願兵のみに依り之れを組織し、かつ補充する事に規定された。加之、條約實施後、二ヶ月の終までには、獨逸國內陸軍學校

の數は、承認せられたる部隊の將校を補充する爲め、絶対に必要なるものに限られ、獨逸國內にある陸軍大學校又は之に類似する軍人養成の爲設置したる各種陸軍學校は、右規定するものを除いて、全部之れを廢止すべしとの取きめである。國內で受ける軍事教育に、大削減があつたばかりでなく、獨逸國は條約實施後、陸海軍人又は航空委員を、外國に駐劄せしめ、若くは派遣する事も出来ぬ様になつたのである。

この外陸軍に附屬する各種の兵器に制限を加へ、軍事用としての飛行機、飛行船はこれを一隻も有する事が出来ぬのである。ライン河の東方五十基米の築城工事、堡壘及陸地要塞は、一切その武装を解除し、且つ防備を撤廢せねばならぬ羽目に立到つて居る。

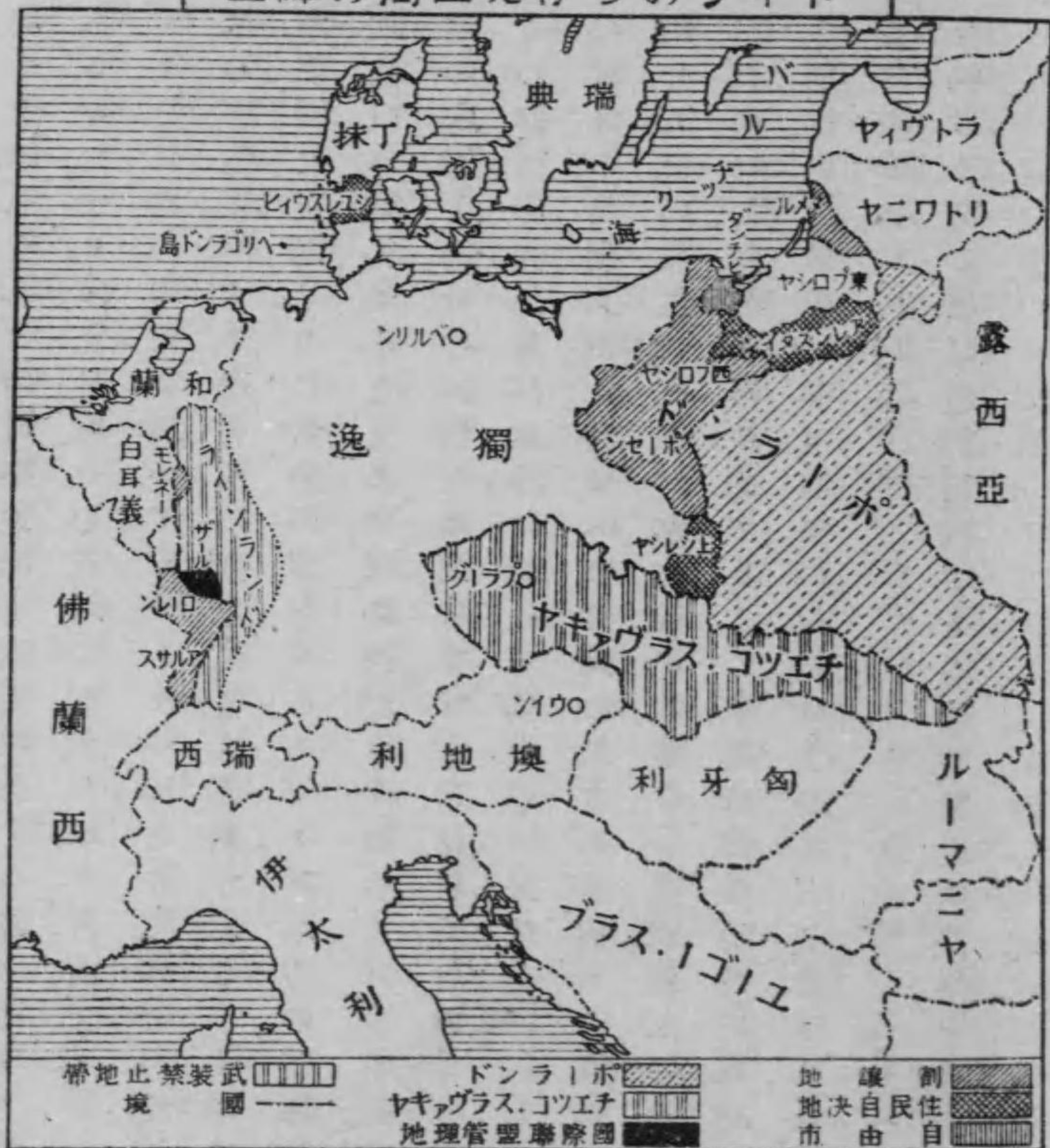
更に海軍の刪減策を見るに、主なる軍艦は悉くこれを聯合國に引渡さしめ、たゞ獨逸は海岸防備に必要な最少限度である、舊式船艦六隻、輕巡洋艦六隻、外に水雷艇驅逐艦各十二隻に止め、さしも戦時に於て猛威を逞ふし、列國海軍を脅かせる潜水水雷艇の所有使用を禁じ、又海軍飛行機、飛行船の製作を禁じ、其所有を差留めて居る。將來獨逸に於ては、常備艦隊の代艦の外、如何なる艦艇をも建造又は取得する

ことを禁じ、尙代艦建造に際しては、裝甲艦は一萬噸、輕巡洋艦は六千噸、驅逐艦は八百噸を超えてならぬ事まで取り決めて居る。かくして獨逸の復活と、其復興による復仇戦とを恐れ、飽くまで獨逸の擡頭を阻止しようとする魂膽がうかゞはれる。

かく海軍の殲滅を企てたのみでなく、嘗て獨逸の海軍根據地として戰時中英國を悩ました、かのヘリゴランドの要塞を一切破壊し、再び軍事上の目的を以て同島を經營する事を差止め、又キール運河を軍事用として使用する事を禁じ、スエズ運河同様の規定の下に、世界通商の要路として、使用せられる事になつた。其ため同運河一帯の要塞は、全部これを破壊する事になつたのである。

第三、以上述べた二項は、戰敗後の獨逸が蒙つた大なる損害であるが、更に領土及び屬地の分割に於て、又多大の損害を餘儀なくされて居る。この屬領地の分割について見るも、亦容易に、獨逸の復回を許さぬ英佛側の意嚮が見えて居る。まづ大體について云ふも、獨逸の四境に於て、他の國と隣接して居る地方には、悉く種々の形に於て緩衝地帯が設けられた事である。西、佛蘭西との緩衝地帯としては、ライン河左岸に所謂ラインランドと名づくる獨立地を設け、右岸一帯に一定の幅員(五十基米)を限つて、軍事上の施設を許さぬ條件を立て、以て再び容易に佛國內に攻入

壁障の周四たけらのツイド



第一 獨逸領土の分割と其の解説

るを許さぬ段取を取て居るのである。北方、丁抹への通路を遮断する目的としては、ジュレスウイヒの地を民族自決の獨立地帯とし、尙ほ東方露國との連絡を断ち、將來この方面に於て獨逸が野心を展ばさんとするのを阻止するため、の目論見から、人口一千二百萬を有する波蘭國を

再興せしめ、しかもこの緩衝地帯を鞏固ならしむる必要上、これに獨逸北部の要港である、ダンチヒ港を附屬せしめ、以て東プロシヤと西プロシヤを隔絶し、殊更東プロシヤを孤立の地位に置いて、プロシヤ一國としての勢力を減殺せんとせる如き、獨逸の膺懲に對する聯合國の用意は、實に周到である。かのアルサス、ローレン二洲が、佛國に復歸せるは當然の事とするも、ザール地方の富源地を殊更問題として、無理強ひに獲得せんとせる佛國の峻烈さには、ウイルソン氏ならずとも、あまりに苛酷の處置と、幾分の同情を獨逸に寄せずには居られぬ。

この他、亞弗利加及び東洋に於ける獨逸の植民地を一掃し、將來發展の根據地を奪ひ、獨逸の過剩人口を移すべき寸尺の地さへも、與へぬ有様である。かく屬領地が四分五裂の状態になり、將來復活の餘地なき様、戰勝國の餘威を以て、壓迫を加へられた事は、如何にも可愛想である。獨逸帝國の盛時を回想すれば、權花一朝の嘆なき能はぬ。戦争は強き國家の保持によつて、どこまでも敗者たる勿れの教訓が切實に表示されて居る。

分割されたる屬領地が、如何なる地理的歴史的條件を有する地方であるかの解説は、後段章を分つて縷述しようと思ふが、暫らく茲には戰敗國の獨逸は、今度の條

約を通じて、如何なる損失を人と土地の上にて得たかについて、大觀を加へて見よう。蓋し、今次喪失せる國民は、優質なる人民であるから、將來の國家發展上に及ぼす打撃の大なる事は推知するに難くない。又今回喪失せる地所は、多年獨逸國民の血と涙を以て得たる地方であるから、將來獨逸の復歸上、再び之等の地方を喪失する事は、國民の元氣を挫く事が尠くない。然も喪失せる地域が、天産の資源裕かの地方であるから、この經濟的損失は永久に獨逸復歸の創痕となる事であらう。この意味に於て、部分的の解説に立入る前に、一應、土地と人との喪失につき概説する事にしよう。

まづ人口に就て見るに、戰前の獨逸は、年々約八十萬人の人口増加をなし來つた國である。所が、開戦以來、一般の死亡率が激増せる上に、一方出生率が減少したから、著しく人口の低減を來したのである。全戰役を通して、獨逸の戰死者は、八十萬に及ぶと云はれて居る。しかも、其間國外に移住せるものが五十萬に達する上に、波蘭に割與すべき地域の人口が、約四百九十七萬、佛國に還附すべきアルサス、ローレン兩洲の人口が百八十七萬、合計六百八十四萬は、これまた獨逸の喪失すべき人口である。彼是合算すると、新獨逸の人口は、戰前六千八百萬と稱せられて居たも

のが、五千四百萬に減少した譯である。

講和條約による獨逸の割讓地はどうかといふと、まづ新興國波蘭には、農産物として麻、砂糖の産額の多いポーゼン州と、西プロシヤの一地方を割き、尙ほ石炭及び農産の豊かな上部シレシヤを人民投票による地域として、獨逸は分割するの餘儀なきに立至つて居る。佛國にアルサス・ローレンの兩州を還附する事は、世人周知の事であり、しかも其の地方が鐵、石炭の産出地として世界に名ある事は、多く説明を要せぬ事と思ふ。又丁抹にはシユレスウヰヒを割讓して、人種自決に委し、石炭の産出多きザール河流域の地は、聯盟委員の管理に委し、其實權を佛國に與ふる事になつて居る。佛國との間に將來係争のある事が豫想されるライン河流域のラインランドは、中立地帯として兩國間の緩衝地帯とし、白耳義にはモトレン・オイベン・マルメヂーの領域を讓り、海外領土にては、亞弗利加に於ける植民地の全部と、東亞の策源地、東方經營の根據地たる太平洋上の屬地、及び膠州灣の租借地を喪失するに至たのである。今、喪失せる地域が、如何に廣いか、又人口の上にて如何に損失があるかを一瞥する爲に、次に表として示さう。但し左表の數字の上には、多少誤謬がありはせぬかを恐れる。正しい統計が表れたら、適當に修正されん事を望む。

(地名)	(面積)	(人口)	(割讓國)
アルサス・ローレン州	五、六八〇方哩	一、八七四、〇一四人	佛國
ザール	七三八	二、三四、二〇〇	同(國際管理)
シユレスウヰヒ	一、八〇〇	三〇〇、〇〇〇	丁抹人民投票
マルメヂー・オイベン地方	三八二	一一九、一八四	白耳義
上部シレシヤ	五、二〇〇	二、二〇〇、〇〇〇	波蘭(人民投票)
ポーゼン	一、一三〇〇	二、一〇〇、〇〇〇	波蘭
西普魯西	九、九〇〇	一、七〇〇、〇〇〇	同
東普魯西	四、六〇〇	五、四〇〇、〇〇〇	波蘭(人民投票)
同(メメル)	九一〇	?	リトワニヤ
トーゴ・ランド	三三、六六八	一、〇〇三、六一二	佛國
カメルン	三〇、五〇一九	三、五〇一、五三七	英佛協定
獨領西南亞弗利加	三、二二、四三二	一〇二、五八六	南亞聯邦(委任統治)
獨領東亞弗利加	三、八四、一七〇	七、五一五、六六〇	英國(委任統治)
獨領ニューギネヤ	九二、二、四四	五、四五、四七八	濠洲(委任統治)
ナウル	約一、五	二、〇〇〇	英國(委任統治)

サモア	一〇〇〇	西新蘭委任統治
マーシャル、マリヤナ、カロリン	九六五	日本(委任統治)
膠州灣	二一三	一九六四七〇
		日本(一時讓與)

以上述べた所によつて、大體戰敗後の獨逸は、如何なる負擔があるか、分り、尙ほ、聯合與國が戰勝の餘威を以て、獨逸の復歸を許さぬ魂膽が窺はれたかと思ふ。固より、これ等外交上の機微に就ては、吾人の容易に論斷すべき事ではなく、又本書の直接目的とする所でないから、委曲を盡しての説明は、之を省くつもりである。本書はその標題の示す如く、今次の講和に基き、變動を生じたる個所の解説を目的とするのであるから、早速變動ありし舊獨領地の解説に入るべきであるが、以上述べ來つた所の歸趨點として、何故かくの如き國情に獨逸は立至りたるか、換言せば這般の戰爭目的について一瞥し、戰前如何なる目論見を立て、居たか、その國策の一端を窺知するの要があらうかと思ふ。眞に獨逸の現状を知らんとする者のためには、特にこれ等について知る事が必要であると思惟し、暫らく筆を其方に向けようと思ふ。

開戦の原因は何

戦後の世界大變革を公平に眺める上には、まづ以て、這般の戰

争目的が奈邊にありしかを究めねばならぬ。茲に於てか、暫らく開戦の眞因について述べて見よう。但しこの開戦の原因については、色々の説があるから、容易にかうと斷ずる事は出来ぬが、世に巴爾幹通として知られ、世界の氣勢に就いて、常に椽大の筆を揮はれる長瀬氏の解釋は、頗る妥當であると思ふから、氏の説を根基として、以下開戦の眞因と思惟される部面について述べよう。

まづ大戰の眞因を簡単に云へば、獨逸多年の畫策であつた東漸政策が、諸他の邦國の國策と衝突せる事の一事は、極めて有力なる開戦の眞因として、擧げる事に躊躇せぬ。而して、尙ほ英國との覇權爭奪が、これに油を注いで、益、この戰禍を大ならしめたものと見る事が出来る。然らば、何故獨逸の國策として、東漸策を講ずるに至つたかといふと、獨逸は一八七一年に佛蘭西と戦つて勝つて以來、世界一等國の班列に伍する體面上よりするも、又英佛露の強國と對峙する上にも、常に苦慮の種となつて居たのは、年々多數の人口増加に應ずる領土の狭少といふ事であつた。殊に獨逸の位置は、北方に偏在して居る上に、露國と同一事情で、世界の公海に出づる良好の門戸を有つて居らぬ。この良港の海を得たいと云ふ事と、年々八十萬以上の人口増殖に應ずる領土の獲得の上から、常に獨逸は眼を八方に配つて居たが、

最早歐羅巴の中央では寸尺の地もないし、南亞等の地方では、英佛等の先進國に先廻りをされて、良好の地所は最早残つて居らぬ。所が幸にも、小亞細亞のメソポタミア大平原は、獨逸にとつては詭向の所であるから、食指頻りに動いて、遂に所謂東漸政策に憂身を窺す様になつたのである。

一方獨逸の東漸策には、所謂日常りよき地に生産原料を得んとする慾求や、異常の工業發達に基く當然の歸結として、過剩貨物の販路としての、好良地を探索しようとする意志が根柢をなして居る。所が、獨逸の理想境として見出した土耳其領の小亞細亞及びメソポタミアの平原は、人も知る如く、氣候溫和の上に、地味が頗る肥沃であるから、世界有數の農業地たり得る望が十分の上に、獨逸人の殖民地としては、屈竟の土地なのである。若しこれに、人工的の施設を加へて行くならば、優に七千萬の人口を收容し得る事は容易であると、獨逸側は睨んだのである。依て、この天與の良植民地を獲得せんと目論んだ獨逸は、何はさて措き、その地への交通路を拓く事が先決だと考へて、茲に所謂バグダッド鐵道なるもの、敷設に腐心するに至つたのである。

この鐵道は、その主要聯絡點が伯林、ビザンツ（コンスタンチノープル）の古名バグ

ダッドであるから、人呼んでこれを獨逸の三B政策と稱し、世に有名なるものである。當時、このバグダッド熱が如何に高かつたかは、獨逸皇帝が、二度までも君府を訪問された事に依つても分る。バグダッド鐵道の敷設權を得んがために、獨逸は土耳其人の最も好む大噴水を建設し、或は又モハメット教徒を集めて、朕は卿等と無二の親友であるなど、うまい事を云つて善良なる彼等教徒を煽て上げ、かくして首尾よくその敷設權を獲得したのである。所が、この計畫は、工事着手後に於て、英露のために妨碍せられ、又財政上の都合からして、一時中止して居た事もあつたが、根本からこの計畫が崩れたのは、一九一二年に起つた巴爾幹戰爭なのである。この時には、獨逸の與國である土耳其が、巴爾幹同盟軍のために散々打ち破られ、歐洲の天地から勢力を驅逐されて、歐亞の一角に餘命を保つ様な悲運に際會したのである。こんな譯合から、折角の東漸政策も水泡に歸する様な有様になつたので、獨逸は國運を賭しても、この事業を成し遂げようと、決心の臍を堅めるに至つたのである。かの一九一三年の春、即ち未だ第二回のバルカン戰爭が終らぬに先だち、獨逸の議會は多額の臨時軍事費を要求して、必ずや、これがためには干戈辭すべきにあらずとなし、戰亂の餘儀なきものとしての準備に急いだ。かの、有名なるベルンハ

ルヂー將軍が今や吾人は世界的強國か然らざれば亡國か、二途の中一途を選びべき分岐點に立つて居るのであると絶叫したのも此時である。かく獨逸が、巴爾幹の形勢に鑑みて軍備に汲々として居た時は、一方露西亞が大々的の軍備擴張に志し、佛國が又二年兵制を三年兵制に革めて、銳意國威の充實を期して居た時なのである。

獨逸の國策としての伯林バグダッド政策と、十字に交叉して相容れぬものは、二百年來の宿望として、其機を窺ひ居たる露西亞の南下政策である。實に、箕作博士がこの二大勢力の衝突を指して、巴爾幹半島は露獨の死十字であると評せられた、その警語の妙味を感ぜずには居られぬ。即ち、露國は彼得大帝以來の國是である、好箇の不凍港を、地中海方面に得たいといふ欲求の南下政策が、近年露國內に勃興せる汎スラブ主義と相俟つて、巴爾幹の經綸に着目するに至つたのは、争ふべからざる事實である。かゝる政策は、もとこれ、露國の單なる侵略的野心と見るべきでなく、露國の國富生存上、至當の事であるのである。

巴爾幹は、世界の危険地帯と目せられるだけであつて、この地に於ける勢力の衝突は、南下せんとする露西亞と、東漸せんとする獨逸の衝突のみではない。更に、埃何

國が、多島海方面のサロニカに出でようとする南下政策と、塞爾維が埃何國內の同民族であるユーゴスラブ民族を糾合して、大塞爾維國を建設し、アドリア海に其出口を求めようとする年來の宿望とが、互に衝突し合つたのである。埃何國が、サロニカに向つての出路を求めんとする國策は、これまた單なる侵略的野心とのみ目する事は出来ぬ。この事は、埃何國の地理的關係を見れば、容易に首肯される様に、埃何國は、土地の大なるに比して、海岸線は極めて短かく、且つ、アドリヤ海に於て、形勝の地を得がたき同國が、多島海の沿岸なる、サロニカに出でんとするのは、これまた當然の要求であると思ふ。この時に際し、露西亞の南下政策あり、加ふるに汎スラブ主義の横溢に會つたのであるから、依て彼等は汎マジャール主義を執つて、周圍のスラブ族を排し、尙ほ國內のスラブ族であるクロアット族や、塞爾維人を壓迫したのである。所が、却てこの壓迫が因をなして、所謂大塞爾運動なるものを惹起し、却て南スラブ族の團結を鞏固ならしめたのである。

茲に於てか、かのサラエヅ事件が、露國の後援による大塞爾運動と、前述の埃何國東漸政策の間に、大衝突の導火線となつたのである。以上述べ來つた所によつて、稍明白なる如く、巴爾幹は、埃露及び露獨の勢力衝突の焦點をなし來つたのであ

つて、よしサラエヴ事件なるものが發生しなかつたにせよ、早晚これ等の勢力衝突は、免れる事が出来ぬ自然の成行となつて居たのである。巴爾幹の形勢が、單なる露獨或は埃塞の問題ではなく、巴爾幹問題は、英伊其他の諸邦の利害休戚にも至大の關係があるのである。

即ち、若し伯林バグダッド政策が遂行せられんか、波斯灣は勿論のこと、英國と印度との脈絡である、スエズ運河は侵略され、埃及は危険に瀕し、其極終に、英國の寶庫である印度を失ふの虞があるのである。茲に於てか、英國一流の外交振を發揮し、常に獨逸の東漸策を阻止せんとして居たのである。然るに圖らずも、今次の戦争惹起の魂膽には、伯林バグダッド政策の遂行を完成せんとせる獨逸の野心が潜在する事を看破した英國にては、敢然起つて獨逸膺懲に當つたのである。英國が單に、獨逸の白耳義中立破壊を無道とし、小國の自由を保護する正義の爲に起つたのであるとするは、極めて皮相の見解とすべきである。

以上極めて簡單ながら、開戦までの獨逸國策の一端を述べ、其の破綻に基く開戦の眞意を明らかにしたのである。併し、かくの如きは、世人周知の事であつて、今更茲に論ずる必要もない譯であるが、戦後の獨逸が過重の負擔を課せられ、亡國同様

の悲境になる現狀に顧み、戦争の目的が、果して何處にありしやを考慮するの必要に資せんがために、其大要を述べた次第である。

獨逸の將來

これは極めて大問題であつて、容易にかうと斷ずる事は出来ぬ。

人によつて悲觀論を唱へるし、又獨逸の前途は、左程悲觀すべきでないと云ふものもある。併し、前述せる如き講和條約の條項よりせば、再び獨逸が昔日の獨逸に復歸すべきは、容易の事でないといふ事が首肯される。戦争最中には、獨逸の疲弊は、寧ろ英佛のそれよりも輕かつたといふ人がある。獨逸は戦争中よりも、寧ろ講和條約を字義通りに實行して行く將來に、一層疲弊が來る事を豫期せねばならぬ。刻苦よく艱難に堪えねばならぬのは、今後に於て一層である。眞に、獨逸國民としての眞價は、これから發揮されるべきである。何れにせよ、最近疲弊の極度にある獨逸が、この苦境を切り抜けて行くのは、中々の事であることを想像せねばならぬ。之が恢復には、可成長い時期を要すものとの推測もつく。

聞く所によれば、獨逸の國內は、今や糧食燃料の缺乏に悩まされ、一般民衆の生活状態は、目も當てられぬものがあると云ふ。労働者階級の暴動と、物資缺乏に脅かされて、多くの生産工場は閉止の状態に陥り、これ等製産工場閉止による失業者は、

自暴自棄の結果、或は過激派の手先と豹變し、乃至は社會の危險分子となりて、害毒を社會に流しつゝある。かくの如きは、實に重大なる社會問題であつて、他列國と雖も黙視すべきものではないと思ふ。

なる程、獨逸今日の疲弊は、かつて獨逸が理不盡にも、軍國主義を振翳して、自己の利益のためには、國際公法をも無視し、正義に反せる行動を敢てせる事は、その罪惡固より十分の膺懲を要すものと雖も、これに對する獨逸當局者や、汎獨主義者を倒潰せる今日に於ては、あまりに獨逸國民を苦しむる事が苛酷の感がある。自業自得といふには、あまりに氣の毒である。

併し、獨逸有識者階級は、今日の混亂過渡期にありながら、既に覺醒しつゝある。獨逸國民性の缺陷を研究し、戰敗の原因を尋ねて、新しい獨逸の門出に進みつゝある。複雑なる人種と、多様な文化を基礎として、文明進展の上に、形勝の地位を占めつゝある獨逸民族及び文明が、如何なる外部の壓迫と迫害に會ふとも、此まゝ衰亡すべきものとは思へぬ。問題は、たゞ國民が、いつ過渡期の眠から醒めて、一日も早く舊時の勤勉な状態に復歸するかにあるのである。

協商側と雖も、獨逸を敵として起てる所以のものは、唯ホーヘンゾルレン家の侵

略的軍國主義が、他の列國を脅かしたのによる。若し、獨逸が一朝にして其の非を悟り、專制的の軍國主義を放棄して、民主的平和主義を執るならば、吾人の戰爭目的は達せられたのである。最早、それ以上争ふべき何者をも有しないとは、協商側、殊に英國當路者の一人などの口にする所である。併し、これは表面を繕ふ上の美辭として、肩に唾して聞かねばならぬ部面もある。若し、以上の理由のみであれば、何も好んで、かくまでに膺懲せなくてもよいと思ふ。所詮は、獨逸の復歸を目の上の瘤とし、其の復讐戦を恐れる魂膽が、基因をなして居るのではあるまいか。

思索に耽り、組織的訓練に馴致し、刻苦勉勵を意とせぬ獨逸國民は、一時ホーヘンゾルレン一家の走狗となり了つた威があるけれども、もとこれ、獨逸國民の本心ではない。必ずや、再び眞の獨逸を表現する機會のあるのは、今日より既に怪しむを要せぬ。醒めたる獨逸は、決して文明の埒外に置くべきものでない。或人が、獨逸が疲弊困憊せる今日に於ては、正に歐羅巴の天地は、心臓の鼓動を聞かぬ人體に觸るの威があるといつて居るのは至言であると思ふ。事實に於て、近世文明の建設は、獨逸國民が與つて力あるのであるから、將來の世界に於ても、獨逸を埒外に置いては、文明を談ずる事は出来ぬ。眞の意義に於ける世界の改造は、獨人の手を藉ら

なくては出来ぬとさへ思はれる。世界より呪はれたる獨逸は、その呪咀の的であつた、軍國主義を脱して、近代文明の真髓である、自由主義の下に、再び世界を驚異せしむる文化の宣傳に於て、世界に貢獻する所があるであらう。

要するに、經濟的に受けた大打撃は、將來獨逸再興に關する大致命傷である。この意味に於て、獨逸の再興は容易の事ではない。併し、新しき獨逸國民として、殘留せる五千八百萬餘の民衆は、もとこれ世に定評のある組織的優質の國民であるから、文化に於て世界を脅威し、經濟に於て世界の市場に覇を稱する時期が、或は來るかも知れん。復活せる獨逸國民に對しては、墻壁も警戒も、必要が無い。昨日の敵なる故を以て之を嫉視し、或は疑惑の眼をもつて之に臨むごときは、大國民の襟度でない。國民教養の任に當る者は、思を茲に潜めて、將來に處すべき兒童の教養に、遺憾なきを保せねばならぬ。聊か、戦前に於ける獨逸の國策と、開戦の眞意を究め、戦後如何なる状態に陥りつゝあるかを明らかにせんとして、思はず冗長になつた事を讀者に謝す。もとこれ、獨逸國情の一般的方面であつて、特に變動せる部面の解説を目的とせる本書に於て、委曲をつくす餘裕がない。讀者更に之を諒として、不備の個所は、他の書によつて補充されん事を望む。以下、獨逸が今次の講和條

約により、他に割讓の餘儀なきに至つた地方の解説に筆を進めよう。

一、アルサス・ローレン州

概説

西曆一千八百七十年より、一千八百七十一年に互る普佛戦争の結果、獨逸のために奪取されて居た兩州は、今度の戦勝に依つて、佛國は再び兩州を回收したのである。曩に、獨逸がこの地を占領するや、帝國の直轄領として統治し、經營これ勗めたのである。面積は五千六百四方哩に及び、戦前の人口は、約百九十萬であつた。アルサスとローレン州との間には、小丘が自然の境界をなして居るとはいへ、北部はさしたる障壁もなく、打開けて連絡がとれて居る。後段述ぶる所によつて明らかなる如く、豊沃なる農業地として、豊富なる鑛産地として、經濟的に價値多き所であつて、この地を奪還されし獨逸が、經濟上、軍事上、蒙る打撃の甚大なる事は、想像にあまりがある。

兩州の沿革と回收の喜び

一八七一年、戦勝の餘威を以て、二十億圓の償金と、アルサス・ローレン二州を奪取した獨逸は、流石に寢覺が悪かつたものか、其後、佛國をして、思を植民的發展の上に外らしめんと企圖したが、佛國人の復仇の念は寸時も

息む時なく、爾來、兩國の外交關係は、常に緊張して居たのである。

如何にして復讐の目的を達せんかは、佛國民の頭から、四六時中離れる事はなかつた。國體を全く異にせる露國と、殊更同盟を結んだのも、他日獨逸に當る準備であつた。又、多年勢力の競争國である英國とも握手して、所謂眞摯協商を結んだのも、所詮は、一朝獨逸と事を構へる際の援助を得んと、の下心に外ならなかつた。歐、新嘗膽、この地の回收を畢世の目的とした佛國は、今次の大動亂を好機とし、他くまで獨逸を懲らしめて、多年の宿望である、プロ二州の回復をなさんと目論んだのである。故を以てか、聯合與國の形勢險惡を傳へ、巴里の上空敵機の襲撃をうけ、危急を告ぐる再度であつた中にも、儼然、尙ほ最後まで奮闘を続け得たのである。由來、巴里つ子の浮華を以て、尙ほこの粘り氣を表はし得たのは、獨逸に對する強き復讐心があつたからである。

或人が、若し、獨逸に大軍人ある如く、大政治家ありせば、プロ兩州を、厚く佛國に熨斗をつけて獻上せんと、の好餌を以て、佛國を、早く聯合與國中から引離すは、敢て難事ではなかつたといへるは、這般の消息を語れるものに外ならぬ。かゝる行が、りの地であるから、講和條約の一項として、この地を佛國が回收する事に至るは、世間

認めて妥當の事としたのである。かの、ウイルソン氏がなせる、平和條約の基礎條件、十四ヶ條中の第八條にも、「一八七一年二州に關して、普魯西が列國の利益を侵害し、約五十年間、世界の平和を擾亂する素因となつた非行を矯正し、人類をして、再び平和を享有するを得しめねばならぬ」といひ、二州回復を率直に云はずして、措辭極めて婉曲ではあるが、併し回復を承認して居る事は事實である。

講和條約第五十一條の「千八百七十一年二月十六日、ヴェルサイユに於て署名せられたる講和豫備條約及千八百七十一年五月十日の「フランクフルト」條約により獨逸國に讓渡せられたる地域は、千九百十八年十一月十一日の休戰條約締結の日以後、佛蘭西國主權の下に復歸す。」の正文を手にしたるアルサス・ローレン州の佛人系の驚喜は、どんなであつただらう。其衷心の歡喜を想像するに際しては、五十年の昔に溯つて、獨軍が戰勝の餘威を以て、同州を奪取した當時の悲惨を回想せねばならぬ。

二州は、曾て獨領であつた事もあるのであるが、アルサスは、第十七世紀に於て佛領となり、ローレンは、第十八世紀に於て佛蘭西に併合された者である。爾來、爛熟せる佛國文明の下にあつたため、短日月の間に、全く佛蘭西化し、獨逸の奪取當時に

は、既に忠良の佛國民となつて居たのである。一八七一年に、獨逸が兩州を強要した時には、同州民は極力之れに反對したのであつたが、敗餘の佛蘭西は、獨に抗議するだけの勇氣もなく、獨の要求のまゝに服従するの外はなかつた。當時兩州選出代議士の一人であつたエミール・ケルレンが議會を去るに臨み、滿場の沈黙裡になせる演告は、悲痛の極であつた。その一節に曰く、吾人はアルサス及びロレンの全部たりとも、將た一部たりとも、之を外國に割讓する所の、總ての條約の効力を認めざる事を、佛蘭西の同胞及び全世界の政府及び人民の前に宣言する。吾人は、佛蘭西國民として、存すべきアルサス及びロレン人の權利の不可侵なることを證明する。而して、吾人は吾人の爲め、吾人を選舉したる者の爲め、及び吾人の子孫の爲に、總ての掠奪者に對して、永久に、且つ有らゆる方法に依りて、此の權利を主張すると。尋でジュール・グロジャンは、吾人は、吾人の同意を経ずして、吾人を處分する條約の無効を宣言する。吾人の良心の命ずる所の方法及び程度に於て、吾人の權利を主張するは、向後吾人の自由である。今や一族と袂を分つの餘儀なきに至れるアルサス・ロレンに於ける諸君の同胞は、再び立ち歸りて、彼等の舊地位を快復する日まで、佛蘭西に向ひて、一族としての愛情を維持すると。其悲痛の言辭を聞

くだに骨に徹する思がある。かゝる有様で奪取された由縁があるから、今日の回收は、蓋し、佛人にとつては、五十年の癩飲を下げ得た思がする事であらう。

何故人種自決の方策を執らざりしか

今次の平和條約に於ては、所謂民族自決

の方策によつて、其囑領を定めつゝある中に、獨り、ア・ロ兩州の處分については、何故人種自決の處置を執らざりしか、これ第一に起る疑問である。なる程、この兩州は、前述せる如く、獨逸の暴力に依つて奪取された事が、年諸未だ淺きを以て、世界民衆の記憶に残つて居る事もあらうが、殊に今次の大戦に於ける、佛國民の努力は、蓋し偉大のものであるから、其代償として、當然の事であるといふ理解もあらう。併しこれ等の理由以外に、アルサス・ロレンを無條件で、佛國に回收せしめた魂膽があるのである。

度々これまでも云つた様に、英佛諸國では、將來獨逸の擡頭を、此上もなく恐れて居る。殊に、將來獨逸が回復する様な事があつても、直接自國の上に危険を及ぼすのは、獨逸の西境であるから、この方面の警戒は、彌が上にも、堅牢にして置かうといふ腹がある。四境共に障壁を設けたが、就中西部を十分にする必要上、さては兩州を無條件で佛國に割與する事に同意したものと見る事が出来る。

併し、アロ二州は佛國に還附すべきものとするも、還付區域の如何は、人民の投票に依つて決定せらるべきものであらうとは、獨逸側の意見であり、かつ獨逸委員も主張したのであるが、とう／＼これも拒斥して、飽迄無條件割譲に同意せる協商側の思想には、深い魂膽が無くてはならぬ。思ふに、若しこの二州を、人種自決に委して其屬領を定めたなら、果して佛國につくであらうか、それとも獨逸につくであらうか、これは興味ある問題である。何となれば、ローレン州には佛人系統が多いと云はれて居るに拘はらず、佛語を語るものは、住民中の三割に過ぎぬといふ事である。況んや、アルサスに於ては、佛語を語るもの、更に減じて、僅々五分を出てぬといふ事である。

これ、全く兩州が、獨逸に併合されるに及んで、佛蘭西最負の約四十萬の住民が、この地を離れて佛國に歸り、反對に、三十萬の獨逸人が侵入せる事に基くので、差引佛國は、七十萬票の損失を來せる譯である。五千六百餘方哩の領土、百八十七萬の住民を有するアロ州に於て、七十萬票は、蓋し大勢を決するには、有力のものであるを承知せねばならぬ。茲に於てか、人民投票を捨て、強奪された土地の回收に於ては、當然其の儘復歸すべきものであると論じ立をしたのである。かゝる住民關係で

ある所から、若し一般投票に訴へると、却て、獨逸につく事になるかも知らぬ顧慮よりして、さては、無條件割譲に左袒せるものかとも思はれる節がある。

曾ては佛國もこの地を強奪せり

佛國は、口癖の様に、二州は獨逸より強奪されたのであるといふが、其實、この事もあまり當にならぬ。何となれば、佛國とてアルサス・ローレンを得るためには、色々の魂膽を施したものである。いらぬお世話を焼いて、他國の領域を、順次に自己の版圖にして、了つたのである。やれ奪つたの、奪られたのと騒ぎ立てる事も、正真に考へて見れば、人間以上の神があつて、これは誰れの所有に屬すべきもの、これは彼れのもの、と一々決めて呉れない以上、人間社會には、當然奪つたり、奪られたりがあるのは、止むを得ぬ。國際間の問題だつて、やれ正義だの人道だのといふ事は、畢竟平和の時に云ふ事で、いざ鎌倉となると、赤裸の所は、力の有無によつて、相場は定まる。勝てば官軍、負けると賊になるのは、古今東西に通ずる理法なのである。多少、私の云ひ方は露骨かも知れんが、洗洒つて云へばさうなので、この論法でいふと、一番世界中で廣い國土を持つて居る英國は、世界の國の中で、一番強奪をやつたといふ事にもなる。

アロ兩州を、佛國が、獨逸に奪られたのは、佛國が弱いから奪られたのであるし、曾

て佛國が兩州を我が領としたのは、當時佛國が相手國より強かつたから奪つたのである。依て、大きな口で、やれ奪られたの、ふつだくられたのと云へたものではない。強くて國を併す事を強奪といふなら、我が日本だつて、日清戦争以來、隨分大強盗をやつたものと云はねばならぬ。アルサス・ローレンが、先天的に佛國のものでない事は、少しく溯つて、兩州を併すに至つた過去の歴史について見れば明らかに分る。

現にアルサス・ローレンと云はれて居る地方は、佛國が十六世紀から十八世紀にかけて、三回がゝりて占領したものである。この地方は、もとアルサスとローレンとも一つメッツ・メツサンの三地方に分割されて居たのである。所が、メッツ・メツサンの地方は、佛國が獨逸治下の小國を扶けて、餘計なお世話にも、獨逸に反抗せしめた結果、それでは、我等の保護者になつて呉れと、メッツ・メツサンの諸侯に頼まれる様になつて、佛國は、おつと合點だと、二つ返事で、一五五二年にとら／＼併せてしまつたのである。次に、アルサスの方は、三十年戦争後の疲弊に堪え得て、佛國に助力を求めたのがもとで、戦争が済んで見ると、佛國は可成強固な地位をアルサスに占めて居たのである。こんな譯合から、ウエストファリアの條約で、とら／＼この

地位を確保され、遂に一六四八年になつて、併合案が成立したのである。ローレン大公國は、其の領地の一部が佛領であつたために、半分ほど佛國の藩侯の様な地位にあつたのを、例のルイ十四世が、うまく抱き込んで、とら／＼占領して了つたのである。

奪り方の強弱の相違は固よりあらう。佛國の奪り方が自然的で、獨逸のは手荒で無理な所があるとは云へよう。併し、正義とか人道とかを振り廻すべきものは無からう。現に、アルサス・ローレン維持に關し、獨逸側では、兩州は紀元八四三年カール大帝がヴェルダン條約にて其領土を三孫に三分したる際、成立したる中央王國の一部を構成したものであつて、それを佛國が十七世紀十八世紀に所謂「征服」に依つて獲得したものであるから、我等は第十九世紀に於て、之れを回收したに過ぎぬと云つて居る。理屈はどちらにもつく、要するに、自分の方は悪い様に云はぬものである。

割譲に依る獨逸の損失

兩州を失ふ事に依つて、獨逸にどんな損失があるかを明らかにすれば、佛國民が該地の回收を渴望せる所以の消息が分る。まづ、アルサス・ローレン兩州の喪失に依つて、獨逸が蒙る損失を、軍略及び經濟の兩方面から考

察して見ようと思ふ。

若し、休戦條約の締結に際して、聯合國が、休戦後十四日以内に獨兵の撤退を要求せる一項を逸して、假りに、再び戦争を開始せるものとせば、敗残の兵を以てして、獨逸は、尙ほ久しき間防禦し得た事に違ひない。即ち、アルサス・ローレンは、獨逸にとつては、大なる防禦の障壁となつて居るのである。故を以てか、休戦條約の締結に際しては、劈頭、休戦後十四日以内に、本國內に撤退すべし、若し撤退せざる獨逸軍隊あらば、これを捕虜とすべき事を言明して居るのである。開戦の當初に於て、若し、獨逸がアルサス・ローレン州を有せなかつたならば、佛白の軍は、イーセル・マルヌに於て敵を防禦せず、更に進んで、ザールラインの諸河畔に於て、獨軍を邀撃し得た事であらう。尙又、獨逸が防禦の位置に立つた場合を想定するも、和蘭國境からメツッ・アルサス・ローレンを経て、瑞西に至る國境線は、最も短いから、この線を第一防禦線として據るならば、少數の兵を持つてして、よく大勢を支へ、敵をして國內に入り得しめざるまでに喰止める事が出来よう。

然るに、今やこの國防上の障壁である、アロ兩州を失ひ、加之、ラインランドは間衝地帯として軍備の施設を禁止され、全く國土の西部方面に於て、防禦區を失へる獨

逸軍路上の損失は、蓋し想見するだに惘然である。軍國主義の宣傳に依つて、四隣を脅威せる獨逸の末路は、恰も八つ足ともに腕ぎ取られたる蟹の如く、全く自由を奪はれ、進退其の度を失ふに至つたのである。

經濟上の損害は、更に大なるものがある。兩州の富源としては、ナンシーを中心とせるヴァージュの大森林があるが、尙ほこれよりも大なる富源は、ローレン州の鐵鑛である。戦前、獨逸の鐵の年産額は、約二千八百五十萬噸であつたが、其の内、四分の三にあたる二千一百萬噸は、實にローレン州から採掘して居たのである。この鑛區の喪失に依つて、獨逸の鐵産額は、一ヶ年七百萬噸に激減するであらう。然るに、佛國の方は、アロ兩州を併す事に由つて、鐵の年産額四千三百萬噸に増加したのである。かくして、佛獨兩國は、鐵産額に於て、主客全く其の位置を轉じ得たのである。

近年、獨逸が驚くべき工業上の大發展を遂げ得たのは、畢竟、國內に於ける鐵供給が豊富であつたからである。前後五ヶ年に互る大戰に於て、優秀の兵器を以て、常に敵國を脅威せる所以のものは、豊富なる鐵供給地を自國內に有せるためである。然るに、一朝之れ等の地區を奪ひ上げられ、永遠に、戰鬥能力を剝取られる事に立到

つたのである。獨逸の損失、蓋しこれより大なるものがあらうか。一九一三年の統計に依れば、獨逸の鐵産額は二千八百五十萬噸であつて、この産額は英國を凌ぎ、僅かに米國に劣つて居たのである。この内、四分の三はローレン州に産するといふから、この鐵鑛が佛國の領有に歸せし將來は、佛國の鐵は、二千二百萬噸から四千万噸に激増し、佛國は平時の工業に於ても、優勢を占め得るのである。獨逸は、ローレン州の喪失によつて、遂に七百萬噸の鐵しか有せぬ憐れむべき境遇に落ち行くのである。

二、ザール地方

概説 ザール地方とは、ローレン州の北部を流れて居るライン河の一支流ザール河流域地方を指すのである。面積は約七百四十方哩で、戦前の住民数は、二十三萬人を超えて居た。この地の三分の二は、普魯西に屬し、三分の一は、ローレン及びバラチナート兩地に分屬して居る。佛國が戦時中、北部地方の炭坑を、獨逸軍のため破壊されたのを口實にして、この地方を賠償地とせんと目論んだ程あつて、このザール地方は、ルール地方を除き、獨逸第一の炭礦地であつて、一ヶ年の採炭量千七

百萬噸に及び、獨逸寶庫の一と稱せられて居た地である。

沿革 この地にも、歴史的に獨佛間の經緯がある。本來、奈翁が盛んであつた時は、獨逸と佛國との境はライン河であつたのであるから、勿論この地方は當時佛國の領域であつたのである。所が、奈翁が失脚大敗して、ライン河左岸の地が多く普國のために侵されたにも拘はらず、佛國は、尙ほザールルイに根據を有つて居たのであるから、ザール中流一帶の地は、佛國に歸すべき傾向が見えたのである。所が、例のエルバ島に流謫せられて居た奈翁が、約を背いて同島を脱出し、再び戦争をおこしたために、維納條約に於ける列國の政策は、俄かに變更して、遂に豊富な石炭を眺めて垂涎千丈であつた普魯西は、奸策を弄して、ザール地方を全部己が手中に收めてしまつたのである。これがために、佛國は、經濟的にも、軍事的にも、大なる打撃を受けたのである。殊に、軍事上に於ける損失は、一八七〇年の戦争が、明らかに之を證明して居るのであつて、アルサス・ローレン州が、容易に敵の蹂躪にあつた所以のものも、一に其の障壁であるザール地方が、既に敵の領有に歸して居た事に歸因する。

尙ほ、石炭の埋藏が多い土地を、すつかり取り上げられた佛國の損害は、又非常な

ものである。奈翁時代には、悉く佛國の所有であつたザール地方が、一八一四年及び一八一五年に互つて、削り取られた結果、元來石炭の少い佛國へもつて来て、最も石炭の多い土地を、根こそぎ奪ひ取られたのであるから、其の痛手は、想像に餘りがある。こんな經緯由縁のある土地なものであるから、この地方を回收するには、佛國人に取りて絶好の機會は今日であると云はねばならぬ。アルサス・ローレン問題にせよ、ザール問題にせよ、これまで獨逸に對して臥薪嘗膽の思をして居た事どもは、残らずさらげ出して、復仇すべき秋なのである。正に、戰勝の餘威を以て臨み得る今日は、佛國に取りては、獨逸に對し、年來の鬱憤を晴らすべき、千載不遇の好機といふべきである。ザール問題については、講和會議では、色々問題が沸騰し、聯合國內であつて、尙ほ英米等は、佛國の要求を容れる事に反對し、將來第二のアルサス・ローレン問題を惹起するものであるとして抗議したが、併し、佛國首相は萬一この要求が容れられぬ時は、自分は辭職するなどの聲明をなして、飽くまで主張を貫徹せんと扱めたのである。佛國人に言はせば、嘗て奸策に依て奪取せられた炭田を今日回復するに何不都合があるかといふ風に、中々鼻息が荒かつたのである。

ザール炭田の價值

是が非でも、此際ザール河流域の地方を己が手に收めよう

と焦慮せる、佛國民の心中には、次の様な魂膽が含まれて居ると見ねばならぬ。從來、佛國は石炭の採掘高が、國內の消費高と相應せぬ國であつた。即ち、年々の消費高は、六千三四百萬噸に上るにも拘はらず、國內の石炭生産は四千一二百萬噸に過ぎぬ。所からして、差引二千萬噸餘は、之を年々外國から購入して、其埋合せをせねばならぬ實情であつたのである。所が、戰前の獨逸は世に有名な石炭産出國で、其量二億七千八百萬噸にも及んだから、戰爭前の統計を見ると、隣國獨逸から購入して居た石炭は、約七百萬噸に上つて居るのである。この獨逸から、石炭を輸入して居た事が、どれ程佛國にとつて不幸であつたか測られぬ。何となれば、其の損失は、七八百萬噸の石炭費の損失のみではない。否、佛國は、獨逸から石炭供給の武器を利用して、常に鐵鑛の運命を左右されて居たのである。

かかる状態にある佛國が、今度は、年々二千萬噸以上の鐵を産するローレン州を得たのであるから、どう見積つても、この製鐵業のために、五百五六十萬噸の石炭が、佛國でも不足を告げる事になる。茲に於てか、佛國は、何とか分別をつけねばならぬ。若し、石炭の供給を豫定せずして、鐵産地のみを貪つた所で何にならう。所詮は、石炭のある國に、佛國の鐵鑛はその運命を支配される事になる。この道理に氣

の附かぬ佛國民ではない。依て、鐵の産地ロレーンに最も近い、而て最も石炭の産出多きザール地方は、以前自國の領有地であつた關係もある所から、今日の好機を幸として、之れが回收にこれ力めたのであると思ふ。

かゝる消息を考慮の内に置かないで、たゞザール問題を真正面からのみ見て見ると、如何にも佛國がずるい様ではあるが、併し事實は佛國にとつて、經濟的運命の分岐に立てる大問題なのである。こんな譯柄から、このザール問題については、特別佛國の輿論が聳々とし、佛國民がやつ氣になつて騒ぎ立て、虎と綽名のあるクレマンソーが、猫撫で聲でウイムソンの同意を懇望し、時には虎の本性に歸つて、この要求にして容れられずんば、深く議長の職を罷めるなどと怒號したのである。佛國にとつては、たしかに腰強く主張するだけの價值が、このザール地方にはあるのである。

問題の落着

今言つた様に、ザール問題は、講和會議の問題中でも随分論争のあつた方である。流石のウイムソンも、一時は眞赤になつて怒り出した程である。固より、佛國に於ては、千載一遇の好機であるから、此機を逸しては又時が無いとの下腹があるので、さかんに此地の獲得を主張する。所が、佛國の要求に對して、洵に

都合のよい事があるのである。それは何かといふと、聯合與國の方では、内心獨逸の復仇が恐ろしいから、此際十分に獨逸の回復力を消滅し、戦闘能力を殺がうといふ者がある。所以て、從來獨逸が戦争に比較的強かつた理由の一としては、獨逸には製鐵の工業が盛大なために、新らしい威力ある武器をどん／＼製作し得たのである。仍て將來、獨逸の戦闘能力を殺ぐ唯一の方法は、つまり獨逸の鐵工業を衰えさすにある。鐵石炭の供給を少量にする上から見れば、滿更佛國の強要に同意せぬ譯にも行かなくなる。正義とか人道とか云ふも、所詮は、自己の安全を期するものが、何れの場合に於ても、第一義になるのは人情である。こんな事情から、少しは佛國の要求が無理と思つた列國も、まあ／＼と鼻をつけたのではないかと思ふ。但しこれは私一箇の臆断で、固より間違はあらう。

色々問着のあつた末、どどのつまりに於ては、今度の戦争に於て、侵入獨軍のため佛人の蒙つた損害、補填の一方法として、この獨逸領内のザール河流域炭坑地帯を、佛國の手に收める事に落着した。併し條約面からも少し悉しく云ふと、まづ、ライン左岸を、獨逸債金支拂の擔保として、中立地帯にすると同時に、ザール河流域は、國際聯盟これを十五ヶ年間管理し、爾後民意投票によつて、最後の所屬を定めるの

であるが、まづ同地方の炭田は、獨軍が侵入せるために、佛國內炭田の被害賠償の完済するまで、之が管理權を佛國に委ねる事になつて居る。

今、ザール河流域に關する講和條約中の主要な條項を擧げて見ると、ザール河流域地方の施政は國際聯盟を代表する委員會に於て之を委任すべし。施政委員は國際聯盟理事會の選定する五名の委員を以て之を組織し、佛蘭西國人一名、佛國民にあらざるザール河流域土着の住民一名、及び佛國獨逸以外の三國に屬するもの三名を以て之に充つ。とある。尙ほ十五ヶ年の國際聯盟の管理が終了したる後の仕末をどうつけるかといふと、之も條文には次の様にある。ザール河流域地方の住民は本條約實施後十五箇年の期間満了の時に於て、(イ)本條約及本附屬書に依り設定せられたる制度の維持、(ロ)佛蘭西との合併、(ハ)獨逸との合併の方法により其の希望を表示する事を求めらるべし。等の條項がある。依て十五ヶ年後に於てはその儘で尙ほ推移する様にしてもよし、又佛國か獨國のどちらかについてもよいといふ事になつて居るのである。

尙ほ、假に十五ヶ年經つて同地民が獨逸國につく事を希望した場合を豫定して、條文には、國際聯盟がザール流域地方の全部又は一部を獨逸國に合併することに

決定したる時は、該地域にある鑛山に對する佛蘭西國の所有權は、金貨拂の價格を以て全部獨逸國買戻すべし。其の價格は獨逸國の指名する一名、佛蘭西國の指名する一名、國際聯盟理事會に於て佛蘭西人及び獨逸人に非ざる者より指名する一名計三名の専門家之を決定すべし。右専門家の決定は過半数に依るとある。何處から何處まで綿密な取極めであると思ふ。

三

ラインランド

(この地は他國に割據せるのではないが、講和會議で特殊の條件を、つけられ、問題になつた地であるから、一項を設けて説明して置く。)

ライン問題

獨逸の復讐を恐れる佛國が、今度の機會を利用して、佛國の自然的境界であるライン河左岸に獨逸の足場を持たさない様にする事を考へたのは、當然の事である。事實に於て、獨逸は食糧封鎖にあつて負けたのである。戰場に於ける實際的の敗北ではない。説をなすものは、獨逸の敗因は正義人道に反したのであるなどいふが、これは子供騙しの説である。一たい、戰爭に正義があるだらうか。人道には、敵も味方も違背して居るのである。勝てば官軍、負ければ賊は、古今東西に通ずる理法なのである。

同じ負けたにしても、今度の負け方は戰敗地に塗れたといふ如き負け方ではな

い。して見ると、將來獨逸が獨逸系埃太利と合併するに於ては、さしあたり佛蘭西境が一番危険區にあたる。故を以てか、其の緩衝地帯として、ラインランドの防備を十分に置いて置かねばならぬと佛國は考へたのである。かのフォッシュ元帥が、一九一九年の獨逸攻撃記念日に於て、語つた一條に、ライン地方は佛國に取りて唯一の有効なる防禦線である。余は敢て同地方を併合するを望むものではないけれども、佛國は如何にしても此要害地を掌握するにあらざれば、折角の戦勝も無益に了るべしといつて居る。此將軍の言葉は、佛國人に對し、獨逸の復讐戦に對する憂慮心を増さしめ、爾來同地方に獨立國を設定すべしといふ説や、軍事的の中立地帯たらしむべしと論ずるものあり、殊に甚しきは同地方までも悉皆佛國は併合すべしと論ずるものもあるに至つた。このライン問題については、講和會議で屢、波瀾があり、巨頭連の間にも意見の衝突が絶えなかつた。

獨立宣言問題

事實は大正八年の六月一日に起つた問題である。ライン問題が喧しい時に於て、ライン河左岸地方の各處に於て、一の獨立宣言書が撒布された事である。所が、このラインランド獨立宣言なる者の背後には、佛國の後援があつたのだと取沙汰される。主唱者のドルデン博士と、佛國官憲との間には、ちやんと

默契のあつた事も傳へられる。併し、この獨立宣言が同地民衆の一般に傳はるや、この佛國の魂膽が一般民衆に勘知され、戦争に負けて困憊はして居たもの、其の民族的精神には、消磨がなかつたものと見えて、之等の民衆は一齊に立つて、その賣國的行動に反抗したためにこの獨立騒は有耶無耶の間に葬去られたのであつた。その陋劣の企圖が分る様になつて、却て、獨逸國民の結合力を刺戟したとさへ云はれ居る。

條約上の決定

かく問題となつたラインランドは、どう講和條約で決定して居るかといふと、まづ、ライン河の左岸一帯は云ふまでもなく、更にライン河の右岸に於ても、ライン河より計つて東方に五十基米に引いた線の以内は、軍事上の施設をする事は一切出来ぬ取極めにまつた。この境域内では、武装したる獨兵は、駐屯し又は集合する事が出来ぬ。よしそれは永久的の駐屯でなく、ほんの一時的の事であつてもいけぬ。又各種の軍事演習も禁ぜられて居る。

即ち平和條約の第四十二條には、獨逸國は萊茵河の左岸又は同河の東方五十基米に引きたる線の西方に在る同河右岸に於て、築城を保有し、又は構設する事を得ずとあり、第四十三條には、前規定の境域内に於ては、武装したる兵力の永久又は一

時の駐屯及集合竝に各種の軍事演習を禁ず、動員の爲にする一切の永久施設の保持に付又同じとある。而て第四十四條に於ては、獨逸國にして其の方法の如何を問はず第四十二條及第四十三條の規定に違反したる時は本條約の署名國に對し、敵對行爲を爲し且世界の平和を攪亂するものと見做さるべしと一本大きくきめつけて居る。

この取きめが出来たために、將來、一朝有事に際しては、佛國はライン河を瞰下する高丘一帯に互つて砲火をライン河岸に及ぼし得る事になり、防禦の第一線は、かくして確實に出来上つたのである。併し、思ふにライン河左岸の住民は、もとこれ獨逸人である。今度の軍事的中立地帯の設置に對して、獨逸側では民衆が無理に引裂かれたものと見做し、非常な敵愾心を持つて居る事は事實である。依て、將來若し、獨佛の間に事ある際は、必ずやこの方面よりして問題が起るであらうと推測される。

四、モレネー、オイベン、マルメデー

説

これはルクセンブルグの北方に續き、獨逸と白耳義の國境をなせる地方

で、世に所謂、モレネ係争地域と稱せられる地帯である。係争地帯は、其の面積僅かに三百八十二方哩しかなく、其の人口も戦前僅かに十二萬人に過ぎなかつたのであるが、今やこの地域が、獨逸の權利權限を離れて、白耳義國の完全なる主權の下に歸したのである。モレネー、オイベン、マルメデーなどは、我が國でいふ郡に相當すべき名稱である。

白耳義獲得の理由

局外中立國であつた白耳義は、理不盡なる獨軍によつて、何等の豫備的要求もなく、軍隊の侵入に遭ひ、中立を蹂躪され、國土の大半を奪取され、國民は家を失ひ産を奪はれ、幾多の凌辱を受けながら、尙ほ健氣にも獨軍と戦ひて降らなかつたのである。この勇武の行動は、世界の人々をして、驚異の眼を瞪らしめたのである。獨逸は、占領中、無暗に白耳義の富源を荒らしたものである。殊に、炭坑などはひどい有様であつた。有名な獨逸の炭坑王キルドルフといふ人の如きは、白耳義の石炭は第一に獨逸軍隊の爲に利用せられざる可からず、其次に白耳義の需用に充つべしといつて居る。彼等は、すべてこの流義を以て白耳義に處したのであつた。白耳義女子は、戦争中盛んに獨逸に移送され、過激なる奴隸的勞働に従事せしめられたのである。白耳義が、如何に前後五ヶ年の大戦に苦しめられ

たかば、世間周知の事であつて、獨逸に課せる賠償金の費途の如きは、白耳義の恢復のために、第一費される事になつて居る程である。白耳義に對する賠償は、何人も異論のない事である。かゝる同情が其の領土に於ても加はり、獨逸との國境方面に於ても尙ほ僅少ながらも、領土の獲得をなし得たのであると思ふ。

前にも述べた如く、獨逸と白耳義との接觸地であつて、軍事上極めて大切なるライン河河岸は、中立地帯として、軍備の施設が全く禁ぜられたから、當分は緩衝地帯としての効用をなす事と思ふ。たゞ白耳義保存の上から見て、モレネー地帯だけでは物足らぬ、も一つルクセンブルグを併合すればよかつた様に思ふ。

ルクセンブルグ公國 この公國は、一八六七年の倫敦條約で獨立を承認され、局外中立國として今日に及んだのであるが、過般の戰爭に於ては、獨軍のため何等の豫備的要求もなく、直ちに軍隊の通過に遇ひ、十分に其の中立を蹂躪されたのである。併し、この國は面積僅かに我が國の四國を七分せる位の廣さ、即ち九百九十八方哩、人口も三十五萬に足らぬ小國の事として、到底獨軍と戦ふ能力はなく、たゞ爲されるが儘になつて居たのである。

獨逸が勝てば、獨逸に併合されるであらうとは衆目の見る所であつた。獨逸と

しても、同國は一箇年五百萬噸からの鐵の產出もあり、又獨逸とは以前から商業上聯合してやつて居る關係もあり、殊に王家同士も親密關係がある様な所から、獨逸としては十分併合の意志があつた事と推察される。所が、事全く志と違ひ、獨逸はあんな目に會つて敗れたものであるから、ルクセンブルグの所屬については、地理的關係から見て、白耳義に併合せしむべきものであるとの論も起つた。併し、ルクセンブルグを白耳義に併合する事は、永い間の問題であつて、十九世紀の前半に、白耳義が獨立する時にも、矢筈しい問題であつたし、當時和蘭と白耳義との戰爭が永引いたのも、之が爲であつたと云はれて居る。

外電傳ふる所に依れば、ルクセンブルグ所屬決定のため、人民投票は、最大多數を以て、從來の如く獨立國としての存續に決定したといふ事である。果して然らば、佛獨間の緩衝地帯として、ルクセンブルグを白耳義に併合すべしとなす説も、駭目な譯である。しかし、人民自決を主とせる時代趨勢の然らしめた所であるから、之で満足するより外に途はない。かくして、我が四國の七分の一に過ぎぬ小國が、歐洲強國の間に介在せる奇觀は、尙ほ存續する事になつたのである。

五、 シュレスウイヒ

概説

シュレスウイヒは獨逸の北方、丁抹に境せる地方であつて、今度民族自決の結果、丁抹領となるべきシュレスウイヒは、其の面積一千八百万方哩、人口は、約三十萬に及ぶ境域である。初め兩國間の緩衝地帯として、シュレスウイヒ・ホルスタインに互る民族自決地が設定せられるとの噂があつたが、遂にホルスタイン州には及ばなかつた。尙講和條約の原案としては、シュレスウイヒの全部に互つて居たが後に南シュレスウイヒは、之を民族自決の境域から除去され、一千八百万方哩の地區に減定されたのである。本年二月十二日巴里發の電報で傳ふる所によると、既にシュレスウイヒは、庶民投票の結果、七割五分の大多數を以て、丁抹に併合する事に決定したとある。

地域決定までの事情

右述ぶる様に、民族自決地は次第に減少されて居る。これには色々事情のある事であつて、まづ最初に、獨領シュレスウイヒ・ホルスタイン兩州中、シュレスウイヒ州のみを人民投票區域とし、ホルスタイン州を全然除外したのはどういふ譯かといふと、ホルスタイン州は、第一、その人口の八割は獨逸人であつ

て、殆んど丁抹語は行はれて居らぬ程である。又これを地理上から見ても、シュレスウイヒがユトランド半島系であるに對し、ホルスタイン州は大陸系になつて居る。然も、此處には、獨逸通商及び軍事上の要地であつたキール運河があり、又エルベル河口に沿ひ、獨逸に執りては極めて重要な地區である。従つて、この地は純然たる獨逸系であるから、民族自決の境域をこの州までには及ぼさなかつたのである。次に講和條約の原案に依ると、民族自決地は、二千七百八十七方哩に互つて居たのに、丁抹は五月七日講和條約案の對獨交附後、俄かに其要求豫定區域を改め、其面積を一千八百万方哩に縮小したのである。これ極めて奇態な現象といはねばならぬ。今や各國の間には、領土擴張について幾多の暗闘があり、殊に小國などは、戦後の競争場裡に立つため成る可く國力を強大にせんとし、これが爲には、民族主義を呼號しながら、自ら獨立を獲得すると、今度は他民族を無視して、領域擴張のためには、他民族までも自領内に包容せんとする奇現象を呈して居る。少しでも多くの領域が自分の方に加はる事は、誰人でも望ましい事の様だに思ふに、さて、丁抹は無慾な事である。

一説に依れば、丁抹は最初から南シュレスウイヒ除外を希望して居たが、條約原案

を作る場合に於て、聯合國が南シユレスウヰをも人民投票域中に包容せんと欲したので、丁抹も受動的に之に同意したのであると云ふ。何故に丁抹はホルスタイン州のみならず、シユレスウヰ州の南部までも放棄し、新領土の豫定地域を狭小にしたのであるか、これには何か理由がなくてはならぬ。

理由の第一は、丁抹内の親獨派の勢力が強いといふ事である。即ち、大正七年四月に於ける下院總選舉によると、親獨派は非親獨派六十八に對して、七十一即ち三票の多數を占めて居る。こんな傾向であるから、獨逸はこの形勢を利用して、昨年麥巧みに親獨派を操縦し、なるべくシユレスウヰ方面の領土喪失を少くしようと企てたのであるらしい。第二の原因としては、南シユレスウヰ人民は、北部及中部のシユレスウヰ人と共同して、出來得べくんば一の獨立國を建設したいと夢みて居る所から、若しも丁抹がこの南部シユレスウヰをも含む地域の自決に賛意を表せんか、或は却て北及中のシユレスウヰをも自己の手中から奪ひ取られる期のある事を豫定せねばならぬ。こんな譯合から、丁抹はつとめてこの危険性ある南部シユレスウヰを敬遠し、さてこそ南シユレスウヰを要求地外にした事と思はれる。第三に、この申出の根柢をなす有力原因は、矢張り他國同様、獨逸の恢復せる將來

を憂懼せる事である。若し、丁抹が南シユレスウヰをも併せる事になると、同地方の人民は、疲弊せる戦後の重税から免れる事を得て、一時は悦ぶかも知れんが併し丁抹國內に多數の獨逸人が加はる事は、やがて丁抹國內の政治にまでも影響し、將來の國家基礎を危くするものである。これ等の事情に省みて、殊更丁抹政府は退嬰方策を執つたのであらう。何れの國も、燒太りを夢みて、膨脹策を講じて居る中に、丁抹獨り小國策に甘んじて居るのは、大體如上の原因に依るものと推知してよからう。

この地の歴史

この地は、一八六四年に、丁抹と奥普との間に戦争があつた際に、普國のために奪取され、二年たつての後、普奥の間に所謂七週間戦争が行はれ、かくして、確實にシユレスウヰ・ホルスタイン州は普魯西に併呑されたのである。ところが、普國に奪はれた時の講和條約には、シユレスウヰ州民に直接投票をなさしめ、以て獨逸につくか、乃至は丁抹に屬するかを決定せしむる規定であつたのである。然るに、其後獨逸はこの約を履行せず、恣に自國として今日に及んだのである。今度これ等の地方が、人種自決によつて所屬をきめる事になつたのは、云はゞ獨逸が五十年間實行を怠つて居た條約を、今日になつて履行せしめた形になる。五十年

間の放置は、随分暢氣な怠慢者と云はねばならぬ。

今や民族自決の思想が勃興し、一方には當の獨逸が、戰敗地に塗れて、容易に起つ能はざる状態に敗滅したから、此機を措いて、他に回收の機會はないと思ひ、さてこそ丁抹はシユレスウヰヒを要求したのである。併し、その事は、上述せる所によつて明白な如く、丁抹にとつては、一八六四年の屈辱もあり、又獨逸の違約に對する鬱憤もある事であるから、聊か年來の溜飲を下げるに價するものがある。これにつけても、獨逸は波羅的海支配上、重要な地域を喪失したのであるから、その損害は蓋し尠くないのである。

六、上部シレシヤ

概説

大正八年の五月七日、聯合國の對獨講和條約案が提出せられた後、獨逸は種々修正を要求したけれども、大抵は拒絶されたが、中に就いて領土處分の項目中で、前に述べたシユレスウヰヒ人民投票地區の減少と、微細なる修正がザール問題に加へられた外は、茲に述べようとする上シレシヤの處分に關する修正である。講和條約の原案では、上シレシヤを獨逸から全然波蘭に移す案であつたのであるが、

後に獨逸から、この地方には獨逸人が多いと主張して來たので、聯合國の方では、之に一步を譲り、上シレシヤに人民投票による所屬國決定方法を適用する事になつたのであるが、多分は波蘭の所有に歸す事と思はれる。この地は、新興國チェックスラボク・ポーランド、及び獨逸の三國の接觸境をなせる地であつて、石炭の産出に富み、従つて諸種の製造工業盛んなる地方である。

沿革

シレシヤは、一三三六年に奥太利に奪はれた所であるが、奥國の所有に歸して後、約四百年を経過せる一七四二年には、普魯西王フレデリック大王の爲に奪はれて、遂に普國の領有に歸したのである。爾來、大王の極端なる同化政策に遭ひ、獨逸語の話せぬものには結婚も許されぬ様な憂目にあつたのである。こんな亂暴な同化策を施されたものであるから、だん／＼獨逸化して來て、後には全く人情氣風までも獨逸風になつてしまつたのである。但し、この様に立派に獨逸化したのは、シレシヤ三箇の政治區分の中の二つであつて、他の一つは大王一流の極端な同化策を施されたけれども、頑として波蘭の古風を捨てず、僅かに波蘭風の孤壘を守つて居たのである。これが即ち、今日民族自決によつて所屬が定められ、多分は波蘭に復歸するであらうと豫想される問題の上部シレシヤなのである。二世紀

に互り、故國に對する節操を變へなかつた上部シレシヤ人は、今日やつと思出多き波蘭人としての國籍を取得する事になつたのである。

フレデリック大王の同化策には、權力に阿附せねば立身の出來ぬ様な上流社會人は、直ちに走つて獨逸化して了つたが、自分の力で喰つて行く事の出來る平民階級は、頑として波蘭式を捨てなかつた。上部シレシヤは、農産の豊かな所であり、又有名な石炭の産地であるので、従つて諸般の工業が盛大である所から、平民階級の鼻息が荒く、何んの彼のと獨逸化政策に抵抗して來て居る中に、平民階級者から中産階級も、知識階級も出來るといふ有様で、やがては統率者のある一箇の國體となつて來たのである。かくして、今日民族自決の方策を施して、故國波蘭に復歸する事になるのである。

人口 上部シレシヤの人口は、約百八十萬人もあるのであるが、其中の百二三十萬人は波蘭人であるから、大約七割位に當つて居る事と思ふ。勿論、この地の人口は、確かの所は分らぬが、一九一〇年の獨逸側統計によると、上部シレシヤの波蘭人は、約四割となつて居るが、これは正しいものと見る事は出來ぬ。波蘭の取れる統計によれば、約八割といふ勘定であるから、大變な相異である。なぜ普魯西の統計

によると、波蘭人が少いかといふと、普魯西の法律には、住民の六割を波蘭人が占めて居る場合には、演説其他の集會に波蘭語を用ひてよいといふ規定があるので、普魯西人は、出來るだけ、此法律を無効にしようと思つて、目下正確の統計に接しないが、大約上部シレシヤの波蘭人は、百二三十萬人と見たら大差なからう。

七、ポーゼン

概説 普魯西の東部を占め、農産物多く、中にも麻、砂糖に富む地方である。この地も、一七七二年、フレデリック大王のため普魯西に奪取せられた地であつて、爾來辛辣なる同化政策にあひ、以て獨逸化せんとせられたのであるが、住民は頑として波蘭の古風を捨てず、今日に推移して、やつと波蘭に復歸する事になつたのである。二百二十萬餘の住民中、約百三十萬人は波蘭人であるといふから、以てこの地が、波蘭に復歸する事の自然であることを知るであらう。

普魯西の同化政策 一七七二年、普魯西が波蘭を分割せる第一回に於て、この地方はフレデリック大王の配下に歸したのである。其後普魯西がこの地に同化策を

試みたる事は非常のものであつて、或は波蘭人の土地を奪ひ、教會を沒收し、などしたのである。普佛戦争後も、宰相ビスマークはポーゼンの獨逸化については大に腐心し、或は多額の國帑を提供して植民委員會なるものを作り、或は東方國境同盟なる政治同盟を組織するなど、この地の獨逸化については、諸種の方法を試みたのである。併しながら、今日に於ても、ポーゼンは依然として波蘭人のポーゼンと云つてもよい程に、波蘭式を保有して居る。波蘭式なる事に於ては、上部シレシヤ地方にも勝つて居る。

住民 二百二十萬人餘の住民中、約百三十萬は波蘭人が占めて居るといふから、其割合は大約六割に相當して居る。但し、この數も上シレシヤで述べたと同様の筆法で、幾分獨逸側の統計は波蘭人が少數に見積つてある事を承知せねばならぬ。尙ほ、この地は年々波蘭人増加し、獨逸人は年々減少する傾向がある。正確の表はないが、殆んど例外なくして獨逸人が新教徒であり、波蘭人は舊教徒である所から、宗教上の統計に依て、大差なき事と思ふが、まづ之に依ると、一八一六年波蘭人が全人口の六割五分、一八八〇年には六割六分、一八九〇年には六割七分といふ風にだんだん増加して居る。之れは波蘭人の出生率が、獨逸人の夫れに勝る所から起る現象である。しかも、これが獨逸政府筋のものであるから、實際はこれ以上の割合になつて居るかも知らぬ。

八、西部普魯西

概説 この西部普魯西の大部は、今度波蘭國に大部分割據される事になつた。この地方は、シレシヤの様に、石炭の産出があるではなく、又ポーゼン州の様に、工業が盛大ではないが、併し、波羅的海に面して居る關係上、軍事上より見て頗る大切な所である。西部プロシヤの人口は、大約百八十萬であつて、其内約七十萬が波蘭人である。ポーゼン同様、この地の大部は、第一回の波蘭分割の際に普魯西に奪はれ、殘部の地は一七九三年に併合されたものである。

自由市ダンチヒ 西普魯西のバルチック海に面した所にダンチヒ港がある。この港は、ウイッスツラ河と、バルト海を連絡する運河に臨める一大貿易港として名高く、又要塞地の一として、戦時中世に知られた所である。この港は、古來の要衝であるから、嘗てフレデリック大王が、この西普魯西を併吞する前にも、種々な豪族又は僧侶などを豫め移住せしめて、遠大の計畫を立てた事がある。併吞後も、特に、こ

の地の價値を認め、ポーゼン・シレシヤ以上に、この地の獨逸化には腐心したものである。ポーゼンを取られるのは、尙ほ我慢が出来るが、西普魯西を取られ、波蘭國が其北面の出口をダンチヒに求めた事については、獨逸は經濟的に又軍事的に、大變な打撃を受けた事と云はねばならぬ。但し獨逸人多く、且つ其地盤深きダンチヒを全く波蘭に附與せなくて、ダンチヒ及其附近七百二十九方哩の地を國際聯盟の保護下に置いて、獨立自由市となし、依然獨逸の足場たるを得たことは獨逸にとつては不幸中の幸とすべきであらう。

協商側は、將來獨逸が東方に展びんとする上の障壁になる様にと、波蘭の獨立を協賛したのであるから、特に波蘭の便利になる事については、何呉れと庇護して居る。殊更、西普魯西を波蘭に與へて東普魯西を孤立の位置に置き、又ダンチヒを中立獨立市として、海への出口を與へた事は、たしかに波蘭の強味であり、獨逸にとつては大なる障害である。普魯西の湖沼であると稱して喜んで居た波羅的海の獨占權を見事破壊した事は、極めて痛快な事である。

九、東部普魯西

概説

獨逸の東方に對する障壁となり、緩衝地區をなす波蘭國の再興に際し、海への自由を保持せしめんとする聯合國の庇護により、西普魯西が波蘭に讓與される事になつたために、東普魯西は恰も無援孤立の地位に立つ事になつた。東部普魯西に住む波蘭人は、大約二十六萬人であつて、割合にしては、全人口の一割七分に當つて居る。然も、これ等の波蘭人は、東普魯西の西南隅地方に寄り集つて住んで居るのである。大部は獨領として存續するが、この波蘭人の密集して住んで居る西南部は、今度人民投票によつて、國境を決する地域と定まつて居るのである。固より、この地方は庶民投票の結果は、當然波蘭に復歸する事であらう。殘餘の東プロシヤの大部は、波蘭の再興によつて、西プロシヤと隔絶された地域に、ポツンと取り殘される事になつたのである。

東プロシヤの北境リトワニヤへの接續地であるメル地方は聯合國側の要求もだしがたく、獨逸は遂に之れ等の地方をリトワニヤに讓る事になつた。始め聯合側からこの地をリトアニアに割く様にとの交渉があつた際には、獨逸側は極力之を拒んだのであつたが、メル地方の人口の多數がリトワニヤ人である事や、メル港がリトワニヤにとりて海への出口である事情などに照らして、獨逸に附す

べきものではないと力説し、とうとう之を獨逸から奪つてリトワニヤに譲る事になつたのである。

以上述べた如く、東プロシヤに於て獨逸が他國に割譲すべきは、西南隅の一部が人民投票によつて多分波蘭につくのと、及び北境のメメル地方がリトワニヤにつく位のものである。東プロシヤの大部分は依然として獨逸領であり得るのである。して見ると、將來獨逸が露西亞方面に出でんと目論むに於ては、今度波蘭に譲つた西プロシヤのバルチック海岸の十四五里は、これを突破するに物の數ではない。要港ダンチヒが依然獨逸の足場たる上に、東プロシヤが依然獨逸領である事は、明らかに獨逸に將來東進政策を斷行する機會を與ふるものといつてよからう。宜しく獨逸の東進阻止の上から見れば、思ひ切つてダンチヒを波蘭に與へ、人種主義を第一義に置かずに、寧ろ東プロシヤ全部を波蘭に渡し、以て障屏を完全に造ればよかつたと思ふ。バルチック海の海岸線が十四五里の幅しかない西プロシヤの割譲や、メメル地方をリトワニヤに譲り渡した位では、到底獨逸の東進策を阻止する事は出来ぬ。東プロシヤの處分は、波蘭を通商的に、經濟的に、將た軍事的に強大ならしむる上にたしかに失敗であつたと思ふ。

露西亞の崩壊と其の解説



第二 露西亞の崩壊と其の解説

改造の過渡期にある世界の舞臺に於て、最も變動の多きは露西亞の現状である。今日の露西亞にては、過激派政府なるものが、新露西亞を造らんとして居るが、併し、分裂せる諸他の小國が、悉く過激派政府の下に統一せられる事は、中々に困難の事であつて、其間、幾多の衝突が起るは必然の事である。よし、一時は聯合して合衆國を組織するやうな事があつても、烏合に等しい之れ等の國に於ては、亦何かと反目嫉視して、紛争は永久に絶えぬであらう。改造の世界舞臺に於て、最も改惡されたものは露西亞國である。いで、露西亞の現状が如何なる状態であるかを略述して行かう。

所屬變更の地、又は新興國について述べる前に、まづ露西亞の一般國情について述べる。蓋し、今次の世界改造に於て、部分的に諸種の變動はあつたのであるが、最も混亂紛争の領域が廣く、殆んど一國全體を擧げて、變革の渦中に投ぜられたものは、露西亞、獨逸、奧匈國である。其中獨逸、奧、太利、洪牙利は自身が戰亂の相手國であつた關係上、戰敗の位置に立てば、どうしても國內諸組織に變革が起り、國土に於て

も、大變動を來すはこれ當然の理であるといつてよい。然るに、露西亞に於ては、戦敗の結果かうなつたといふのではなく、云はゞ、國內に大革命が起つたために、拾收すべからざる状態になつたのである。よつて、今日の國情を述べる前提としては、勢今日の狀態を生んだ革命當時に溯つて述べる必要がある。

露西亞の大革命

大正六年の二月二十七日、露都に於て行はれた職工の大ストライキは、別段政治的色彩を帯びたものでもなく、大した危険性はないと世人は思ふて居た所が、三月五六日には之れが全く政治的色彩を帯びた所の大革命に變換した。而して、この政治的色彩をもつた大革命は、三月八日からかけて同十三日までに至る僅々五日間を以て其目的を達し、終にロマノフ皇家を顛覆して了つた。實に疾風迅雷眼を覆ふに違なきものであつた。然も、十五日には上下三百年に互り、歐亞東西八百六十萬方哩の領土と、人種の數は二十餘に達し、總數二億を抱容せる全露の皇室は、僅々二週間を以て滅亡したのである。有爲轉變の世の中とはいへ、ロマノフ王朝の末期は、かくの如く悲惨なものであつた。

事實は極めて突發的であるが、併しこの革命の由來を徐かに考へて見ると、淵源する所は極めて深く、極めて古いのである。この事なき以前に於ても、露西亞は世

界近世史に於ける一種の謎とされて居たので、かゝる勃發が何時の日に來るか、極めて興味ある問題であつたのである。而て、其推量の根柢をなすものは、之れを露西亞の皇室に求むる事が出来る。

露國の國民性は、鈍調無節制である。之を通俗の語で云へば、どうでもよいといふ如き放埒の國民である。又、どうにかなるだらう。といふ如き無氣力の國民である。而て、かゝる悠長鈍感の國民性は、どうして成り立つたかを考へて見ると、一は露國の地的原因に基き、一は歴代皇朝の政治的壓迫にある様に思ふ。まづ露國の位置や面積を考慮に置く人は、必ず露西亞の氣候なり、又自然の風光について想像が出来るだらうやうに、一眸千里際涯なき大平原に生活する國民は、第一思想に集注點がない。廣漠たる大平原は、オデッサよりアルシャンゼルに到り、バミールよりバルチックに及ぶまで、白皚々たる無邊の白金世界と化するのであるから、かゝる荒涼たる自然の環境は、不知不識の間に、國民を驅つて陰鬱となし、引込思案となすのである。

更に位置より來る自然の變化としては、晝夜長短に著しき不同のある事である。即ち露國では、全日白晝の如く、夜間も尙ほ新聞を読み得る程度のホワイトナイト

である事もあれば、又之と全く反對に、午前八時頃に東が白み、十時頃雨戸を繰つて、午後三時頃には家々に電燈がつき、ぼつ／＼雨戸を下ろすといつた様な期節もある。かゝる晝夜の状況である所から、自然に不規律の生活に馴致され、無節制の國民となつて了つたのである。

又一方には政治上の壓迫があつて、國民は手も足も出ぬ所から、どうしてもなれの國民になつたと思はれる節もある。古き歴史は暫らく置くも、かのロマノフ王朝になつてからについて見るも、かの有名なピーター大帝を除く外の皇帝は、悉く人民を土芥視し、己が一族一家の隆榮を圖る事に汲々として、人民の困苦缺乏を察しなかつたものである。こんな有様であるから、勢人民も皇室をさ程有難がらぬし、殘虐至らざるなき皇帝も、多くは天壽を全うする事が出来ぬで、衆人怨嗟の中に、非業の最期を遂げて居る。ニコラス二世の末路も、たしかに此例に洩れなかつたのである。

以上述べた如き自然の環境と、政治上の壓迫とで、従來國民は沈み勝な無氣力者であつた。併し、ゴム絨を力一杯押しつけた手を弛めると、其反動で力強く飛び上る様に、従來の反動で今度の革命は、中々に強固なものである。露西亞人は何も性

來愚鈍ではない。一度覺醒すれば、相當の事はなし得るのである。今度といふ今度は、餘程露西亞人も眼が醒めて居る様であるから、行く所まで行きつかねば、後へは引かぬであらう。唯殘念な事に、國民間に結合組織の力が缺けて居るから、よいリーダーが出て、國家を救ふ事が無い場合には、却て自ら潰亂瓦解するやうになるであらう。

過激派政府

突如として露都に起つた革命の餘波は、露軍の全線に及んで、露軍の士氣を總崩れに崩れしめた。かうなつては、もう例のケレンスキの激烈な雄辯も、用をなさなかつた。プロシロフ大將が、アレキシ、ーフ大將に入れ代つても、コルニコフ大將の努力も、廢棄せる全軍に向つては、何の用もなかつた。進軍の命を下す將校は、兵士のために殺され、兵士は却て將校に向つて、命令を下すの狀態になつた。勝手次第に戦線を離れるもの相踵ぎ、軍紀は全く紊亂して、見る影もなき混亂状態になつた。かくして、一時聯合國をして、全兵力を専ら西部戦場に集注し得る様、東部戦線に於て、敵を牽制して居た露軍は、今や全く獨軍の蹂躪に委せねばならぬ状態になつた。かゝる間に、其年の十一月には、ケレンスキ内閣が瓦解し、溫和派が失政して、レニントロツキの一派が其の後を襲ふ事になつた。この内閣

は、過激派政府(勞農政府、大露政府ともいふ)と稱し、之れに反對する反過激派と相對して、露國は方に二分されて、相闘ぐ事となつた。

反過激派にはどんな國があるかといふと、まづ當時東方にはオムスクを中心とせる、西比利亞政府があり、西にはワルソウを中心とせる波蘭、ヘルシングフォールスを中心とせる芬蘭が各獨立して反旗を翻し、更にバルチック沿岸には、リトワニア、エストニア、ラトヴィアがあり、尙ほ又キエフを首府とせるウクライナ、北方アルハンゲルスクを中心とせる北部露西亞等、小國所在に分立して、紛亂混綜、殆んど名狀すべからざる状態を來し、四分五裂、收拾の見込なき有様に陥つたのである。

中にも過激派政府は、世界列國の呪詛の下に、政權を掌握しながら、其の勢力は次第に強勢であつて、モスコイ、ペトログラードの要地を中心として、中部露西亞の中樞を支配し、中々倒壊すべき見込はあるか、近時は四隣の反過激派を壓倒して、次第に勢力範圍の擴充をなして居る。

一方また、勞農政府の過激主義宣傳は、大河の決するが如く、世界を風靡し、世界民衆の思想界に、一大變動を及ぼして居る。世界の諸國に、近時頻々として勃起する所の罷業、怠業、暴動等は、よし直接原因は他に由存するとしても、甚く所は、過激思想

の宣傳に唆かされたものに外ならぬ。かゝる突飛の空想論者の集團である變態政府は、其の成立後、必ずや久しからずして自滅すべきものであらうとは、各國共に思つて居たに違ひない。

聯合諸國の方では、佛國、伊國の戰線が事急で、手離しの出來ぬ理由もあつたのであるが、如上の理由から高を括つて、どうせ碌なものではなからうと油斷して居た暇に、過激派政府は大正七年の三月になつて、獨逸側とは立派に單獨講和を實行し、聯合側に鼻をあかすと同時に、勞農政府と號して、露國內は云ふに及ばず、勞働者並びに下層農民の歡心を求め、其の興望を收攬して、強靱の政治的命脈をつないだ。

この猖獗に喫驚した聯合側は、遲蒞ながら、過激派政府の撲滅を圖り、反過激派援助の段取にかゝつた。しかし、其の時は既に遅かつた。北露に極東に、聯合國の兵は派出せられたが、然も過激派の侵潤する所は、更に多かつた。救援軍がこんな有様で困つて居る頃に、獨逸側が力盡きて屈服するやうになつて、所謂ベルサイユの平和會議の幕が切り落された。此際、平素から過激派政府に對して、案外好意を持つて居た米國委員の斡旋で、過激派及過激派の代表を簡派し、以て全露西亞の秩序回復を圖らんとした。しかし、この會商計畫は、雙方共に意志が熟し合はな

つたので、殆んど同音に妥協の餘地は無いと頑張り出して、とうとう會商計畫は失敗に終つた。以來反過激派の方では、聯合諸國は自分等を過激派と同様對等視して居ると、駄々を捏ね出して、却つて、聯合國側の誠意に疑惑を挟む様になつた。

赤衛軍の武力宣傳

過激派の方では、トロツキの發案にかゝる、一種の徵兵制度に基く組織の赤衛軍を各方面に出して、所謂過激派主義の武力宣傳を始めた。爾來、赤衛軍は東西南北各地に兵を出して、反過激派と血戦し、間斷なき赤衛軍の養成補充は、益々効を奏して、到る處漸次反過激派を壓迫し、之を蠶食して居る。殊に西伯利方面では、コルチャック提督を執政官とするオムスク政府は、極東方面にて我が國の援兵を乞ひ、西部西伯利では、チエツクスラボツク及少數英兵の支援をうけて、過激派に對抗して居たが、次第に蠶食されて、遂にオムスクは彼等の藩捲に遭ひ、極東浦鹽さへも赤衛軍の占領する所となつた。曩に、我が國と共に派遣されて居た米國の兵は、過激派との戦争を好まず、西伯利の形勢一變するや、旗を捲いて本國に撤兵した。此時に際し、獨り我が國は増兵を企て、却て世間の疑惑を招く等の事があつた。赤旗は浦鹽市中に翻り、絶東露領は全く過激化した事は事實であつて、この形勢を轉回する事は出来ぬであらう。敗殘の兵どもが、我が敦賀に逃げ込ん

だ時に際し、我が政府が容易に其上陸を許容せぬ如きも、思ふに新形勢に策應すべき陣立の變更と見るべきではなからうか。

曩に我が國は、シベリヤ在留の十四萬の獨塊俘虜が、無監視の狀態に放任され、遙かに過激派に加擔し、所謂獨勢東漸の勢を示し、日支兩國をして其地位上に不安を感ずるに至りしとき、西伯利出兵について兎角の問題も起つたのであるが、とうとう出兵に決し、爾來チエツクスラボツク軍を援けて北進したのである。所が、上述せる如く、過激派の努力は遂に西伯利を風靡し、極東浦鹽も赤變化する様になつたので、米兵は逸早く撤兵を實行した。然るに我が軍は、却て増兵こそすれ、撤兵を實行せなかつたので、世の疑惑を招き、露民の多くは、チエツク軍の撤退後、日本軍の在駐する必要なしとし、過激派の平素標榜して居る、外國干涉排斥を呼號して、日本兵の駐屯に漸く反感を懷くやうになつた。茲に於てか、大正九年三月卅一日附を以て、我が政府は對西伯利態度に關し、新たなる宣言を發表した。其要は、チエツク軍援助の目的は事實完了したるも、帝國の西伯利に對する地理的位置は、他の列強と其趣を異にし、殊に極東西伯利の政情は、滿鮮地方に影響する事多大であるから、我が國は別に露國に對し、政治的野心があるではないが、接壤地方の政情が安定して、

居留民の生命財産が安固にならば、我が軍隊を完全に引揚げようといふのである。然るに頑迷の露兵どもは、帝國政府の眞意を解せず、大正九年四月初頃より、我が兵站部歩哨及巡察隊を攻撃したので、我が軍司令官は、一般の情勢上、露軍の行動は豫め計畫されたる敵對行動と認め、已むなく之に武装解除を強要するに至つた。

今や過激派の勢力は四方に普く、白露軍が過激派のために滅ぼされたのは既に以前の事であり、デニキン軍が連戦連敗の中にも、僅かに南露に餘喘を保つて居る位のものであるが、それとて再起不可能と見てよい。ウクライナは疾うの昔に赤變し、エストニアは既に又過激派政府と和を結んで、悦に入つて居るの状態である。芬蘭も過激派の浸潤に遭ひ、波蘭も其侵蝕に堪え得て、政應の位置を、ワルソウより他に轉ぜんとするの議があるといふ。これ等兩國も、過激派に對し和意満々であるから、今や全露を擧げて、過激派に屈服の状態である。要するに、反過激派の努力は、引潮の最低位に達せんとするの趣がある。

聯合國が對露政策を變更して、過激派政府承認の形勢に、一步々々を近づけ居るとも見る筋がある。兎に角、露國の現状は端倪すべからざる状態であつて、過激派が全露を統一し得るか否かは興味ある問題である。依て、今後の新聞報道等に注の歩を進めよう。

一、ポランド波蘭共和國

露西亞の混亂は前述せる如くであつて、嘗て承認せられたる西伯利政府は没落の機運に遭ひ、エストニアは過激派政府との講和成立し、何等の保留なく獨立を承認されたとは雖も、果して將來獨立國としての體面を保持し得るかは疑問である。此際僅かに、獨立國としての體面を今後に持續し得るは、芬蘭波蘭の二國ではないかと思ふ。依て茲には、新たに露國內に於て獨立せる二共和國として、芬蘭と波蘭について大要を解説し、餘裕を以て諸他の小國に及ばうと思ふ。而てまづ筆を波蘭に起さう。

波蘭の領域

舊露西亞の波蘭、獨逸のポーゼン州、西プロシヤ、東プロシヤの南部、上部シレシヤの地、及び埃國のガリチア、シレジア地方を抱合して、新たに興る共和國である。獨逸側との國境以外は未だ決定して居ないから、正確に其領域を示す

事は出来ぬが、大要上述せる地方に互り、大約十四萬方哩の面積を有する國家が成立する事と思はれる。十四萬方哩といへば、大要我が國の本土より少し狭い位である。

但し、上部シレシヤは、條約原案では、獨逸から全然波蘭に移す案であつたのであるが、この地方には獨逸人が多いといふ獨逸側の抗議を容れて、聯合國は一步を譲り、此地は人民投票による所屬國決定方法を適用する事になつたのであるが、結局は波蘭に合併する事とならう。尙又、舊奧國の領域内であるガリチヤ・シレジアは、合して約三萬一千五百方哩の地であるが、近電傳ふる所によれば、この地を向ふ二十五箇年間波蘭に統治せしめ、滿期後は國際聯盟に於て之が處分を決定する事にしたと傳へられる。何せ民族的境界を國境とする方針であるので、中々境界線は定まらぬ。

尙又、人口に於ても正確の數は分らぬが、大要舊ロシアの波蘭人が一千三百萬と、獨逸からの割讓地の波蘭人が總計で四百萬、民族自決によつて合併する波蘭人が約三萬人、奥よりの割讓地の波蘭人が約九百五十萬、それやこれやで、新興國としての波蘭の人口は、三千一百万にも及ぶ事であらう。人種は西部スラブ人種に屬す

る純ポーランド人が約七割内外を占め、其他では猶太人多く、續いては獨逸人・ロシア人・奥太利人・チェツク人等である。尙又この領域地方が麻、穀物の主要産地であり、甜菜馬鈴薯の産額多きは誰人も知る所であつて、生産業に於ては世界有數の地である。

正確の統計が發表されるまでの便益として、新興ポーランド國に屬すべき領域と人口の地方割合を左に示さう。

ポーセン	一一、三〇〇、〇〇〇方哩	二、一〇〇、〇〇〇人
獨逸より得る部分	四、九〇〇	一、七〇〇、〇〇〇
東プロシヤ南部人民投票	四、六〇〇	五、四〇〇、〇〇〇
上部シレシヤ(人民投票)	五、二〇〇	二、二〇〇、〇〇〇
ガリチヤ	三〇、六〇〇方哩	八、八三〇、〇〇〇人
シレシヤ	九〇〇	三、六〇〇、〇〇〇
奧國より得る部分	四九、五〇〇方哩	一一、九四〇、〇〇〇人
露國より得る部分	三、一〇〇	三、五六〇、〇〇〇
舊ポーランド王國	四九、五〇〇方哩	一一、九四〇、〇〇〇人
ウイルナ縣グロドノ縣	三、一〇〇	三、五六〇、〇〇〇

沿革 波蘭は古いスラブ國の一つであつて、既に西曆紀元後九百年代の末に一の王國を建て、基督教義を奉じ、ローマ文明を輸入し、獨逸皇帝の支配下に屬して居

たのであるが、第十四世紀の初めに獨立してから、次第に領地を擴張し、國威の宣揚を圖り、十五世紀に入つては、東歐第一の強國となり、文化を四隣に布いて其勢中々盛大であつた。その全盛期に於ける波蘭の領域は、歐羅巴の中部に互り、西は伯林近郊に及び、東は莫斯科、南はクリミヤ、北はバルチック海に互る地域を占めて居た。然るに第十八世紀の後半になつて、時の露西亞皇帝カタリナ十二世は、プロシヤのフレデリック二世及び奧太利王と一緒になつて、三回に互る波蘭の分割をなしたのである。これ第十七世紀頃より次第に衰頽に向つた上に、國內では貴族階級が跋扈して紛擾を極め、政治上の問題に没頭して、他を顧みる暇がなかつたからである。かくして一時東歐に覇を稱して居た波蘭は、三國に三分せられる事に依つて、國家の命脈を斷つに至つたのである。

其の後、一時ナポレオンの下に、ワルソニア侯國として復活した事もあるが、一八一五年の維納會議によつて、再び露・普・奧の三國に三分せられた。爾後波蘭人は幾度か回復を計畫したが、其の都度失敗に歸し、約百ヶ年の間この三國の治下にあつて、種々の迫害を蒙つて居たのであつたが、俄然世界的の大戦亂の勃發に遭つて、一陽來復の好機を得たのである。即ち世界戦争の中途に於て、露國は自國內に發生せ

る革命に依つて崩壊を來し、戦亂五ヶ年の後、獨逸政府の轉覆を招致したので、此機を利用し遂に獨立政府を建て、列國の承認を得て、始めて獨立國の班に列するを得たのである。

嘗て、露西亞大革命の勃發に際し、露領内波蘭は率先して獨立を宣言したが、波蘭人の考では、單に露領内の舊ポーランドの再興のみでは満足が出来ず、獨逸や奧國に分割せられた部分までも包容する所の大波蘭を再興しようとして下腹があつたから、當時頻りに獨逸政府が露國の顛覆を機會とし、波蘭の獨立につき建築する所が多かつたが、波蘭人は却て之れを潔しとせず、窃に獨領内のポーランド人分布區域をも併せんと計畫して居たのである。所が大正八年の秋となり、獨逸は戦敗の結果、最早戦ふ勇氣も抜け、終に聯合國の前に屈服する事になつたので、茲に初めて波蘭は多年の素志を達し、正々堂々の獨立を宣言し得るに至つたのである。

獨領地の隔絶

波蘭國の新興は、第一獨逸領地の東プロシヤと西プロシヤとを全く隔絶して了つた事になる。殊にバルチック海の要港ダンチヒが、波蘭の爲めに獨逸の手から取離された事は、獨逸にとつて大なる損失である。ダンチヒは今次の平和會議に於て、中立地帯たる事が保證され、國際聯盟の委任統治といふ事に

なつたのである。何故この地が自由市として保存せられる様になつたかといふと、波蘭は今回の獨立によつて大なる面積は出來たが併しダンチヒを得なければ海への出口が無い所から、波蘭はバルチック海に臨んだダンチヒを要求したのである。波蘭がこの要求をなした背後には、これに對する同情者のあつた事を忘れてはならぬ。かのウイルソン氏の如きは、大正七年一月八日になせる十四箇條の平和基礎條件中に於て、純然たる波蘭人の居住する地域を包括する獨立せる波蘭國創建せられざるべからず、而て同國は自由安全なる海への出口を、確保されねばならぬといつて居る。かゝる背後の應援が、獨逸とこの港を争ふに至つた原因をなして居るのである。かゝる同情があり、又波蘭自身も強要したのに、何故この地が波蘭領に全然ならなかつたかといふと、それは民族主義の尊重が禍したのである。即ちダンチヒは人口二十萬の内、獨逸人は其六割の多數を占め、波蘭人は約一割に過ぎぬから、之を波蘭に譲り渡す理由がたゝぬ。又ダンチヒ縣全部七百二十九方哩の地域内について云へば、七十四萬の人口中五十三萬が獨逸人で、波蘭人は十萬といふ様な割合である。依て民族本位に考へると、どうしても波蘭領にする事は出來なかつたのである。

かく海への出口を波蘭に與へるがために、西プロシヤの地が波蘭に割かれる事になつたので、獨領の東プロシヤは、全く本國からかけ離れた處にポツリと取殘される奇觀を呈した。この事は波蘭に取つても、又獨逸にとつても、極めて都合の悪い事といはねばならぬ。

東プロシヤの地には、西南隅地方を除く其他の地方では、波蘭人よりも獨逸人の方が多く棲んで居る。依て西南隅地方は、人民投票によつて所屬を定める事としても、東プロシヤの大部は、民族本位から云へば、當然獨逸領として存続すべき性質のものである。併し前にも言つた様に、民族自決の方策が理論としてはよいが、實際上不自然である事は、遺憾なくこの地の處決がこれを表はして居る。即ち、將來獨逸と波蘭との間の紛擾は、必ずやこの接觸せる領域關係から起つて來る事と思はれる。波蘭は、ダンチヒの獲得によつて、海への自由は有した譯であるが、自分の繩張りの内に獨逸の領地がある事は、どれ程面白くない事かしれぬ。波蘭が面白くないばかりでなく、獨逸は更に不便で、獨立自由市であるからダンチヒは自分の方でも利用は出來るものゝ、第一波蘭領を挾んで自分の領土が二ヶ所に隔離せられた事は、統治上及び國際關係上、非常に不都合の事である。成る程、ダンチヒ及附

近數十萬の獨逸人口、固より重からぬ譯ではないが、之に依て二千餘萬の波蘭の國家的生命を損ふ事があるとすると、あまり杓子定規に捉はれず、一思にダンチヒは固より、東プロシヤ全體を、波蘭領にすればよかつたと思ふ。

係争地ガリチヤ 平和條約に於ては、曩に獨逸側との境域のみを決定して居たが、最近には又舊埃太利領であつた東部ガリチヤの地を、國際聯盟は向後二十五ヶ年間波蘭に委任統治せしむる事に決定し、二十五ヶ年經過の後は、國際聯盟が其の處分をするといふ事になつた。依て若し、波蘭が強い國家として存立して居たならば、二十五箇年の後には、當然この地方を併す事になるのである。

東部ガリチヤの地は、古くは波蘭人の占據する地であつたのであるが、第十世紀になつて小露人の手に渡り、後又波蘭王國に所屬し、更に第一回の波蘭分割に際し、埃國に奪はれたのである。従つてこの地方には、小露人も居れば、波蘭人も居る。まづ波蘭人の分布を見ると、西部ガリチヤには波蘭人が住民の約九十八パーセントを占めて居る。但し、これは波蘭側の統計であるから、實際には之より少いかも知れぬが、大體に於て波蘭人が大多數を占めて居るのは事實である。

所が、サン河以東の地、即ち東部ガリチヤの方になると、波蘭人はレンベルヒ其他

の都市には多く住んで居るが、一般の地には極めて少い。大多數は小露人である。こんな分布關係になつて居るので、小露人は東ガリチヤの占有について波蘭と屢争つたのである。殊に大正八年の初めには、波蘭とウグライナとの間に、激烈な戦争が行はれて、とうとう波蘭軍はサン河以東の地を占領した事がある。なる程、人種の分布から云ふと、小露人はサン河以東に於ては、約七割五分の多數を占めて居るから、優勢であるべきであるが、併し、多數の小露人は田舎の住民であつて、極貧乏な無知識者階級である。之れに反し、波蘭人は多くの土地を所有し、政治表面にも立ち得る貴族階級の大部を占有して居るのである。従て其住居も、レンベルヒ其他の都市に於て營まれ、永き間下層貧窮な小露人の上に立つて、之等を壓迫し來つたのである。

人口問題から云へば、小露が人民投票による所屬決定を主張するのは、當然の事であるが、悲しいかな上述せる如き歴史關係があるので、此地の實權は波蘭人の手中に收められて居るのである。それかあらぬか、とうとう巴里の最高會議では、東部ガリチヤの委任統治を波蘭に與へる事にしてしまつた。數度の血戦によつて、レンベルヒ、ブルゼミスル等の市街は破壊され、兩軍共に多くの死傷を出して居た

東部ガリチヤの係争も、條約上ではかくして、一先づ梟がついたのである。小露のためには氣の毒ではあるが、一方波蘭人が強き決心を以て國家の再興を圖り、近時著しく自治の能力を發揮し、又一方軍事上に於ても、過激軍と對抗して相譲らぬ其雄々しい態度は、聯合各國の信任を一段ならしめ、この結果を生むに至つた有力原因をなしたのであると思ふ。隣國ウクライナが、今や全く過激派の浸潤に遭つて居る時に際し、波蘭は果して永久に、過激派の脅威を攘去する事が出来るか否か。

波蘭は實に内整外調、多事の國難に處して居ると云はねばならぬ。近時の波蘭の内政外交問題は、たしかに波蘭國の運命を決定すべき、大事の試金石であると思ふ。

波蘭の獨立と獨逸の損失

波蘭領を隔て、領地が二箇所に存在する様になつた事は、獨逸の損失であるに違ひないが、それにも増して獨逸の損失とする所は、經濟的關係そのものである。かのポーゼン・シレシヤ地方は、有名なる石炭の産地であつて、舊獨領ではまづライン・ウエストファリア地方につぐ産額を有して居るのである。佛國との間に問題を醸したザール地方に比べると、約二倍半の多くを出す位である。かゝる多量の石炭が、自國の手から離れ他國の手に渡る事は、大なる損失であるが、更に同地附近の隆々たる製鐵も皆無となり、製綿、機械其他の工業

が一朝にして奪はれるのは、獨逸にとつてどれ程大なる苦痛であるか知れぬ。

この度の講和會議では、出来るだけ獨逸の經濟的發展を阻止しようとする聯合國側の意嚮が見え透いて居る。富源の地方は色々の理由を附して捲き上げられ、殖民地は全部奪ひ去られ、しかも巨額の償金を出さねばならぬ羽目に立至つて居る。實に弱者となる勿れの教訓は、茲にも窺ひ知られる。

抑も、獨逸が戦前六千七百萬の人民を養ふ事が出来たのは、要するに獨逸が商工業であつたからである。若し獨逸が農業國であつたら、逆も四千萬人以上は養ふ事が出来ぬのである。それが講和條約の結果殖民地全部を失ひ、商船及び海外の投資全部を沒收され、海外より原料及び食料品の輸入を得なくなつた。其上に獨逸の寶庫ザール谿谷を佛國に割據し、尙ほ又ポーゼン・シレシヤの地方を失ふに至つては、商工業國としての獨逸は全く破壊されたものである。然も之に加へて、年々聯合國に對し莫大なる賠償金を支拂はねばならぬのである。如何に勤勉な獨逸人でも是では立ち行けない。さりとて外國へ移住しようとしても、聯合國は入國禁止を食はす、依て結局獨逸人の多數は職業を失ひ、窮困状態に陥るより外ない。政治的に社會的に、之れ程危険な事はないのである。講和條約苛酷の聲は獨逸國

内に満ち、人道上の大罪を高唱して、講和條約修正の運動があるのは、嘗に戰敗國の倨傲としてのみ睹るべきではなからう。

かく獨逸が經濟的に苦しめられる背後に、英國のある事を忘れてはならぬ。英國と獨逸とは昨日も敵、今日も敵、否、將來とても敵である。依て今日戰勝の餘威を以て、出来るだけ獨逸を叩き込んで置かうとは、英國の魂膽である。殊に將來の獨逸はどの方面に發展するかといふと、露國方面が最も都合がよい。と云ふのは、從來の東漸政策には隨分手を焼いたし、又他の國でも將來この方面では監視の眼を外すまい。して見ると、最も露國人の氣質を呑み込んで居る關係上、勢將來の獨逸は、東方の露國方面に手を展ばすの外はない。所が露國方面に大なる野心を持つて居るのは英國である。英國は政治的にも露國を手に入れんとして居るし、殊に經濟方面では何處の國よりも、より多く有利の地位を露西亞に占めんと焦慮して居る。この矢先であるから、英國は極力波蘭の獨立を鞏固ならしめ、將來獨逸が露國に這入り込まぬ様にと企て、居るのである。

云はゞ、波蘭は一の緩衝地帯となつた譯であつて、英國のためには忠實な獨逸發展阻止の垣根となつて居る譯である。垣根が強ければ強いだけ英國にとつては

都合がよいから、この垣根を固めるために、波蘭の利便を圖つて居るのであると見ることが出来るよう。

波蘭の將來

將來の波蘭がどうなるかは、出來た儘の獨立國に對して、縁起でもないの感があるが、併し、四圍の事情から推して見ると、其の運命も大體卜知される様な氣がする。第一、波蘭の將來が危険だといふ事は、境界問題に於て、之を認める事が出来る。即ち波蘭の建設のためには、露領波蘭を割いて與へねばならぬのであるが、協商側からいへば露西亞、波蘭共に自分等の味方として引入れようとして居る。して見ると、味方の肉を割いて味方のものに與へるの筆法となるのである。協商側の對露政策が浮雲の様な今日、未だ露西亞方面の境界が決定せぬといふ事は、頗る危険な事であるといはねばならぬ。

第二の問題は、人種問題である。果して波蘭が、將來人種問題なくして獨立を維持して行くものとは思へぬ。何となれば、ポーランドには約七割内外の西部スラブ人の外に、猶太人、獨逸人、埃太利人、チェツクスラボツク人等が居る。依て波蘭の將來は、從前の埃洪國の二の舞を演ずる事なくば幸である。就中猶太人との問題が、危険性を伴つて居る。何となれば、波蘭の領域内には多くの猶太人が居る。今

日世界に散在して居る猶太人の總數は、大約一千二百萬であるが、其の内の約二分の一は波蘭の領土内に居ると云はれて居る。所がこの猶太人と波蘭人とは、歴史的に仲が悪い。猶太人は波蘭人によつて常に迫害されて居る。猶太人を迫害する事は、波蘭人にとつては朝飯前の事の様に考へ、彼の財産を奪ひ體罰を加へ、或は教會を破壊し、金錢を強奪するなどあらん限りの迫害が加へられて居る。かゝる間柄にある兩人種が、同一國內に生存する上については、將來何等かの形式で紛争を來すべきは、火を賭るよりも燎かである。

第三には、一定の國民性なき波蘭人が、一國の文化を形成し、一定の藝術科學を建設し、國家的體面を維持し行くや否やの問題である。尙ほ又、政治的訓練に乏しい波蘭は、現に早や國民民主黨と波蘭社會黨とが相對峙し、各々相譲らず争つて居る。民主黨は協商側に屬し、猶太人排斥の方であるに對し、社會黨は獨逸側に屬し、猶太人庇護の立場にある。かゝる政黨の對峙は、必ずや政治的に分裂し、國家の破滅を誘致し、恰も埃洪國の二の舞を演ずる様になりはせぬかと危まれる。

二、フィンランド芬蘭共和國

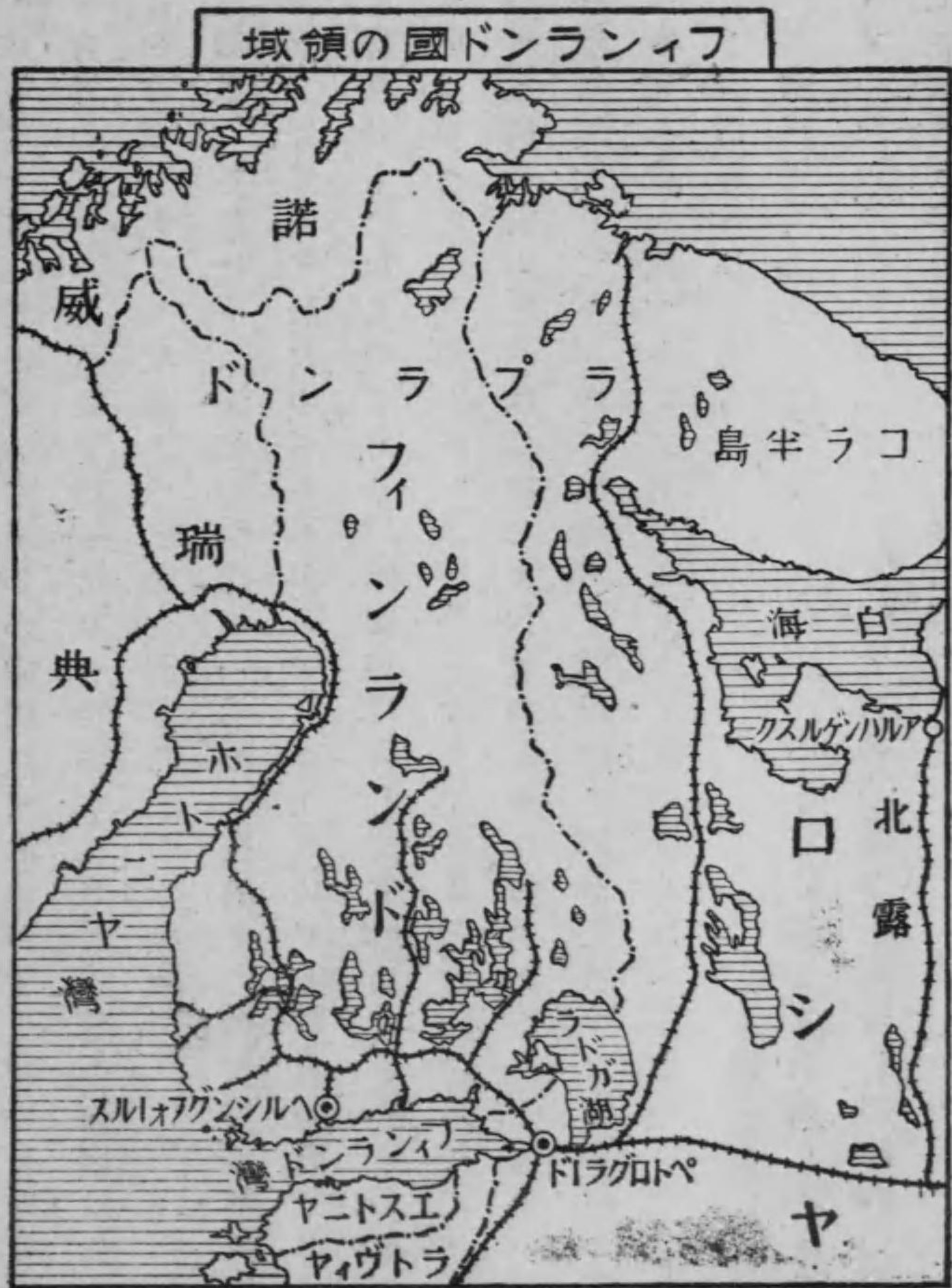
概説

一八〇九年以來、露國の治下に立ち、露國の壓制に堪え得て屢、獨立を圖つて成らず、今日に及んだのであるが、露國に大革命が起つたのを好機とし、遂に獨立を宣言して、列強の承認を得るに至つたのである。芬蘭の面積は約十二萬五千七百餘方哩であつて、波蘭よりは約一萬方哩ばかり狭い。

沿革

芬蘭は十二世紀の頃、瑞典の爲めに征服せられ、爾來五世紀に互りて其の支配下に服して居たのであるが、一千八百九年に至り、瑞典の配下から轉じて、露國に併合せられたものである。露國が併合した當時には、十分この地に自治を許すといふ取きめてあつたが、いざ併合となつて見ると、前の約束はケロリと忘れて了つて、露國政府の壓迫は月に年に加はつて來たのである。一例をいへば、この國の軍隊を解散して、芬蘭の軍備は悉く露國の本國から送つて來た所の兵士を以て之に充て、兵役に服すといふ男子らしき正當の權利さへ芬蘭の手中から奪ひ去つたごとき即ちそれである。

爾來芬蘭人は社會的に去勢され、國民の意氣は婦女子の如く衰えてしまつたのであつたが、今次の戦亂によつて獨立再興の機會を招致し、列國の承認を得て、目出度芬蘭人多年の宿望を達し得た譯である。



得たのである。所が其の後獨逸の雲行が悪く、又露國があんな結果になつて協商

芬蘭の獨立は、一九一七年の七月、即ち戦争最中に於て既に露國に對して宣言されたものである。此際には露西亞、瑞典、諾威、佛國、西班牙、丁抹獨逸によつて承認を

側から手を退き、獨逸と單獨講和を結ぶ様になつたので、芬蘭の内部も之等の事變に應じて次第に變化して來た。

つまり従來の親獨派が俄かに親英派に早變りをし、獨立の承認も寧ろ聯合國側の方のを要求する様になつた。一方又聯合國側では、従來親獨主義である芬蘭を獨逸から引離し、自分の方の味方にしようとの魂膽も手傳つて居る様に思ふ。聯合國側の承認は大正八年二月に佛國が逸早くなしたのを手始めとして、五月になつては英國、米國、同月末には我が國も芬蘭の獨立を承認する事になつたのである。國家としては波蘭の様に其の基礎が鞏固ではないが、併し列強國の緩衝地帯でないから、どうやら將來獨立國の體面を保持する事であらう。

芬蘭の土地と人

芬蘭はあまり高くない丘陵が國中を起伏して居る。又フィンランド灣には有名な峽灣が多く、無数の島嶼が散點して、附近の航海を妨げる事が尠くない。且つ南部地方は地圖を見ても首肯される様に、不流の潜水が頗る多く、沼湖は土地によつては殆ど地積の二分の一に互つて居る所がある。氣候は一般的に寒く、殊に冬期は寒さが厳しいが、併し其代り、夏期になると氣候は割合に溫暖で健康にも適する。

芬蘭は人を見ても土地を見ても、一般に寂しい氣分のする所と云はれて居る。一た、この地は嘗ては瑞典の配下にあつて其の統率に甘んじ、近くは露國の苛政に壓迫され來つたのであるから、國民の頭腦は次第に自尊心を失ひ、無勢力に化したのである。併し、今回の獨立宣言後は、長夜の眠から醒めた様な勢で、大に國勢の伸張を期して居る。

芬蘭の内争と將來

芬蘭の國內には、吾人の想像も及ばぬ様な國語問題についての軋轢がある。それはどういふ事かといふと、以前この地が瑞典の支配下に數百年間あつた關係から、瑞典語を使用するものが頗る多い。そんな所から、芬蘭語か瑞典語かといふ問題があつて、これが階級戦争にまでも油を濺いで居るのである。この二派の軋轢が、これまで随分恐ろしい國內戦争を生んだ事もある。

獨立よりもバンが當面の問題であつた大正七年の十一月には、恐ろし大同盟罷工が芬蘭で起つた。然も國內の騷擾は、一九一七年の夏から組織された赤衛軍といふ民軍が、芬蘭に駐在して居る露國の守備隊から軍器を掠奪して、荒れ出した事に依て一層激しくなつた。さうして露國の官憲は悉く其の襲撃に遭ひ、ヘルシンゲンダフォオルスの總督官邸は赤衛軍に強奪されて、彼等の根據地となつたのである。

所が妙なもので、あまり赤衛軍があげられるものだから、これが防禦のために義勇軍が組織された。之を赤衛軍に對して白衛軍といふのである。政府は大變喜んで、一九一八年の一月廿六日に之を公認し、赤衛軍に當らしめたのである。かくして、赤白軍は相對峙して互に血戦して居たのであるが、とうとう赤衛軍が勝を占め、元老院がボスニア灣頭のヴァサといふ所に遷つた後で、獨裁政府をつくり、恰も露都の過激派政府の様にしたのである。赤衛軍の獨裁政府は交通機關も通信機關も取り上げ、芬蘭銀行の七千萬圓の有金を没収し、且つ三千万圓ばかりの紙幣を、舊の役員の名義で發行するなどの随分人の悪い事をしたのである。かゝる亂暴の中にも、たゞ一つだけ赤衛軍がよい事をした。それは何かといふと、人民議會が憲法を制定するといふ案を造り上げた事である。併し、この赤衛軍の背後には、過激派のある事を忘れてはならぬ。所がこの後援と十萬の精兵、豊富の兵器彈藥を有つて居る赤衛軍が、とうとう白衛軍のために攻め滅されて了つたのは是非もない事である。

赤衛軍が倒れた後に、一度落のびて居た元老院がのこ／＼、ヴァサから歸つて來て、代議院を召集し、政體を改める事にした。併し、之には共和政體とすべきか、又王

政にすべきかについて、議論沸騰の状態であつたが、そのうちに獨逸が倒れたものであるから、同國內の親獨派は其の勢力を墜し、白衛軍の棟梁であるマンネルハイムが統率人物となつて、英國の援助を乞ふて、共和制を布いたのである。一方英國では、芬蘭をも味方につけて置く事は、此際必要の事であると思惟したのか、マンネルハイムの渡英を歓迎し、芬蘭の獨立を二つ返事で承認したのである。

かゝる事情によつて、現在に推移して居るのであるが、果して將來の芬蘭はどうなるであらう。強國と強國との間に挟まつた地帯でないから、幾分安全ではあるが、内政の紛争は應て他國の乗ずる機會をつくるではなからうか。殊に現時の芬蘭は、戦後の疲弊と財政の紊亂によつて大に苦んで居るといふから、其爲政者の苦心も一通りではないと察せられる。尙又露國過激派は其の過激思想に於て、或は武力の宣傳に於て、四隣を脅威し、芬蘭をも蕪捲せんの概を示して居るから、芬蘭たるもの大に警戒せよは、今日の獨立の喜は再び露國壓制の憂にならぬとも限らぬ。

三、其の他の諸邦

分裂せる靈西亞を、大體過激派と反過激派に分類する時は、反過激派に屬するも

のには大小十餘の國家がある。併し、其の内前章までに述べた所の波蘭、芬蘭とを除けば、其の他にはあまり取るに足る様な國はない。今日獨立を標榜せるものにと就ても、果して何時まで自立が出来るかが疑はれるものばかりである。殊に近來は過激派軍の蕪捲に遭つて、其の軍門に降るもの頻々たるの狀態であるから、從つて其國土の境域も常に異動し、判然と述べる事が出来ぬ狀態である。故に茲には之等の諸邦を一括して一章となし、其内に於て極めて概略の説明を試みようと思ふ。但し、以下述べる中には、最早敗亡して居るものもあるし、滅亡に近いものもあるのであるが、茲には大體其の地域を明らかにし置く位の目的で列記する。

西伯利政府

オムスクを中心として一時反過激派の覇を稱して居たのであるが、過激派のために次第に本據を突かれ西伯利の天地を蕪捲されて、とうとう敗亡して了つた。我が國は曩にオムスク政府を承認して、此國へ大使加藤恒忠を派遣して居たが、過激派の侵す所となつて、西伯利政府の本據が無くなつたものだから、大使は本國へ引還す事になつた。オムスク政府の最高主權者は、コルチャック提督であつたが、提督は其の根據地が過激派の掌裡に歸して後、革命黨のために射殺されたとの悲報さへ傳つて居る。同提督はかつて日露戦争の當時は、眇たる一青

年士官に過ぎなかつたのであるが、旅順口籠城に際し、乃木軍の襲撃に支へ切れぬでとうとう降伏し、一時我が國で俘虜生活をした經歷を有する人である。

茫茫數千里の大陸を支配せる同提督が、あたら一朝にして敵刃に斃れ、極東總督ロザノフ中將を始め幾多の將士が我が國に亡命して、僅かに餘喘を保ち居るの現狀を見れば、榮枯盛衰の無常を今更に感ぜられるのである。

高加索政府

人口二萬五千を有するカスピ海の沿岸であるベトロフスク港を本據とせる國體であつて、露西亞大革命後獨立を標榜して立つて居るのである。

この政府は未だ過激派の攻撃を受けず、従つて所謂過激化の災禍を免れて居る。

南露政府

高加索の北方に續く地方で、コーカシヤ及びドン河の流域を含む領域の國家である。獨裁官はデニキン將軍で、其本據はアゾフ海の奥の詰にあるタガンログ市である。デニキン軍は屢、過激軍と血戦し、一勝一負であつたが、後次第に過激派軍の壓迫を受け、今や南露の一隅に僅かに其の餘喘を保つて居る。

小露政府

一名ウクライナと稱せられる地方であつて、舊露西亞國中最も土地肥沃で、農産物の豊饒なる事世に有名の地である。古來、小露の農民大露を養ふといふ諺がある程で、露西亞の農産物は多くこの地方より出すのである。曩に露西

亞の大革命に際しては劈頭獨立を宣言し、獨逸と單獨の講和を結んだのであるが、今や過激派の侵略に遭ひ、殆んど國中過激化せられて過激派の配下にあるの狀勢である。首府キユフは南露第一の都會である。

白露政府

所謂白露人の住地であつて、其地域は波蘭と過激派との中間に挟まれ、其の交戦區域をなして居る。この國も獨立は中々に困難であつて、ザイルナを含む地方は波蘭のために割かれ、白露人の居住地域は大半過激派軍の勢力配下にあるの狀態である。

リトワニヤ

バルチック海岸に沿ふ小國である。露西亞の崩壊を機とし獨立を宣言せる國であつて、リトワニヤ人は東プロシヤの北境地方に多く居住し居る關係上、講和會議に於ては聯合與國側の同意を得、ニイメン河の下流地方、九百十方哩の面積を有するメメルを獨逸より得る事になつた。かくメメル地方の獲得によつて、リトワニヤは海への出口を有する事になつたから、將來、何等の面倒もなく、其の材木及び農産物を、バルチック海に送り出す事が出来る様になつた。

ラトヴィヤ

レット民族の住居地であつて、クルランド縣とリツォニア縣の南半から成る面積約二萬方哩、人口約二百萬の國である。ラトヴィヤも、最近エストニ

ヤに倣ひ、過激派政府との講和意志があるから、將來、エストニア、リトワニアと共に、所謂バルチック沿海の三國は、過激派政府の勢力配下に附く事と思はれる。但し現在に於ては、露國過激派獨逸及び聯合國側の三勢力が萬字巴をなして入り込んで居るから、其の形勢は恰も大戰前のバルカンの形勢にも比すべきものがある。

エストニア

フィンランド灣の南岸をなす地方で、首府は同灣岸のレヴァルである。住民は芬蘭人と同一民族で、其數約百四十萬が、一萬六千方哩の地域に住んで居る。過激派軍とは久しき間血戦相見えて居たが、遂に大正九年の二月二日、過激派露西亞對エストニア講和條約は調印を終了した。其の條約の内主要なる條項を擧げて見ると、一、エストニアの永久中立問題國際間に議せらるゝ場合に於ては、露國は之が成立に援助す。一、露國は芬蘭灣の中立を承認す。一、エストニアは舊露國の國債を負担せず。一、露國はエストニアに千五百萬留の金を支拂ふ。一、露國はレヴァール、莫斯科連絡鐵道の敷設をエストニアに提供す等の箇條がある。

北露政府 大露西亞の北方アルハンゲル州の大部を占める地方であつて、首府は人口五萬を有する白海岸のアルハンゲルスクである。以前には英佛等の聯合軍の援助によつて、過激派軍と對抗して居たが、今は獨力過激派軍に相對して居る。

埃匈國の分裂と其の解説



第三 奥匈國の分裂と其の解説

今回の世界大戦の結果ハプスブルグ帝國は一朝にして脆くも土崩瓦解し、今や、その舊態を著しく變じ、奥匈二重帝國は既に亡んで其中にチエッコ、スロヴァキヤ及びユーゴ・スラブの二民族國を興し、從來の奥地利、匈牙利は其疆域を縮めて二つの貧弱國として其の形骸を止める事になつた。

亡國同様の悲境に立至つた舊奥匈二重帝國は、嘗て一八六七年に於て奥地利帝國と匈牙利帝國との二國が聯合し、奥地利の皇帝がこれに君臨したものである。爾來、同一君主のもとに聯合國を形成し、獨逸と共に歐羅巴の中央に位して、面積二十六萬方哩、人口五千二百萬を包容せる世界強國の一つであつた。然るに今次の戦局は、遂にこの二重帝國を分裂し、且つ、北にチエッコ、スロヴァキア國、南にユーゴ・スラブ國新に立ち、トランシルバニア地方はルーマニアにガリシヤの地は波蘭に割譲し、其の他アドリヤチック沿岸を伊太利に割かれ、今や、奥地利は面積五萬四方哩、人口六百五十餘萬、匈牙利は面積六萬餘方哩、人口一千萬の小弱國と化し、共に一小共和國と激變してしまつたのである。

以下如何にして奥匈國が分裂の運命に陥つたか、並に分裂後、是等諸邦が如何なる

舊埃匈國の分裂地圖



一〇六

状態にあるかを述べて行くことにする。

埃匈國瓦解の運命

世界八大強國の一と稱せられた埃匈國が、かくも果敢なく崩壊したことにについては、何人も意外に思ふ所であらうが、その實此の帝國が、かゝ

る運命に遭遇したのは、蓋し當然の成行で、寧ろ宿命とも謂ふべきものであると云はれて居る。埃匈國の今日まで存在して居つたのは、全く時代錯誤であつて、よしや、今次の戦亂に遭遇しなくとも、その崩壊分裂は、單に時間の問題であると觀測されて居つたのである。

本來、埃匈國は地形に於て、極めて人為的であると同時に、最も劣悪なる境界面を有して居る。而してその境界面の大部分の領域は、幾多の隣國の水源地になつて居る。

又、境界地方に於ける埃匈國の住民は、多くの異民族より成つて居る。例へばガリシヤ地方には五百萬の波蘭人と四百萬の小露西亞人、トランスシルバニア地方には三百二十五萬の羅馬人、巴爾幹半島に境する南部の國境地方には五百五十萬の塞爾維人、沿海地方には八十萬の伊太利人が住居して居るし、又、八百五十萬のポヘミヤ人並にスロヴェン人等の如く、國外に母族もなく、何等の聯絡もない民族が混合して居ると云ふ様な状態である。其の他埃匈國に最も多く、尙ほ全帝國に散在せる獨逸系の埃匈國人と、主として匈牙利に住居して居る亞細亞系のマヂャール人等が雜居して居る。

かやうに埃匈國は地形上に於ては極めて不利な地位を占め、人種上に於ても頗る不自然な異元的結合によつて成立して居る國家で、恐らく世界にその類例を見ないことである。かやうに不健全な要素の上に發達して居るばかりでなく、ハプスブルグ家なる一君主の下に、恰も二個の特種なる小括弧が一個の大括弧によつて括られて居るとき國家であつたのである。従つて外部的には一國家を形成して居たものの、その内部に於ては、殆ど風馬牛相關せざる別國同様の觀を呈して居つたのである。

謂はゞ此の二國はハプスブルグ家の君主あるが爲めに存在して居つたのであつて、若し、此の王朝にして廢絶したならば、この帝國も亦共に瓦解を免れないのである。尙ほ治者たる埃地利人とマヂャール人とは、共にその數に於て被治者たるスラブ民族の數に及ばなかつたのである。

かやうな次第で、既に埃匈國は戰前に於て、その將來が大なる問題となつて居つたのである。即ち「改造か」解體か是非其の一を選ぶべき分岐點に立つて居つたのである。

埃匈國はその内部に於て、斯かる大なる弱點を有する以上、外部に發展の不可能

なるは言ふまでもないことである。今日まで同帝國が辛うじて外部に對して、その獨立を維持して居つたのは、要するに三十年來獨逸に信賴して、之をその支柱として居つたからである。實に獨逸との同盟は、埃匈國に取つての生命の保證であつたのである。さればその支柱とも、生命の絆とも言ふべき獨逸が破滅した以上、到底、從來の面目を維持することは出來ない。埃匈國が今日の如き運命を見るに立至つたのは、蓋し自然の成行と言はなければならぬ。

之を要するに埃匈帝國は、最近に至るまで、單に幾多の併立せる民族の混合國であつて、統一ある一國民を形成するに至らなかつた。換言すれば民族間に國家的の統一心がなかつたのである。國民に統一心のない國家は、早晩崩壊すべきことは明白な事だ、これは歴史の事實が證明して居る。埃匈二重國の如き國家が、今日に存するのは、全く時代錯誤であつて、かゝる不自然、不合理な國家の永久に存續すべき道理はない。論より證據、今次の戰爭の爲め、一時に内部に對する壓迫力を失つたから、從來、其の機會を待つて居つた多數の民族は、遂に埃匈國から分離して獨立する様になつたのである。

元來埃匈國には民族的結合がなく、國民思想は常に遠心的に働いて居て、國家的

統一を失つて居つた。是の如き統一のない國家が、永續することは不可能である。若し將來奥匈國の如き國家が出来るならば、如何にその疆域は廣大でも、其の國民が如何に多數でも、早晩崩壊分裂すべきは火を賭るよりも明らかな事實であると思ふ。奥匈國の瓦解の運命は、蓋し當然來るべくして來たものであると言はなければならぬ。

奥匈國の雜多なる民族

最近まで奥匈帝國と稱したこの一大強國は、他の強國の如く、最大多數を占めて居る一民族によつて、一國家を建設して居るものでなく、實に凡そ九種の獨立せる民族と、八種の小民族等からなつて居る極めて複雑なる國家を、ハブスブルグ家すなはち奥地利朝の下に、聯結した混合的帝國であつたのである。

舊奥匈國は人口約五千二百萬で、我が國內地の人口に伯仲して居るが、その人種が甚だ雜多で、詳しくは四十餘種の多きに達して居る。従つて各地に散在居住して居る住民は、それ〴〵風俗習慣言語思想感情利害等を異にして居る。殊に言語は二十餘種に分れて居ると言ふことである。其の主なるものを列擧して見ると次の様なものである。

獨逸語	匈牙利語	ゴヘミヤ語
ポーランド語	タロアチア語	セルビヤ語
伊太利語	ルメニヤ語	露西亞語
ボスニヤ語	土耳其語	其他

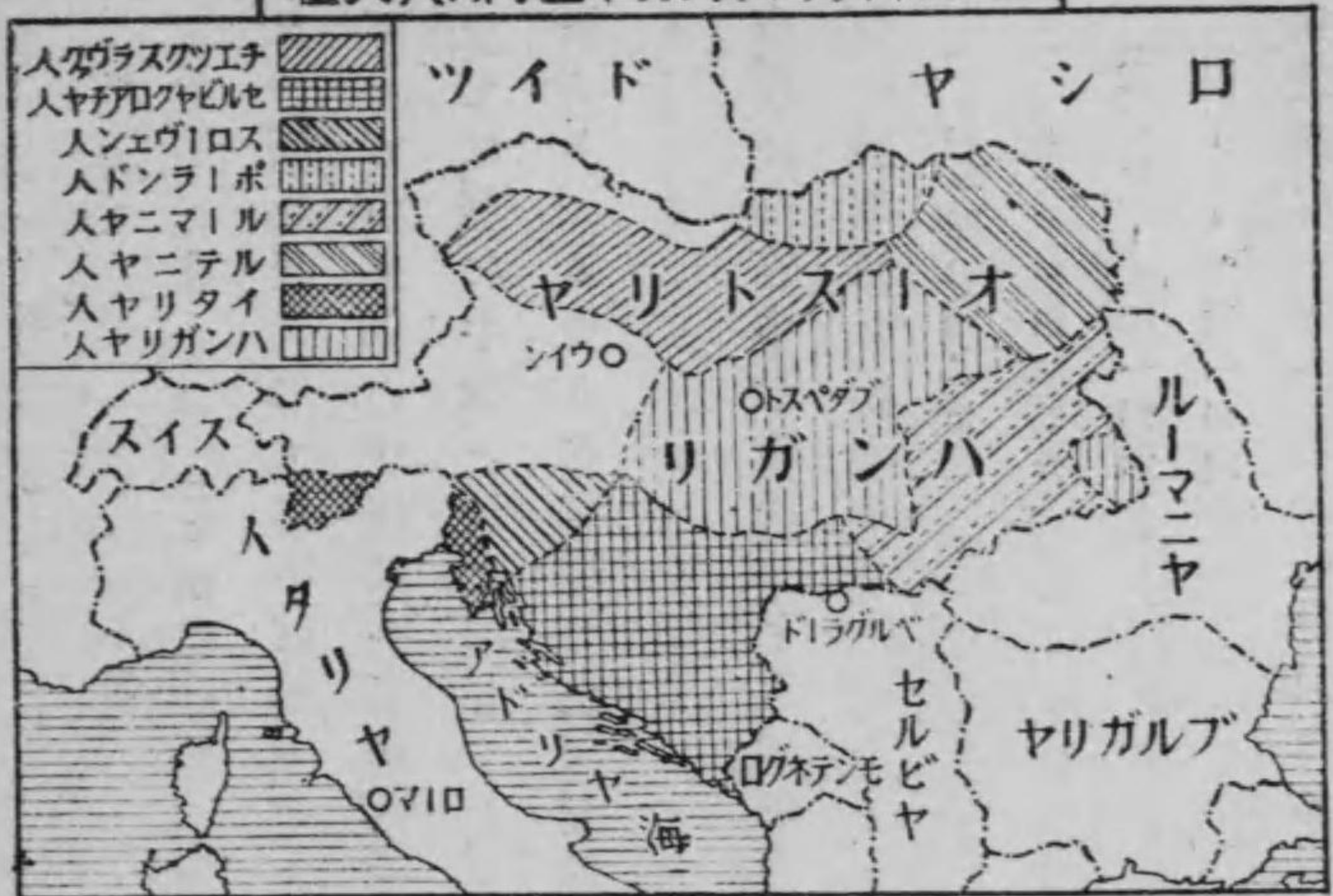
又、言語を異にして居るばかりでなく、各地方によつて文明の程度を異にするところが、大で、中央部の住民は、あらゆる歐洲文明の粹に酔つて居るに反し、山間僻地にあつては、朝に牛豚と居を同じくし、夕に馬鈴薯を味ふことを以て無上の快樂として居ると云ふやうな有様で、徹頭徹尾、混合民族の集合によつて成立して居るのである。

今、茲に是等多數の民族を、人種學及言語學の上から大別されて居るものを示すと次の四種族となる。

- (一) 獨逸種(二割五分)
- (二) スラブ種(四割五分)
- (三) マジャール種(二割六分)
- (四) イタリヤ種(二割四分)

獨逸族は上下奥地利の北部に勢力を占め、スラブ族より人口が少いけれども、智

種人異の内國ヤリガンハヤリトスオ



識の程度が最も進歩して、各人種中、最も勢力を有つて優勝の地位を占めて居る。スラブ族は住民中最も多数を占めて居るが、ホヘミヤ・モラブ・ガリシヤ等其の住民を異にするに随つて言語・風俗等も亦同一でない。従つて民族に統一なく勢力も亦分散の姿になつて居るのである。マジヤール族は匈牙利住民の約四割を占むる民族で、亞細亞人種の系を引き、匈國に勢力を占めて居る。且つ匈牙利が塊地利に合併されたのを常に憤慨し、機會あらば分離し様として居つたのである。其の他伊太利族はアドリヤ海方面に住して一方に勢力を得て居る。

更に、是等多數民族を塊匈により小別すれば、塊地利には獨逸人・ベホミヤ人・モラ

ブ人・スロウヅク人・波蘭人・ルテナヤ人・スロウヅエン人・塞爾維人・クロアチヤ人・伊太利人・拉丁人・羅馬人・マジヤール人などが住み、匈牙利には獨逸人・ボヘミヤ人・モラブ人・スロウヅク人・スロウヅエン人・塞爾維人・クロアチヤ人・羅馬人・マジヤール人・ジプシイ人などが住んで居るのである。

是の如く人情言語思想感情風俗習慣を異にして居る多數の民族の混結した國民によつて、舊塊匈國が形成されて居つたのである。唯、彼等多數の民族は、今日までハブスブルグ家の下に集合雜居して居つたに過ぎない。加之、是等民族の中で、スラブ種が最大多数を占めて居つて、獨逸種は全人民の四分の一に過ぎないにも拘らず、ハブスブルグ家は、常に獨逸方面にのみ力を盡くして、彼等多數の民族に對する利害を顧みない。のみならず、すべて彼等を獨逸化しやうとのみ力めてゐたのである。

かやうな次第で、常に國民の統一を企て様としても、かゝる複雑な國情を有つて居る國家を永く維持することが出来様か、寧ろ無理な統一を強ひて居つたと言はなければならぬ。今次の世界戦亂の禍根も、塊匈國の瓦解分裂も、皆この點に基因して居ると見ることが出来る。

これに由つてこれを觀れば吾々素人から見ても、今回の運命は當然來るべき成行であると考へるのである。

埃匈國崩壞の顛末

前述の如く不自然な地形は、國家的統一を缺き、又難多なる人種の混合は、言語風俗の差異を生じて、國民生活の融和を失ひ、既に戦前より改造か然らざれば、解體か二者其の一を選ばなければならぬ運命に迫つて居つたのである。果して、今回の戦敗は、埃匈國瓦解の時機を早めて、遂に亡國同様の悲境に立至らしめ、國土は四分五裂の状態に陥つたのである。

初め埃匈國は獨軍の西部戦線に破れるや、國民の平和熱愈昂進し、加ふるに國內の異民族は、各獨立運動を開始し、結局分裂の形勢を示し、早くも米國に對して講和を提議したのである。次いで伊軍の大攻撃を受けて、埃軍は壊亂の状態に陥り、伊軍に對して休戦を乞うた。

かくして一九一八年十月廿八日匈牙利の首府ブタベストに重大なる革命が起き、獨立黨の首領カローリ伯は軍隊と氣脈を通じて、同十一月十六日正式に匈牙利の共和政を布告した。

やがてウキンにも亦獨逸人の埃地利國建設を目的とする革命的大示威運動が

起り、更に各種の民族合體及び分離運動は、忽ち埃匈國の各異民族の間に蔓延した。ガリシヤのポーランド人は波蘭に合同せんとし、ガリシヤのルテニヤ人はウクライナ人と合同せんとし、ユーゴスラヴ人はセルビヤに合せんとし、クロアト人はフユイメを占領して、マジヤール人より分離せんとした。殊に、ボヘミヤのチェック人の如きは既に一の共和國を建設したのである。

かくて埃匈國は聯邦組織に依つて、兎に角埃匈國領域を結合しようとして努力した。しかるにその國家の保全に全力を注いだ首相の努力も水泡に歸し、舊埃匈國は社會革命と共になだれの如く崩壞して、領内は各獨立小邦の分立の地と化するに至つた。殊に舊埃國中の各地方は、スロウヰエン、クロアト及び塞爾維等の國民議會が、南方スラヴの獨立を宣言したものを手始めに、北にチェック、スロヴァキヤ國獨立を宣言し、次いで埃國に於ける獨逸系人の國民議會は、獨逸系埃國の獨立を宣言し、各地も亦之に倣つて獨立を宣言するに及び、遂に十一月十二日埃國皇帝カール一世の退位詔勅は、カール自身の署名とラマンシュ首相の副書を以て發表せられ、皇帝は皇后と共にエクハルツォー宮殿を退出せられ、茲に全く埃匈帝國は崩壞するに至つたのである。

神聖羅馬帝國以來、中歐に最大の永き榮譽を有して居つたハプスブルグ家は、一朝にして没落の悲運に逢着することとなり、所謂半壞の朽屋と言はれた奥匈二重帝國は支離滅裂の状態に陥つたのである。

其の後、奥地利は一小弱國と化して共和制に變じ、夙に獨逸社會黨と連絡を取り、獨逸共和國と合併せんと運動をしたが、巴里講和會議に於て否決されて現狀に及んで居る。又、匈牙利は分離して共和國となり、カロリー伯が臨時大統領となつて、聯合國と握手しようとした。然るに聯合講和會議は豫期に反して匈牙利の領土を非常に削減したので、彼は政權をあげて、社會黨及び共產黨に譲らざるを得ない様になつた。其後數度の曲折を経て現狀に及んで來たのである。敗戦國たる獨逸の國情や、實に慘たるものではあるが、奥匈二重國の瓦解後の國情は更に慘また慘を極めて居るのである。いでや、舊奥匈國の興廢の跡を討ねて見よう。

一、奥地利共和國

概説

今回佛蘭西サンゼルマンに於て、奥地利講和委員長レンネル博士に交付せられた聯合國の對奥講和條件を見ると、曾て面積二十六萬方哩、人口五千二百萬

のハプスブルグ家統治の舊奥匈國は全く分散して、この中から匈牙利、チェッコスラヴァキヤ、ユーゴスラヴ等が各々獨立し、歴史上、光彩燦然として居つた奥地利は、僅かに面積五萬五千方哩、人口六百五十萬許の小弱國と化さねばならぬことになつた。

殊に今次の大戦は人も知つて居る様に、その發端は奥塞兩國の衝突に發して居るのであつて、よしや、眞の戦争挑發者は獨逸であつたにした所で、若し奥匈國にして塞爾維に對して、軍事的行動に出でなかつたならば、今回の如き戦争は起らなかつたのであらうし、又、かやうに早く亡國同様の悲境に陥らなかつたのであらう。かく考へて見ると奥地利の衰頹は、全く自得自業の禍と云はねばならない。この奥地利共和國は、將來如何に成り行くかは問題であるが、兎に角、新しい奥地利が微弱なる小國として國際政治の舞臺に残らんとしつゝあるのである。

沿革

新奥地利共和國の前身たる奥地利帝國は、戦前に於て奥匈二重帝國として歐洲六大強國の一であつたが、大戦役の結果は、ボヘミヤ、ガリシヤ、ダルマチヤの一部、ボスニヤ、ヘルゼゴヴィナを失ひ、遂に匈牙利と分離し、又、チロールの南部、クステンラント、カルニオラ及ダルマチヤの一部を伊太利に割讓するに至つたのであ

る。

抑々、此の國は第十九世紀以前は、獨逸諸邦の盟主として、神聖ローマ帝國と稱し其の中に多數の邦國を包含して居つたが、就中奧地利の勢力が最も強大で常に獨逸の霸權を握つて居つたのである。然るに第十九世紀の中葉に至り、之と對立すべき一新勢力即ち普魯西が現はれ、常に相對峙して闘ぐこと久しくあつたが、遂に一八六六年シウレスウイヒホルスタインの處置につき奧國は聯邦議會を召集して、普國征討に決し、兩國の間に挑戰するに及び、奧軍不幸にして大敗した。其の結果、ブライグの平和條約により、獨逸同盟は解散せられ、翌年、普魯西は奧地利を除いて、新に北獨逸聯邦を組織したのである。そこで其の年、奧地利は匈牙利との間に連合が成立し、奧地利皇帝は匈牙利王をも兼ねることになり、茲に強固な國家を建設するに至つたのである。これが即ち奧匈二重帝國の成立である。

其後、一八七九年獨逸、奧地利二國同盟を結び、一八八二年伊太利を加へて、所謂三國同盟を締結し、次第に勢力を得て一強國となつて來たのである。更に、一九〇九年には東方問題及巴爾幹問題に關係して、土耳其領たりし、ボスニヤ・ヘルゼゴヴィナを併せて、中歐に勢力を占むるに至つた。されど聯合國內には雜多の人種があり

て、政治上の統一が、頗る困難な事情があつたけれども、フランシス一世の人望により、平靜を繋ぐことが出來た。されど陰謀は常に絶えなかつた。殊に塞爾維人の怨嗟は頗る大であつて、遂に一九一四年の六月、奧地利の皇太子フラシス・フェルディナンド及び同妃は、ヘルヂェゴビナの首府サラエボにてセルビヤ人の爲めに暗殺されたのである。之れが導火線となつて五箇年に亘る世界大戦争が起り、結局獨逸、奧地利等の同盟側の敗北となり、從來其の機會を待つて居た多數の民族は、遂に奧地利から分離して獨立を企てることになつたのである。かくして世界八大強國の一として天下に雄飛した奧匈二重帝國は、一朝にして亡國同様の悲運に立至つたのである。

奧國の渾沌たる國情

奧地利は匈牙利と分離して、新に一國として中歐に獨立の立場を定めなければならぬ地位に立つた。所が獨立國として決定すべきものは先づ國體である。前奧帝カール一世は、奧地利を英國流の民本的君主制の國體にしようとして、退位後も窈に畫策する所があつたが、當時一般國民の意嚮は、共和主義の下に獨逸との併合を希望し、茲に獨逸人を打つて一丸とした新獨逸を作らうと目論だのである。而て國民議會は、奧國を獨逸と合併する件を可決し、之と同

時に、宰相及國務大臣若干名より成る責任政府を、議會に於て選舉すべきことを決議した。

繼て、この議會に於てレンネル博士が新宰相として擧げられた。氏は外交に關しては從來の方針を繼續し、獨逸との合併を期し、舊奧匈國から分離成立した隣邦との永久的親交を圖ること、及び完全なる交通の自由の回復を計ることを旨とし、内政に關しては紊亂した財政を整理する爲めに、外債を募集し、且つ社會主義的基礎の上に改造を計らんとしたのである。

奧國は經濟上に於ても、政治上に於ても、到底自力を以て國家の獨立を計つて行くことが出來ないから、代表者を、ワイマールに送つて合併を畫策し、又、外相パウエル氏は講和會議に於て、極力獨逸との合併を主張したが、聯合國、就中佛國の輿論は甚だしく之を忌み、遂に最高會議は強制的に獨逸をして、決して奧國を合併しないことを誓はしめた。かくてこの問題は表面上覺がついたのであるが、併し裏面に於ては今尙ほ合併の氣運が愈盛である。唯僅かに奧國工業家は獨逸の爲めに壓迫されるのを氣遣つて反對を表明し、寧ろ、舊奧匈國諸邦並に波蘭羅馬尼等を含むダニユブ經濟聯合を希望して居るといふことであるが、大勢は獨逸との合併を希

望して居ると見てよい。

分裂後の奧國は、國內の不安が絶えないと共に、隣邦との抗爭が絶えない。一九一九年五月に、奧軍がユーゴスラヴ國の豫定領土に入るや、塞爾維軍は之を斥かうとして、戰爭が起り、とうとう塞軍は奧軍を追つて純獨逸人の都市たるクララゲンフルトを占領し、茲に中立地帯を設定して休戦したと云ふ様な事がある。又、奧國は多額の戦前債務と戰爭債務とを有つて居るので、財政は慘憺を極めて居る。

従つて國民の困憊亦頗る甚しく、失業者は漸次その數を増し、剩さへ掠奪を事とし、社會の不安を誘致する如き不逞者も次第に多くなつて居るといふ事である。

又、一國內の食料及燃料の缺乏はその極に達し、殊に奧都維也納の如きは即時その供給がなければ、少くも廿萬人の餓死は免れないと云ふ様な心細い状態に陥つたことさへある。そこで政府は英國に對して助力を仰ぐの止むなきに至り、英國軍隊は市内を行軍しつゝ、食料品の分配に従事して之が救済に當つた程である。最近外部よりの食料品の供給の途が開け、國內多少の改造を見る様になつたが、猶社會的方面にも極めて不安な傾向が増しつゝあるし、政治的方面にも、日々不安が加はつて、前途頗る暗憺たるものがある。

一方、講和會議に招致された宰相レンネル博士を委員長とする委員一行に對し、一九一九年七月二十日、對奧條約は手交されたが、奧地利は到底この條約上の負擔を履行するだけの實力がないと見て國中甚しく悲觀の聲に滿ちた。かのレンネル博士が「奧國全權の任務は、單に聯合國に對して、奧國の實力を知らしむるにある」と述べて居るのを見ても、如何に奧國が現況に於て、困憊して居るかが想像される。次で國民會議は滿場一致講和會議に異議ありとなし、殊に奧國の民族自決權を侵害せる件につき抗議する所があつたのであるが、遂に調印することに決議したやうな状態である。果して、奧國が講和會議の條約を履行することが出来るであらうか、國內の秩序を維持することが出来るであらうか。

奧國の將來

俄然、小弱國に變じた奧地利が、將來能く獨立國として存続すると言ふことは、殆ど不可能としか思はれない。佛蘭西の政治家及諸新聞紙間に於ては、奧地利を以て第二の瑞西とし、永久局外中立國たらしめよと、一八三九年白耳義に局外中立を保障した國際條約を奧地利の爲めに採用せよなどと議論されて居るのである。併しながら瑞西が小國として中立的獨立國を形成して居るのは、永い歴史の賜である。奧地利は同じく山地たる點に於て多少地理的に瑞西に似て

居る丈であつて、それ以外は全然異なつて居る。由來、奧國は歴史的に孤立を欲しないで、共同を要求して居る國民である。依て此の國民が久しく孤獨に耐え得ようとは思はれない。「奧國にして他と合併せずとせば、聯合國は之に獨系ポヘミヤ及び獨系南チロルを附與せんとするか」と主唱して居るのを見ても、その眞意が察せられる。

奧匈國分裂の跡に残された奧國は、最も天然物に乏しい貧弱國である。今回の分裂により、其の主要なる農業地、鑛業地及工業地の大部分を喪失し、今や到底自力を以て、維也納府を維持して行く可くも思はれない。従つて同市二百萬の人口は日々減少し、地價は暴落して居る。否な此の儘であれば、奧地利内の工業家、銀行家、商人等は波蘭、チエッコ、スラヴァキヤ等に移つて營業する外は無からう。勿論、此度の不幸が却つて奧地利を刺激し、大に發憤せしめて、奧國內の農業やら森林業を改善し、又、石炭の欠乏に對して水力利用策を講ずる様にならないとも言へないが、元來、氣力に乏しいと評されて居る奧人の性格に徴して見ると、これもまづ六ヶ敷いやうに思はれる。小弱國としての地位をどうか維持する事も困難であるが、更に今日の形勢を一變し、國運を隆盛にしようとするには、奧地利人は餘りに平和の民

であり、活動嫌ひの民である。現に休戦後、伯林でも、ブタペストでも騒亂相續いて、度々政府を危険ならしめたに拘らず、維也納のみは、民衆が割合に冷靜穩和であつた如きは、奥國民の無氣力を表はすものであると見る事が出来よう。

次に奥國の周圍を眺めて見ると、奥地利よりも有力な邦國が現はれて、之を取り圍まんとして居る有様である。人口四千萬に膨脹して南方の雄を稱する伊太利は言ふまでもなく、舊奥領のスラブ民族中、波蘭は人口二千萬で波羅的海に出口を得、ユーゴースラブは人口一千二百萬でアドリアチック海岸を領有し、チエッコ・スラヴァキヤは人口一千万、海こそないが最大の富源地を領有するとなつて居る。此の間、海岸も無く、富源も無い人口六百萬の貧弱國が如何にして此等の雄邦と相對峙することが出来ようか。又、從來の統計表によると、奥國では住民の食料の五割を自給し得るに止り、他は悉く之を隣地に仰いで居る様な次第である。例へば馬鈴薯は之をガリシヤ及ボヘミヤに仰ぎ、牛肉類は之を匈牙利に仰ぎ、砂糖は之をボヘミヤに仰ぎ、豚肉は之を塞爾維に仰ぎ、豆類は之をクロアチヤ及ビダルマチヤ等に仰いで居つた。又、石炭は波蘭及ビボヘミヤに仰いで居つたのである。獨系奥地利人が治者階級を構成して居た當時は差支もなかつたのであらうが、最早形勢一

變の今日に於ては、奥地利人たるものは、決して此の儘晏然たることを許さない。然らば奥國の前途に横はる新發展策は何んであらうか。活路を窮地に求むる策は何んであらうか。曰く奥地利を含むダニユブ聯邦の組織、曰く獨逸との合併より外に活路はあるまい。

ダニユブ聯邦の計畫

この計畫には大小兩案がある様である。小案は奥地利、チエッコ・スロヴァキヤ、匈牙利、南スラブ諸國を聯合せしめ、場合によつては波蘭をも加へんとするものである。大案は此等四國若しくは五國以外に羅馬尼をも加へ、場合によつては希臘、勃牙利等をも加へて巴爾幹諸邦をも含む東歐聯邦を作らんとするものである。然るに羅馬尼、希臘、塞爾維、勃牙利の様な犬猿も管ならぬ國と、又、王政を採用せる邦國と共和政の邦國とを、同じ聯邦に編入することの困難なのは瞭々たる所で、恐くは大案は問題にならないことであると考えざる可い。小案は相互の同情に鑑み、又、奥地利の將來を解決する問題として多少有望な案であると思ふことが出来る。

先づ、舊奥國はダニユブ河を中心とし、地理的統一を有つて居る。又、其の經濟生活も多年歴史的關係の賜として、諸州相依賴するやうに出来て居る。諸州が分

裂し無い前には種々の非難もあつたが、國土崩壊した今日から見ると、舊帝政はなかく用をなしたと言ふことが感ぜられる。さてこの聯邦を作ることによつて、直接地利に最も利益が多いかも知れないが、他の諸州だつて必ず大に利益する所があるに違ひがない。例へば、埃都維也納は匈牙利の境からも、チエツコスロヴァキヤの境界からも、僅かに十四哩の距離にあつて、各鐵道も此處に集中し、伯林とも、巴爾幹諸邦とも、聯絡を有つて居るので、商業上、交通上重要な地位を占めて居る。依てダニユブ同盟が成立すれば、維也納は附近諸邦の交通經濟上の中心都市をなし、同盟國相互の利益を増進する上の利便がある。これ埃國がこの同盟に同意する第一の理由である。

次に、此等の諸邦が聯邦を形成することになつたならば、今日まで相互に領域争ひの爲めに醸した禍根を除去することが出来るであらう。殊に、最近、チエツコスラヴァキヤ及びユーゴースラブの如きは、盛に國土膨脹熱にうかされ、無暗に獨系埃地利人、マジヤル人の居住地域に侵入し、之を占領しようとして居る。この紛糾錯雜して居る問題を比較的容易に解決する手段は、此等の諸國をして聯邦を組織せしむるのが最もよいと考へられる。

翻つて之を聯合國の立場から見ると、彼等は以上の二點よりも更に重大な利益がダニユブ聯邦案に附添ふことを發見するであらう。即ち之に依つて埃獨の合併を防止し、以て獨逸將來の發展を阻止することが出来るからである。顧るに、聯合國は獨逸から人口僅に六百萬内外の領域を奪つて之を弱小にする策を執つて居るけれども、若し人口六七百萬の新埃地利が獨逸に合併することになると、依然として獨逸は七千萬の人口を有する事になつて、聊も人の數に於てこの損耗は無い事になる。殊に維也納を獨逸に保有せしむることは、云はゞ今回の大戦を醸した獨逸東進策の進路を開いてやる様なものである。聯合國は瞿然として獨逸合併を忌みつゝあるのも、洵に尤も千萬の事と言はねばならない。殊に今回の大戦で最も苦痛をなめた佛蘭西は、甚だしく此の合併を憂懼して、上下異口同音に獨逸合併に反對して居る。之が爲めには、ダニユブ聯邦を組織せしめることによつて、埃地利の弱小を救ひ、獨逸の發展を阻止しようとなさへ企て、居るものがある程である。

然るに一面五大國の一として雄をアドリアチック海に稱へて居る伊太利は之に大反對である。なんとなればユーゴースラブ國はアドリアチック海に於ける

伊太利の敵手である。従つて奥地利其の他を含む諸邦と共に強大なる聯邦を作
ることは、徹頭徹尾伊太利の欲しない所である。今後、若しこの問題が愈々發展する
曉は、伊太利は必らずや之を邪魔するに違ひがない。

かく考へて見るとダニユブ聯邦は各方面に長所は有つて居るが又故障も多い
のである。依て其の實現は容易に望み得べき事でない。かの南スラブ民族の國
家組織に際しては、舊奥匈國領内の同胞だけに満足せないうで、廣く塞爾維、黒山兩王
國の同胞をも結合して國家を造らんとしたのである。終かうなつて來たので、舊
奥匈國の歴史は滅茶苦茶となつたばかりでなく、奥地利人や匈牙利人は勢力比較
上、微弱となつたのである。依て此事實に徴するも、奥國は此際更にダニユブ同盟
に同意する事は自國民の勢力伸張上顧慮すべき點が多いのである。又、チェツコ、
スラヴアキヤ國が奥國を極端に排斥して、スラブ系を中心とする他種の聯邦創設を
計畫しつゝある如き事實もある。大統領たるマサリツク博士の如きは熱心な奥
地利排斥論者であつて、氏は「スラブ諸國は將來獨逸及び獨逸人の膨脹政策、軍國主
義に反對する目的を以て、對抗的聯合を造らねばならぬ」と主張して居る程である。
聯邦組織上最も有力な發言權を持つて居るチェツコ、スラヴアキヤの態度が斯くの如

き有様であるから奥地利を包容するダニユブ聯邦案の實現はまづ困難と見なけ
ればならない。ダニユブ聯邦策の形勢が、かく奥地利に非なるものがあるとする
と、勢奥地利の前面に開かれる進路としては獨逸との合併があるのみである。

二、匈牙利共和國

概説

舊匈牙利は面積十二萬五千方哩、人口二千百餘萬を有して、一八六七年以
來奥地利と聯合して勢を中歐に振つて居つたが、今回の戦亂によつて兩國全く分
裂し、講和條約の結果によれば、トランシバニア地方をルーマニアに、バナード地方
は其の民族自決によらしめ、カルパチヤ山脈の西部のスラヴアキヤ人の居住地方は、
これをチェツコ、スラヴアキヤ共和國に割譲し、南部のスラボニア、クロアチヤはこれを
ユーゴスラブ國に割譲することになつた。かくして匈牙利は僅かに約七萬方
哩の面積と、約一千萬の人口を有する小弱國に縮少してしまつた。

匈牙利は北はカルパチヤ山脈、東南はトランシルバニアアルプ山脈、南はバルカ
ン山脈によつて圍まれて居る一大盆地で、雨量が少く處々に草地がある。之をブ
スタと稱して牧場に利用されて居る。南獨逸から流れて來るダニユブ河は數

多の支流と共に國の中央を貫流して、交通の便灌漑の利が甚だ大である。平原地には農業牧畜が行はれ、殊に麥、煙草の産が多く又、牛、馬、羊、豚等の飼育が盛である。鑛産には鐵、岩鹽等の産がある。

沿革

此の國はもと埃地利と合併して、埃地利、匈牙利帝國と稱し、埃地利の帝王が國王となつて統治して居つたが、今次の世界大戰の失敗は、埃匈國の崩壊となり、匈牙利は分離して共和國となり、カローリイ伯臨時大統領となつて聯合國と握手せんとした。然るに聯合講和會議は豫期に反して、匈牙利領土を非常に削減したので、彼は一九一九年三月二十一日職を退き、政權を舉げて社會黨及び共產黨に譲つた。是に於て勞兵會長アレクサンドル・ガルバイ新政府の首腦者となり、過激派のベラ・クーンは外相となつて、露西亞の過激派と氣脈を通じ、頻に國內に過激派主義を宣傳して、聯合國に對峙しようとした。然るに其の後の形勢があまりに過激化した爲めに、國民は却つて秩序恢復を願ふ様になつた。そこで聯合軍はすべて匈牙利の鎮定をヨセフ太公に委ねた。過激派政府倒れてヨセフ太公一時政權を執り、其の内閣が成立つたけれども、巴里會議はこれを承認しないために、又其の内閣が倒れ、首相ロヴァクチー、外相アンドラシイ伯を首領とする新内閣が出来た。し

かし外にはチェッコ・スロヴァキヤ、ルーマニヤ等の壓迫があり、内には過激派の事を謀らんとするあつて、何時完全なる統一に歸すべきかが今日の所では不明である。最近に於て太公政府に陸相であつたフリードリッヒ氏が新に内閣を組織したが、今猶政界の分野が明かでない。

亞細亞人の歐化した匈牙利人

匈牙利に住んで居るマジヤール人は、匈牙利人とも云つて居るが、本來この民族は土耳其人や芬蘭人と同様に、亞細亞民族であつて、今から千年ばかり前にウラルの險を越え、更に遠くカルパチヤ山脈を越えて匈牙利に落着いたものである。この民族は亞細亞人種であると云ふことから我が日本人を非常に慕つて居るとのことである。同じ亞細亞人種でも日本人には少しも似て居らない。却つて生理學上解剖學上純然たる歐洲人で、眼は引込み鼻は尖つて居つて歐洲人に近い。尤も千年も前は日本人に似て居つたことであらうが、氷い中には各種の民族が入り雜つた爲めに今日の様な有様になつたのである。併し彼等が使ふマジヤール語は亞細亞語即ちウラル・アルタイ語で、言葉を並べる順序は日本語と同様である。例へば歐洲語では、私は本を讀むと云ふ時には、私は讀む、本をと云ふ順序に並べるが、マジヤール語では日本語と同じやうに、私は本を

讀むといふ様に言語を並べるのである。

文化の程度は附近の諸國と同じく頗る進歩し、宗教は基督教以外のものは無い。生活の方法は歐洲人と全く同様である。此の國は一時、奥地利の盛な時代は、随分壓迫を受けたものであるが、十七世紀頃になつて國力の恢復を圖るには、マジヤールの本國語を普及せしめねばならぬと云ふので、言葉の獨立を圖つた爲め、追々國勢も發展して來たのである。人口は目下約一千萬人あつて、この民族は周圍の強い民族に刺戟されて發達した爲めに、戦争前までは勢力が頗る強く、奥地利のゲルマン人と拮抗して居つた位である。今日は、とう／＼孤獨の立場に陥り、國民は漸次過激化されつゝあるのである。

過激化されつつある匈國の國情

匈國は革命後、奥國と分離し幾多の曲折を経て、過激派政府の手に渡つたのである。匈國過激派の首領ベラクソン氏は露國過激派政府と提携して、他國の資本階級並に帝國主義に對して武装同盟を締結し、露國中央國民委員長レーニン氏を仰いで、萬國無産階級の元首とし、過激派政府は直に國內の社會主義化を圖り、貧民階級の政治の實現に努めたのである。かくして、匈國は今や第二の露國たらんとする形勢が表はれて來た。歸郷兵は露國過

激主義にかぶれ、耕作に従事することを肯せず、之等の兵士は貴族の土地を奪取して盛に暴行を働らいたのである。従つて社會は物騒を極め、富豪は一夜多額の報酬を支拂つてまで歸休兵士の夜番を依託する様な有様で、一般市民は當時寧ろ秩序ある聯合軍隊がブダペストを占領せんことを望んだ程である。

ベラクソンの政府は、社會主義化を以て其の政綱とし、各浴場は勞働者小兒の爲めに公開され、法庭は廢止し志願兵は九十弗の俸給を受け、株式取引所は閉鎖されるに至つた。社會の事情は斯くの如く日々困難を極め一般の世情は不安に満ちて居る。ベラクソン氏がブダペストに於て狙撃せられた後、ヨセフ・フリドリツヒ政府の時代に入つたが、依然として社會的不安は、寧ろ加重する許りてブダペストは、再び重大なる饑饉に襲はるゝこととなつた。而て過激派は機に乗せんと待ち構へて居る。殊に羅馬尼軍のブダペスト撤退後は益々不穩の兆を呈して來たから、匈國の前途も亦暗澹たるものである。

三、 チェッコ、スラヴァキヤ共和國

概説

舊奥匈國の瓦解に瀕するや、ボヘミヤ及びモラヴィヤのチェツクスロヴァキ

ヤ族は、一九一八年十月十九日ブラীগに共和國の獨立を宣言した。元來此の族はスラブ族で、昔から塊地利の支配を喜ばない。今回の戦亂には常に獨立を企て居つたが、遂に聯合側と氣脈を通じ、ホヘミヤを根據とし、チエツク族が勢力の中心となつて獨立するに至つたのである。

チエツク・スラヴ・キヤとは、チエツク人の多數住居して居る塊地利の北方に位するボヘミヤ・モラヴィヤ及び塊領東シレジャ地方と、同民族なるスロヴァツク人の住地なる匈牙利の北西部を包括した領域を謂ふのである。その面積はチエツク人の住地なるボヘミヤ・モラヴィヤ及び東シレジャの約三萬方哩と、スロヴァクス人の住地であるスロヴァキアの約二萬五千方哩とで、總面積は五萬五千方哩に達して居る。人口數は未だ不明であるが、兎に角チエツク・スロヴァク族は合計約八百餘萬と云はれて居るから、之に領土内に住んで居る獨逸系塊地利人やマジヤール人などを合はすと大約一千二三百萬にも及ぶであらう。

この國は波蘭・匈牙利塊地利及獨逸の間に介在する新興國で、チエツク族を主として、スロヴァク人これに次ぎ、其の他ポーランド人、獨逸人等を含む共和國で、現在は聯合國の後援によつて共和國を成立して居るが、地形上、人種上、將來果してよく國

家的統一を保持し得べきや否やが問題である。

チエツク・スロヴァクの兩氏族は共に同一系で、教育が普及して居つて、何れも舊教を信じて居る。該國はエルツリーゼン及カルパチア等の山脈が國境を限り、ボヘミヤは盆地をなして居る。土地一帯農産に適し、中部歐羅巴中最も豊沃な地で、麥類・馬鈴薯・甜菜・ホップ等の産が多く、従つて工業發達し、製糖業、ビール醸造業、硝子製造業等が殊に盛んで、ブラীগがその中心をなして居る。又、森林制度よく發達し、山地には森林繁茂して良材を産すること多く、其の他、ボヘミヤ・シレジャ等の獨逸との界には多く石炭を産し、カルパチヤ山脈地方は金銀岩鹽・ラヂウム等の産出を以て名がある。要するに新興國としてのチエツク・スラヴ・キヤは、新塊國に比較して、遙に富源の地を占め、優に經濟上獨立をなし得るだけの生産地を領有して居るのである。

チエツク・スラヴ・キヤ共和国獨立の顛末

本來チエツク族は今回の戦亂を機會として、聯合諸國の援助の下に、その獨立の目的を達しようとし、國の内外に在る同民族が相呼應して努力したのである。最初、彼等は巴里にその施政機關を樹立し、有名なマサリック博士がその首相となり、外交にはベネス、軍事にはステファニアニツクが

専らその任に當つて、聯合諸國よりは、その對獨同盟國の一員たることの承認までも受けた。又、ボヘミヤに於てはクラマンルツが獨立運動の中堅となつて奔走したのである。

かくする中に獨逸側退敗の結果、休戦條約が成立した。これと同時に即ち一九一八年十一月十四日チエック人等はボヘミヤの首府ブラーグに國民議會を開き、マサリツク博士を大統領に選舉し、チエック・コスラツクキヤ共和國の成立を宣言して、各國に通牒を發した。應てマサリツク博士は十二月二十一日を以て盛大なる儀式の下にブラーグに入市し、翌二十二日憲法に對する宣誓を行ひ、茲に多年の宿望たる獨立を遂げ、新國家の建立を見るに至つたのである。

然るにボヘミヤ住民の約三割強を占むる獨逸系奥國人は、自決權を高唱し、自ら政府を樹立して之に對抗した。依つてチエック人は兵力に訴へて、その政府部員を國外に驅逐し、更に進んで、獨逸領カールスバード、テツセン及びライヘンベルグ等の地に軍隊を派遣してその占領に着手した。

之が爲めサクソニヤとの衝突を惹起せんとしたが、當時獨逸は國內に於ける革命的擾亂の爲めに、之を顧る邊がなかつたので、已むを得ずチエック人の爲すが儘に

放任した。一方ボヘミヤに於ける獨逸人も亦、到底母國の援助を受くる望がないので、寧ろチエック人と妥協して、その土地に永住するの得策なることを悟り、爾來反抗運動を中止したのである。

チエック人はそれのみにては止まない。更に匈牙利に向つても亦攻勢をとり軍隊を派遣しスロヴァツク人の住居地を占領して、愛國的宣傳に努めた。こゝに於て、當時の匈國首相カローリ伯はブラーグ政府と妥協せんと欲し、スロヴァツク人の爲めに、特別行政機關を設置し完全なる自治を與へ、唯、宗主權のみを匈國の手に收めようとした。然るにチエック政府は斷乎として之を拒絶し、遂に匈國政府をして、チエック人のスロヴァツク住地を併合することを承認せしめ、ドナウ・アイベル及ウングの三河流を連絡する線を以て假國境とし、茲に宿年來の同スラブ族合併の目的を果したのである。

更にチエック人は奥國に對して石炭の補給を杜絶し、兵力を以て同國領シレジャに浸入し、且つ普國領シレジャに對してはライヘンベルグの鑛山地方、グラツツ、ノイスタツト、ヴァルデンベルグ及ヒルシエンベルグ等を占領した。其後チエック人は奥領シレジャに於て波蘭軍と衝突し、又、匈牙利と紛擾を重ね、遂に巴里講和會議の

結果、前述の國土、人口、政體を有する一新興國として獨立するに至つたのである。

チェコスラヴァキヤの國情及將來 チェコスラヴァキヤは、今回公然聯合國側より、その獨立を承認せられ、巴里會議にも全權委員を派遣し、又我が國にも既に代理大使を送つて來た様な次第である。吾人は之を一新興國として、將來交際せねばならぬことになつて居る。

本來チェック人はスラブ民族であつて、西曆紀元後第五世紀の中頃に、始めてボヘミア地方に移住し、その頭領の名を取つてチェック人と呼ぶに至つたのである。中古時代は立派なボヘミア王國の名を以て榮え、光彩ある文物を有して居つた。宗教改革の先驅者として歴史に有名なヨアン・フツスの如き宗教家や、卓越せる思想家や政治家を出し、特に詩人や音楽家には古來傑出した天才を輩出して居る。

加之、ボヘミアは奥國中で最も人口が稠密であるが上に、地味が肥沃で、物資が豊富である。特に鑛産物に富み、製造工業に於ては、奥國中第一として推されて居る。その首府のプラハの如きは形勝の位置を占め、風景の明媚を以て聞えて居る。

かやうに光彩ある歴史と、有利な地理とを有し、然も天恵に浴することが頗る多いのであるから、此の地の將來が如何に有望なるかは言ふまでもないことである。

併しながら唯こゝに疑問とするのは、ボヘミアが斯くの如く製造工業に於て著しき發達を遂げたのは、一に此の地に住する獨逸系奥地利人の力が與つて大なるものである。將來チェック人のみの力を以てその發達を遂げることが果して出來得るであらうか。而て、又、此の地は四方陸地を以て圍まれて公海に出る門戸がない。何れへ出るにも他國を通過しなければならぬ。それに、奥地利が此の地を失ふたのは、經濟上に於ける大いなる致命的打撃であるし、又此の地は獨逸特に普魯西と奥地利との連絡を斷絶する一大障壁となつたのであるから、將來紛擾の種と爲る恐れがあるのである。従つて此の新興國の將來も今日の處未知數に屬するのである。

けれどもボヘミアは、三面連山を以て圍繞する天然の要害地であると同時に、獨逸の中間に介在して、伯林から奥都に至る直通道路の中央に位して居る。曾てピスマルクが、此の地を扼するものは中歐を制御し得るものであると云つて居る様に、戰略上、形勝の位置を占めて居るのである。一度、此の地が敵の手に歸したならば、獨逸兩國はその聯絡を絶たれ、獨逸の企圖せる中歐連合策の如きは根柢より破壊せられねばならぬのである。之が、即ち英佛その他の聯合國が此のチェコスラ

ヴァキヤの建立に對して、援助を怠らなかつた所以であつて、實にこれは歐洲政局上、極めて重大なる意義を有して居るのである。要するにチェッコ・スラヴァキヤの將來は、なほ幾多の希望と數多の疑問に充ちて居ると云はねばなるまい。

四、ユーゴ、スラブ王國

概説

今回の戦亂に乘じ、チェッコ・スラヴァキヤと同様、埃匈國から分離して、塞爾維、黒山國の二王國を中心とし、併かも多くの新興國が時代の潮流に順行して、共和政治を布き、大統領を選擧したのに、超然として君主政治を採擇して、同一民族の下に新に一國家を建立せんとして居るものは、即ちユーゴ・スラブ國である。民族は所謂ユーゴ・スラブ族で、塞爾維人・クロアト人及びスロヴェン人の三種に大別することが出来る。セルヴ・クロアト・スロヴェン王國の名即ち之れから出て居るのである。

所がまだアドリヤチック海沿岸の境界に關しては、伊太利と係争中で、其境界が判然しないが、大體に於て塞爾維・黒山國・ボスニヤ・ヘルゼゴヴィナ・クロアチヤ・スラヴォニア・カルニオラ・ダルマチヤ・イストリヤ等を合はしたもので、南スラブ國の要求する面積から言ふと九萬二千方哩で、丁度我が本州と九州とを併せた程の大きさになつて居る。その内イストリヤ・ダルマチヤの一部を伊太利が要求して居るから、之等の係争地を除くと、約八萬五千方哩の面積を占めることになる。人口は約一千二百萬餘で、人口を民族に區別すれば其の百分の九十八までが純スラブ人である。ユーゴ・スラブの名稱の起つたのも全くこれに基くのである。

抑もこの塞爾維人其の他のスラブ民族が、巴爾幹半島に來往したのは、第六世紀の頃であつたが、其の四隣には征服を好む希臘人・勃牙利人・獨逸人・マジール人等が割據して居つた爲め、且つ、其の位地が西歐と近東との中央に介在した爲め、彼等は絶えず戦争に従事して殆ど寧日がなかつた。第十四世紀に至つて塞爾維は真正なる國家を形成しようとする矢先、突如として土耳其の大侵略に遇ひ、彼等は頑強に抵抗したが、遂に刀折れ矢盡きて降伏した。爾來土耳其の屬領となること五百年、第十九世紀の初め再び獨立したが、小國の悲しさに常に獨逸人から脅威され壓迫を受けたのである。塞爾維と黒山國に居るスラブ民族は獨立することが出来たが、ボスニヤ・クロアチヤ・ダルマチヤ等に移住したスラブ人は、依然として埃地利や匈牙利の羈絆を脱することが出来なかつたのである。南スラブ人を糾合して

南スラブ國を建設しようとしたのは、獨り塞爾維人ばかりでなく、南スラブ人全體の熱烈なる希望であつたのである。

もとよりユーゴ・スラブ國は塞爾維、クロアチヤ、スロヴェニヤの三國民が合體したとはいふものの、寧ろ、塞爾維王國の擴張されたもので、即ち大塞爾維主義の實現せられたものであると見なければならぬ。

この國は山岳多く、海岸にはチナルアルプ山脈あり、東にバルカン山脈が走つて居る。且つアドリヤチック海岸は石灰岩の山脈が多く、所謂カルストと云ふ荒地をなして居る。けれども氣候溫暖なる爲め、山地には森林よく繁茂し、ダニユプ河の支流たるモラヴ及びザヴ河岸の平地には農業よく行はれ、葡萄、オリーブ、其の他麥、玉蜀黍及び果實等を産することが多い。又、牧畜諸所に行はれ、礦産物としては水銀の名が聞えて居る。要するに該國は獨立の一國家として國土人口生産等に於て優に獨立の資格を所持して居ると云ふことが出来る。

ユーゴ・スラブ王國成立の経緯

南スラブの獨立問題はセルビヤを中心として大塞爾維主義のもとに畫策せられて居つたもので、このスラブ民族統一問題は、既に多年埃匈國の運命に關する最も重大なる問題として知られて居つたのであ

つて、今回大戦亂の導火線たる例のサラエボ事件の如きは、全く之に基因して居るのである。元來南スラブ人は埃地利帝國のもとに支配せられるのを深く思はなかつた。塞爾維を中心として大スラブ國を、此のバルカン方面に建設しようとの秘密の計は早くから行はれて居つた。大戦中も機會あらば、獨立を宣言しようとして居つたが、遂に一九一八年の末、同盟軍の形勢が非であつて、獨逸側が戦敗の結果休戦を哀求する様になり、アグラムを中心とせるクロアチヤ人先づ他に卒先して獨立を宣言し、統一運動を起した。すると他の南スラブ族であるセルビヤ、モンテネグロ、ボスニヤ、其の他の諸地方又、之れに和し、遂にユーゴ・スラブ國の獨立を宣言するに至つたのである。而てクロアチヤのコロセツク氏をその首班に推し、その管理の下にスラブニヤ施設機關とボスニヤ・ヘルゼエゴヴィナ特別行政機關とを置き専ら統一運動に努力した。かくして塞爾維王國との間に合併に就ての協議を進め、アグラム政府とベルグラード政府の商議の末、(一)兩國の國境と關稅を廢止する事、(二)アグラム、ベルグラード兩政府の上位にあつて、之を統率すべき權能ある共通政治機關を創設し、外交及軍事を處理せしむる事、(三)以上の事項を實施する爲めに先づ議會召集の準備に着手する事等を決議したのである。かくして伊國

を初として、聯合國の承認を得るに至つた。

然るに政體問題に關しては共和制を主張するものもあれば、又舊セルビア王家の治下のもとに立憲君主制を採用せんと主張するものがあつて、相互の意見が容易に一致しなかつた。又、宗教問題にしても塞爾維人とクロアイト人の間に衝突を生じ、即ち前者は希臘正教を、後者は羅馬加特力教を以て國教としようとして互に争ひ、加之、雙方の有力な政治家の中には、共通政治機關の設置すら反對するものが尠くなかつた。之れが爲め合併の問題は一時行惱みの委となつた。然るに四圍の情況が是非相糾合して鞏固な國家を建立する必要を促したので、ボスニヤ・ヘルゼゴヴィナの特別施設機關は先づ塞國政府に向つて合併を要請し、次でアグラム政府の代表者は塞國の皇儲アレキサンドルに謁見して協議を凝らした。又、黒山國は同國王室を廢して塞國現王室の治下に合併すると決議した。茲に合併の機運は漸く熟し、遂に舊塞爾維皇室カラゲオルゲヴィッチ王家の治下に、立憲君主政體をとり、全ユーゴ・スラブ族を統一することに協定し、十二月一日を以てベルグラードに於て統一國家の成立を公式に宣言したのである。一方宗教問題は、羅馬加特力教徒と希臘正教徒間に妥協を遂げ、平等の資格を以て兩宗教を同時に實

行し得る事に協定し、從來の宗教的反感を一掃することに決した。依つて米國を始め英佛等の聯合國はユーゴ・スラブの統一及獨立を承認したのである。南スラブ族の統一かくまで進行して來たのであるが、永い間の歴史的及び地理的、宗教的の複雑なる關係は、今尙ほ幾多の問題を残して居るのである。

南スラブ國の内訌と國情

新興國たる南スラブ國は、幾多の難問題を排し、種々の經緯を経て、統一を企圖して來たのであるが、尙、ブユーメ港及びデルマチヤ處分に關して伊太利と激烈なる争議を惹起しつゝあるのである。従つて全國民の結合を要することの最も緊切なる時機なるにも拘らず、早くも一九一九年七月にはセルビア人對クロアイト人の争鬭が表はれた。而てクロアイト人は各都市に革命運動を起し、遂に斯る企圖を鎮壓する目的を以て駐屯してあつたセルビア軍隊と隨處で衝突した。殊にアグラム及びヴァラスデンの兩市は最も騷擾を極めた。又、マールブルグに於ては南スラブ兵はセルビア軍の配下に立つを喜ばない爲め遂に大衝突を演じ、多くの死傷者を出した。元來セルビア人とクロアイト人とは人種上に於ては殆ど同一で、スロヴェン人に比べると一層近親の間柄であるが、セルビア人が多く希臘正教徒なるに對して、クロアイト人は多く羅馬加特力教徒で、

宗教的反感があるばかりでなく、クロアチア人等は、南スラブ國形成以來セルビア人が事毎に専恣の態度に出でんとするのを憤る念が深かつた爲めである。しかしこれは成功の殿堂に達する道中の一喜劇で、結局は大塞爾維主義のもとに聯邦制度が完備するであらう。

更に進んでこの新興國の國情なり將來なりを討ねて見ると、ユーゴ・スラブ國の主要部である塞爾維も黒山國も等しく農業國で、玉蜀黍・小麥・大麥・生果及家禽等の産出が多い。塞爾維に較べて黒山國の農業は稍原始的ではあるが、原野には菁々とした葡萄の蔓と綠滴らんとする橄欖の葉が繁茂し、附近の地方も概して農業が廣く行はれて居るとのことである。又、工業の二資源とも云ふべき石炭と鐵の産出も相當に豊かで、殊に幸にも新興國の一部たるボスニヤ及びヘルゼゴヴィナには資源に豊かな鑛山が到る處に散在して居る。さればユーゴ・スラブにして此等の資源を利用すると共に未發の資源を十分に開拓する様になつたならば、將來、又、工業國として立つことが出来るであらうと考へる。

此の如く從來よりも塞爾維の農業牧畜を一層盛んにし、黒山國の葡萄栽培を奨勵して佳良な葡萄酒を醸し、ボスニヤの石炭と鐵とを採掘して、製造業を勃興せし

むると共に、此等の農産物工業品を輸出する貿易港を領有することが出来たならば、ユーゴ・スラブの將來や、寔に注目すべきものがあると思ふ。かやうな事情からして講和會議に於てもアドリヤチック沿岸のフューメ港とダルマチヤ等の地が伊太利との間の係争問題になつて居るのである。今後ユーゴ・スラブ國は如何に曲折して行くかは知れぬが、ダニユブ聯邦が成立するにしても、アドリヤチック海に手足を伸べるにしても、この國の將來にとつては極めて有力なる地位を占めるものであると思ふ。

五、伊太利の參戰と要求地

伊太利の參戰

伊太利は三國同盟の一員として獨逸兩強と防守同盟を約し、三締盟國が他強國の爲めに攻撃せられて餘儀なく開戦する様になつた場合には、互に兵力的援助を與へて協同參戰すべきことを約して居つた。之と同時に伊太利は英佛露三強國とも親善の關係を結んで、地中海の現状維持について締約するところがあつた。

然るに伊太利にとつて最大の利害關係のあるのは、地中海方面である。此の點

から見ると獨逸は伊太利の安全と發展とを企畫する上には大なる保證とならぬ。却つて地中海の制海權を把捉して居る英佛兩國に接近するのが利益であるし又、露國と提携することによつて、埃地利がバルカン半島に勢力を伸張し、アドリヤ海の東岸に南下の歩を進むることを抑制し得る利がある。加ふるに伊太利の野心はバルカン半島の西部に勢力を扶殖して、アドリヤ海の制海權を握り、之を伊太利の領海とし、更に埃匈領内に於て、伊太利人の存在して居る地方を併合して、國民的統一を完成しようとしたのである。こゝに於て埃匈國とは利害全く相背馳するものがあるので、戦亂の勃發した當時は、伊太利は先づ平和の維持を唱へ、中立を宣言して、暫く形勢を觀望して領土擴張の國民的野心を遂げ得べき機會の到るのを待つたのである。かくして先づ伊太利は埃匈國に對して左の條件付中立を強硬に申出た。

- 一、埃匈國はトレンチノをイタリヤに割讓すべく、その境界線は一八一一年當時のイタリヤ王國のそれにして、即ち一八一〇年二月廿八日のパリ條約後に於けるものたるべきこと。
- 二、イタリヤの東境を更めて地を増し、ガラゲスカ、ゴリツツア等は割讓地の中に加はるべきこと。
- 三、トリエスト及び附近の地を以て獨立國となすこと。

四、ゲルマチヤ近海の諸島をイタリヤに割讓すべきこと。

五、イタリヤは如上の割讓地を直に占領し、埃匈國はトリエストより官吏及軍隊を撤退すべきこと

六、埃匈國はアルパニヤに對するイタリヤの主權を承認すべきこと。

されど埃匈國は言を左右に託し容易にこの要求に應ずる意がなかつた。これが爲に伊埃間の交渉は、動もすれば破裂せんとする狀況であつた。こゝに於て獨逸は大局の利害より見て、雙方の間を妥協せしめ、以て伊太利の協商國側に走らうとするのを防止することに力を用ひ、埃匈國に向つて出來得る限り讓歩すべきを勸告したのである。他方協商側に於ては、既に伊太利の參戰に關する密約が成立して居つたので、伊太利は獨逸兩國政府が要求を容れない場合には直に起つて聯合側に加はる決心であつたのである。

然るに埃匈國政府は、之に應じ難き所以を辯明して時日を経過せしむることに努めた。一方伊太利國內の輿論は既に政府を助け戦争に参加し、此の機に乗じて領土膨脹の野心を遂げんとすることに熱中して居つたので、獨逸の勸告によつて提供した最後の讓歩條件があつたけれども、時機晚く、遂に伊國主戰黨の勝利となり、一九一五年五月二十三日正式に埃匈國に向つて開戦した。獨逸との間には互

に宣戦することはなかつたが、ドイツ特派大使も埃匈國大使と共に去つて、獨伊間の國交は終に斷絶するに至つたのである。

伊太利の要求地

伊太利が聯合國に參戰すると間もなく佛英露と結んだ秘密條約が、一九一七年十一月ベトログラードで發表された。其の傳ふる所に依れば、條約は一九一五年四月二十六日ロンドンに於て英佛露伊間に調印されたもので、次の九ヶ條からなつて居る。

- 一、各國互に策應する爲に軍事協約を結ばんことを定め、英佛海軍は伊國が埃匈國海軍を撃滅するまで援助を與ふべきこと。
- 二、平和克復後は伊國はトレンチノ、ブレンネル越に至る南チロールの地、トリエスト、イストリヤ、ダルマチヤ、其の近海島嶼、ザアロア及びドデカネス諸島を占有すべきこと。
- 三、アルパニヤが自治政府を造る場合には、伊國は其の外交を管理すること。然れどもアルパニヤの一部がモンテネグロ、セルビヤ、ギリシヤに分割せらるゝ場合には伊國は之に反對せざること。
- 四、英佛露は伊國が地中海に於ける政治的勢力均衡に利害を感ずることを認め、トルコ領分割の場合には伊國は英伊協定に依つて特別の利權を認められたアドリヤ州附近の地を獲得する權利を有することを承認すべきこと。
- 五、伊國はローザンヌ條約に依て、トルコが享有せるリビヤに於ける權利を有すべきこと。

六、英佛がアフリカに於てドイツ領を合併する場合には、伊國も其の領土を擴張する權利を有すること。

七、伊國はアラビヤに於ける回教聖地獨立に同意すること。

八、英國は五千萬磅の伊國借款の爲に便宜を計ること。

九、佛英露は法王の講和運動或は之に關する問題に容喙するを妨害すること。

伊太利は以上の如き秘約のもとに三國同盟を脱して聯合國側に參加して、戦争終了の曉はチロール州、トリエスト市及び其の附近、イストリヤ及び其の沿革の島々、ダルマチヤの大部其他各地に於ける勢力權利を獲得しようとしたのである。

幸、戦争の最後の勝利は聯合國に歸した爲め、伊太利はトリエストを中心とせる地、イストリヤ州、チロール州、其他ダルマチヤのザラ地方及びアドリヤ海岸に沿へる島々等を領有することになつて居る。加之、アルパニヤに勢力を占め、進んではフェューメ港を要求したのである。かくして伊太利は年來の希望であつたアドリヤ海を自國の領海となし、地中海方面に更に勢力を得ることとなり、やがては民族の統一を圖つて、國民の領土的野心の大部分に満足を與へることが出来たのである。

フェューメ問題

フェューメは舊匈牙利クロアチア州のアドリヤ海岸の一にして、

伊太利人が多數住居して居る唯一の港である。伊太利は今回の戦勝に乗じ、人口多數を占むるを口實として、此處に經濟的利益を扶殖し、アドリヤチック海に勢力を得んとして一九一五年英佛伊秘密條約を楯として飽までもフューメを要求したのである。是に於てユーゴ・スラブは大に之に反對し、且つウイソン大統領は嚴然たる態度を以て、フューメは何牙利・ボヘミヤ・羅馬ニ・ユーゴ・スラブ諸國の通商出入口たるべき要地で、伊太利の通商港たるべき地でないと強硬に之を助けた。英佛も亦陰に伊太利の野心を排斥して、伊國を援助することに切實でなかつた。そこで伊國首相オルランドは席を蹴つて斷然巴里を去つて歸國した。翌日外相續いて歸國、茲に講和會議脱退と云ふ講和會議中最も劇的な一幕が起きたのである。之が即ちフューメ問題の紛糾の發端である。

このアドリヤ海問題は從來より伊埃兩國間の係争問題であつて、伊太利は永い間の野心の地である。何故に伊太利はフューメ港の領有を主張して居るか、其の理由を討ぬるに、凡そ次の四點にある様である。(一)は倫敦條約よりして(二)は民族上より(三)は國防上より(四)は經濟上より強硬に主張したのである。

第一、倫敦秘密條約上 伊太利が一九一五年四月に三國同盟を脱退して、聯合國

側に參加した理由は、伊英佛露間に秘密條約が成立し、そして戦勝の曉には伊太利は廣義のイタリヤ・イルレデンタを領有し得るに至るべしとの條約があつた爲めに、アドリヤ海問題が講和會議の最も困難な問題となつて來たのである。然るに當面の問題たるフューメ港に關しては明瞭に伊太利に歸屬すべきものでなく、クロアートの領有に屬すべきことに定つて居つたのである。にもかゝらず伊太利は牽強附會フューメを要求したのである。

第二、民族上 伊太利はフューメに伊太利人の多きを一つの口實として、之を要求して居る。事實舊埃匈國政府の統計に依れば、伊太利人は二萬六千、マジヤール人六千、セルボ・クロアイト人一萬五千、其他三千と稱し、マジヤールの統計に依ればセルボ・クロアイト人二萬八千六百、伊太利人二萬四千二百、マジヤール人六千と云ふが、現に伊太利に於ても伊太利種が少數なることを認て居る様である。して見ると民族上に於ても要求に十分なる根據がないと言はねばならない。

第三、國防上 過去に於ける伊埃國のアドリヤ海に於ける競争に鑑み、伊太利が埃匈國の没落に際して、獨占せんとする意思のあるのは明なとである。けれども伊太利がフューメ港を占領せんとする様に、それ程國防上重要なものとは考へ

られない。なんとなればフューメは軍港として最も適當な地でもなければ、伊太利人がアドリヤ海岸の軍事上の價値を過大視して居る程の要地ではない。加之講和會議は奥國が同海に設置した諸要塞を破壊し、永久に築城を許さない様な意があるし、南スラブには軍艦を造らないとの意見すらあるのであるから國防上の懸念はない譯である。伊太利のアドリヤ政策からいふも、國防上の見地からするもフューメ領有は決して必須のものとは云ひ得ないのである。

一第四、經濟上。フューメは軍港としては價値に寧ろ乏しいが、商港としては非常に意義がある。伊太利が種々の理由を提供しては居るが、要はアドリヤ海に於て經濟的生命を握らうとして居るものである。從來より伊太利はセルビアがアドリヤ海に接近することを嫌つて、海への出口を否認する政策をとつて來たのである。それが今回南スラブに移されることになるのであるから、伊太利は突如として強硬に現はれて來たのである。けれどもこれは、伊太利にとつては野心の問題であるが、南スラブ國にとつては極めて重大な生命の問題なのである。

要するにこの問題はユーゴスラブ國の貿易權をスラブ人自身が掌握するか否やの問題で、單純なる領土渴望のための争でないのである。殊に同港は匈牙利、

チエッコ、スラヴァキヤ、ユーゴスラブ等のこの方面に於ける唯一の商港で、就中關係の深いのはユーゴスラブ國で、之を得なければ全く經濟的死滅である。加之、將來、ボルドーからオデッサに至る東南歐橫斷鐵道の竣成する曉は、ユーゴスラブは該鐵道の中心を占め、東西交通の中央に位して通商貿易上の利益を得るとなる。此點から見ても、フューメ港を領有すると否とはユーゴスラブにとつて將來國家の運命に關する死活の問題であると言はねばならない。

換言すれば伊太利がアドリヤ海を自國の内海たらしむる希望を實現するに於てはフューメは必要であるかも知れぬが、フューメを有せぬからとて伊太利の國命に影響する様な重大な問題ではない。然しながら、ユーゴスラブの側から云へば、フューメを他國に有たれるのは、彼等の伸びんとする手足を緊縛されるのに等し、國家とし健全なる發達を遂行するとが出来ない様な苦境に陥るのである。ユーゴスラブの講和委員が言つて居る様に、フューメは吾人に缺くべからざるものであるが、伊太利にはかく言ふことが出来ない。吾々の貿易にしてフューメを通過しなければならぬとすれば、吾々の全貿易は伊太利が掌握し、且つ必要に應じては吾々を封鎖するであらう。吾人のフューメを要望するのは、單に便宜上

の問題でなく、主義の問題だ、民族自決の原則よりフューメは當然セルボクロアトスロヴァクに属するものであると唱へて居る。

聯合國が南スラブ國の建設を援助する所以は、南スラブ人が獨立を要求する爲めでもあらうが、之によつて從來世界の禍根であつたバルカン問題に解決を與へ、之を強固にして獨逸の東方政策の防波堤たらしめんとする爲めである。此の重要な使命を有つて居る新國家の經濟的咽喉をば一國の野心の爲めに犠牲にするのは、難て再びバルカン問題に惹き戻すことになるのである。結局は世界的に不利な結果を齎らすこととなるのであると考へる。

其後間もなくオルランド氏は猛烈なる國民の要求と激勵とを其の儘に脊負つて再び巴里に復歸した。一方フューメには國民議會なるものが設立せられ伊太利との併合が宣言された。それが伊太利軍事當局の細工であつたことは明瞭であるが、オルランド氏はこれをも携へて巴里に歸來した。其後各種のフューメ問題解決案なるものが頻として報ぜられた。曰くフューメは自由港たるべし、曰く二三年間自由港とした後伊太利に引渡し、其の代償としてダルマチヤに於て一港を南スラブに與ふべしなどと報ぜられたが、米國政府が此の報道の事實無根なる

旨を發表するに及んで一時立消になつた。かくしてニツチ内閣出現し内外沈黙を保つて居つたその矢先、寢耳に水と驚かしたのが詩人ダヌンチオ氏のフューメ侵入である。

ダヌンチオ氏のフューメ侵入事件

詩人、戯曲家、小説家として知られたダヌンチ

オ氏は突然羅馬東京間の飛行を計畫發表し、そして發動機から途中着陸の地點や、操縦者の人名に至るまで精細に報道した。其後約二月許立つて、突如としてダヌンチオ氏の率ゐる機關銃、裝甲自動車よりなる伊太利軍がフューメに侵入したと報ぜられた。氏はイストラリヤを経て、途中參加したフューメの義勇軍と聯絡し夜に乗じて四十臺の自動車を驅つてフューメに侵入し直に市廳に入つて政權を掌握し、フューメの自由と伊太利合併を宣言したのである。此報を聞えた首相ニツチ大に憤慨し、フューメ市に侵入したのは其權利なくしてかくしたのである。予は重大なる衝突を避くるやう嚴重に阻止せんと欲すると述べ、政府は査問會を開き關係文武官を嚴重に處罰すべき旨を聲明した。一方各種の手段によつて侵入軍隊に對して原隊に歸還するやうに懲通したが、反つて侵入軍に投ずるのが續出して來た。一方ダヌンチオ氏自身はたとひ伊太利王と雖も、フューメ王として來

るに非ずば余の哨兵線を越ゆるとを許さないと聲明し、ニッチ首相の代表者と協議することを拒絶して、堅く侵入を決心したのである。ダモンチオ氏の奇抜なる擧たるや世界の耳目を聳動したことはあるが、到底、聯合國の承認する所の問題でない。却つて伊太利の信用を聯合國に失ふものであると考へる。

其後多少の経緯を経、最近に於ける経過は大要次の様に進行して居る。一九一九年八月以後の形勢は(一)フェューメに於ける伊太利主権を認め、フェューメ港灣及びライバツク鐵道を國際管理の下に置くこと(二)フェューメの完全なる獨立を認めて自由市となして、全部國際管理の下に置くこと、この二説が行はれ、前説は英佛兩國の承認する所となつて居つたが、米國大統領は最近伊太利のフェューメに於ける主権を認めることが出来ない旨を回答して居る。茲に於て英佛兩國も(一)フェューメ及びライバツク鐵道を國際管理の下に置き(二)ダルマチアをザラ港を除き全部之をユーゴスラブに與へ(三)アルバニヤを國際聯盟の下に伊國の委任統治に移すべきことを主張して居るのである。將來如何に落着すべきかは興味のある問題である。

巴爾幹諸國の興亡と 其の解説



第四、巴爾幹諸國の興亡と其の解説

歐洲の伏魔殿と稱せられ東歐のスフィンクスと唱へられるのは實に此の巴爾幹半島である。古來幾多の政治家外交家をして其の心血を注がしめ、君主宰相をして常に嘆息の聲を發せしめても、なほ依然として不可解の問題を残して居るのが此の半島である。然も所謂バルカン問題に一度其の手を觸れる時は、必ず國際間の大紛擾を惹起せずには止まない。此の度の大戦亂の發端も亦此の半島の住民たるセルボ・クロアチヤ民族と塊匈との間の争に起きたのである。

普通巴爾幹半島と云ふ時は、歐羅巴の中原を貫流するダニユブ河の下流以南の諸邦と羅馬尼とを合せた土地で、その面積は歐洲大陸の約十五分の一即ち我が國本土と略ぼ同一の大きさを占めて居る。然るに此の狭小な地域にしかも七ヶ國の小邦が割據して、互に反目軋轢し、各々民族の勢力を擴張して國土を廣めようと云ふ野心を懷いて居る所から、紛擾が常に絶えないのである。それも之れ等の小國間だけの争に放任して置いたならば、何日かその内の強者が勢力を得て、自ら問題が解決されて行くかも知れないが、俗に言ふ子供の喧嘩に親が出ると云ふ様に、

巴爾幹諸國の興亡の圖



その脊後に居る歐洲の列強國が、事毎に容喙干渉し、結局親同士の争となる所から、問題が益、錯雑紛糾して來るのである。今次の世界動亂の

如きは、他にも重大な原因はあるのであらうが、この親同士の争が發展したものであることは明白なる事實である。

巴爾幹は歐洲から亞細亞に渡る關門に當つて居るばかりでなく、地中海の東部に勢力を扶植したものは、亞細亞、亞弗利加、地中海方面に發展するに多大な利益を有つ事になるのである。之を事實に見るも、曾て土耳其がかかる國勢の國家でありながら、よく歐亞弗の三洲に跨つて勢力を保つて居つたことや、露西亞獨逸を始めてとして、歐洲諸強國が虎視眈々としてこの地に勢力を占め様と努力したことは、全くこれを意味するものであると考へる。

従つて諸列國はバルカン小弱國の小競合に乗じて、或は勢力を扶植しようとし、或は之を防遏しようとして、種々の國際問題を惹起したのである。そこで世人はこの地を歐洲政界の噴火口と呼んで居る。今回の世界戰亂は、將に露西亞のバルカン南北縱斷策と獨逸の東西橫斷策、並に獨逸の伯林バグダット鐵道政策と英國の印度經營等の重大なる問題が、遂にセルビヤ人の奧國皇太子の暗殺を動機として、この噴火口より大爆發を始め、其の爆震四方に傳はつて、前古未曾有の世界大戰